

都留文科大学創立70周年記念誌

色とりどりのミライへ。





■ 2017(平成29)年9月26日「5号館」完成



■ 2016(平成28)年3月24日「国際交流会館」完成



■ 2023(令和5)年4月1日
「THMC(Tsuru Humanities
Center)」供用開始





■ 2025(令和7)年11月22日
都留文科大学合唱団
全日本合唱コンクール全国大会2年
連続・通算7回目となる金賞ならびに
文部科学大臣賞(最高位)受賞



■ 2021(令和3)年7月17・18日
「来場型」と「オンライン型」
のハイブリッドで開催した
コロナ禍のオープンキャン
パス

—2025

■ 2025(令和7)年4月29日「つるフィールド・ミュージアム」落成式



学部・学科

文学部



国文学科



英文学科

教養学部



学校教育学科



地域社会学科



比較文化学科



国際教育学科

地域貢献



■ ぶらっとうす(定期開催)



■ 2024(令和6)年7月
第2回ムササビ観察会



■ 2024(令和6)年11月
VR体験・レーザーカッターでデジタル工作



■ 2025(令和7)年5月
市民公開講座
「いきものかんさつは
おもしろい！」

思い出の写真

学生生活



■ 掲示板で時間割を見る学生たち(写真提供:英文学科卒業 早川泰男さん)



■ 1982(昭和57)年 生物実験室(写真提供:名誉教授 森江晃三先生)



■ 本部棟 学生食堂
[1981(昭和56)年 本部棟完成記念冊子より]



■ 本部棟 学生食堂 喫茶コーナー
[1981(昭和56)年 本部棟完成記念冊子より]



■ 1982(昭和57)年度
国文学科卒業
アルバム「群青」
(資料提供:国文学科卒業
加藤和江さん)

■ 1960(昭和35)年
都留文科大学 開学記念手ぬぐい
(資料提供:都留市立都留短期大学
初等教育科卒業 嶋田久江さん)



■ 英文学科
卒業記念文集「ふじ」
(資料提供:英文学科卒業
早川泰勇さん)



■ 桂川祭での紅白歌合戦
 (写真提供: 英文学科卒業 早川泰男さん)



■ 第11回
 桂川祭のお知らせ
 (写真提供: 英文学科卒業 早川泰男さん)

■ 桂川祭(谷村第一小グラウンド)
 (写真提供: 英文学科卒業 早川泰男さん)

大学祭





■ 1963(昭和38)年
桂川祭 仮装行列「鹿児島県人会」
(写真提供:英文学科卒業 早川泰男さん)



桂川祭

■ 桂川祭 仮装行列
「徳島県人会」阿波踊り
(写真提供:英文学科卒業 早川泰男さん)

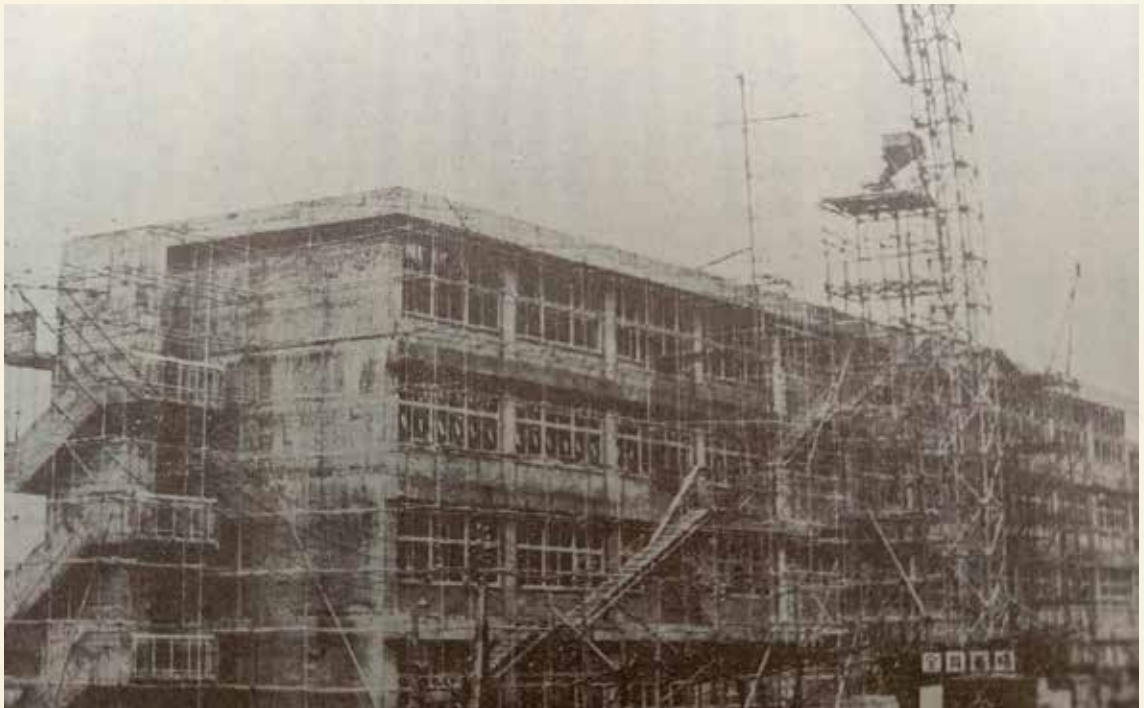
■ 1956(昭和31)年
都留市立都留短期大学
大学祭記念手ぬぐい
(写真提供:都留市立都留短期大学
初等教育科卒業 嶋田久江さん)





■ 1963(昭和38)年 大学正面入口(写真提供:英文学科卒業 早川泰男さん)

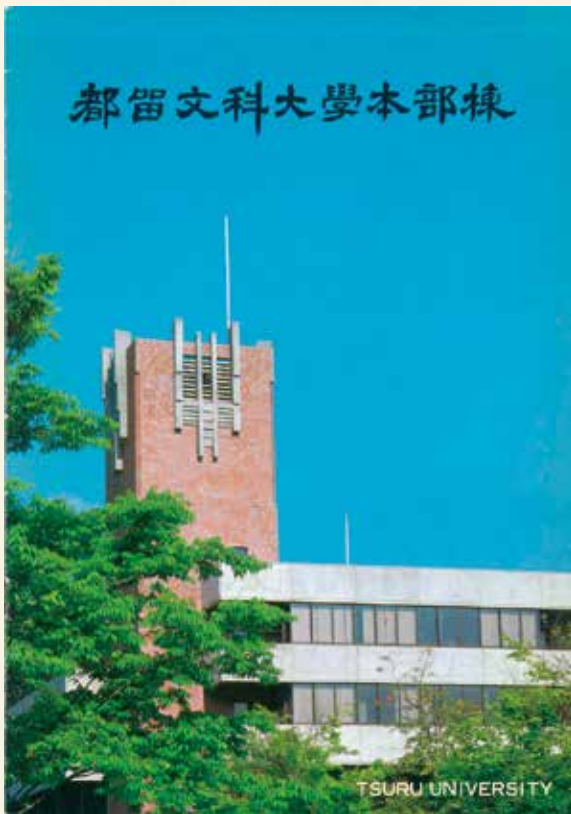
建
物



■ 1号館 建設中



■ 1968(昭和43)年 1号館



■ 1981(昭和56)年
本部棟完成記念冊子

■ 1982(昭和57)年 自然科学棟 建設中
(写真提供:名誉教授 森江晃三先生)



■ 1983(昭和58)年1月 自然科学棟(写真提供:名誉教授 森江晃三先生)



都留文科大学音楽研究棟



■ 1985(昭和60)年 音楽研究棟完成記念冊子

都留文科大学新研究講義棟



■ 1989(平成元年)
2号館完成記念冊子



■ 2025(令和7)年 1号館改修工事





■ 城山からの谷村の町の眺め

都 留 の 風 景



■ 現つるフィールド・ミュージアム付近から見た本学



■ 谷村町仲町

■ 城山への登り口の吊り橋(城南橋)

(このページの写真提供: 英文学科卒業 早川泰男さん)



色とりどりのミライへ。 目次

口絵	2
目次	14

I. ご挨拶・祝辞・メッセージ

答えのない問題に対峙できる人材を育て明るい未来の創造に貢献する	都留文科大学理事長	山下 誠	18
都留文科大学創立70周年を祝して	都留市長	日向 美德	20
祝辞 創立70周年に寄せて	都留文科大学同窓会長	渡邊 正司	22
70周年のその先へ	都留文科大学長	加藤 敦子	24
都留市に欠かせない存在～都留文そして文大生～	事務局長	小宮 文彦	26
名誉教授からのメッセージ			
本学 名誉教授 森江 晃三先生よりご在職のころの写真と解説			28
演習卒論・研究会・京都旅行	名誉教授	加藤 静子	29
都留文科大学での思い出	名誉教授	田中 実	30
1979年より29歳から41年間勤務	名誉教授	福田 誠治	31
楽しく充実した36年間 — 新米教員からの出発 —	名誉教授	鶴田 清司	32
色とりどりの個性の歌 — ゼミ歌会の思い出 —	名誉教授	鈴木 武晴	33

II. 70周年記念事業

70周年記念事業	36
70周年記念事業一覧	42

III. 都留文の現在 学生の声

つながる想いと仲間の存在	陸上競技部主将	勝又 理子	44
紡ぐ	合唱団団長	河野 凜々	45
人と、地域とつながる吹奏楽部	吹奏楽部第57期部長	石毛 友基	46
最後の学生野球	準硬式野球部65代主将	河野 愛音	47
ワングルにとっての2025年	ワングル部第60代主将	奥野 敬子	48
地域と学生が紡ぐつる子どもまつり	第56回つる子どもまつり事務局長	府内 宏樹	49
鶴鷹祭と半世紀の伝統の絆	令和7年度体育会本部長	神崎 耶音	50
桂川祭を終えて	第70回桂川祭実行委員会委員長	田中 陽菜	51
伝統を受け継ぎ、未来へ挑む	女子バレーボール部主将	齋藤 真愛	52

育む心、子どもたちとの関わり	2025年度児童文化研究部～COLORS～部長 古平 芽生	53
学生団体一覧		54

IV. 教員の声 未来を見据えた教育・研究

国文学科の伝統と未来	国文学科長 野口 哲也	56
この10年間の歩みと現状	英文学科長 三浦 幸子	57
初等教育学科から学校教育学科へ	学校教育学科長 水口 潔	58
誰もがその力を発揮できる社会をめざして。条件の整備と、個々人ののびやかな活躍を	地域社会学科長 田中 里美	59
比較文化学科の33年	比較文化学科長 菊池 信輝	60
教える・学ぶを世界基準に ― IB・国際教育のさらなる可能性	国際教育学科長 青山 郁子	61
都留文科大学附属図書館のこの10年の歩みと今後の展望	附属図書館長 春日 由香	62
情報センターの役割と展望	情報センター長 佐藤 裕	63
入学センターの歩みと今後の展望	入学センター長 両角 政彦	64
伝統と革新を両輪に、教員養成の未来を拓く	教職支援センター長 野中 潤	65
地域交流研究センターのこれまでとこれから	地域交流研究センター長 鈴木 健大	66
この10年間の国際交流と未来へ向けて	国際交流センター長 茂木 秀昭	67
語学教育センターのこれまでと展望	語学教育センター長 上原 明子	68
都留文科大学の共通教育のこれから	共通教育センター長 日向 良和	69
「学生生活支援」のハブとしての保健センターへ	保健センター長 加藤めぐみ	70
キャリア支援センター設立からより充実した学生支援への展開	キャリア支援センター長 山本 芳美	71

V. 70年を振り返る 思い出を語る 同窓生より

インタビュー 卒業生が語る、学びと青春の記録	金城 宏安さん	74
	淡野 香百合さん・濱欠 亮吉さん	78
私が入学した頃	1984年国文学科卒業・本学名誉教授・創立70周年記念誌編集部会員 寺門日出男	81
思い出いろいろ	1967年英文学科卒業 元高校教員 早川 泰男	84
書と刻字に明け暮れた青衿時代	1973年国文学科卒業 書家 安藤 重光	85
二十歳が田原の穴蔵で	1989年国文学科卒業 自由業 西 桂子	87
大切な街 都留 ～変わるもの・変わらないもの～	1990年初等教育学科卒業 小学校校長 奥脇 美穂	89
都留文科大学70周年に寄せて	1992年社会学科卒業 学芸員 高野 訓子	90
都留に息づく余白	2005年初等教育学科卒業 舞台美術 正代 俊明	91
都留がすき ～仕事を辞めて戻ってきました	2006年社会学科卒業 農業 羽野 幸	93
都留での学びが支える今	2008年比較文化学科卒業 台湾にて日本語教員 永富菜穂美	95
「夢」「現実」「目標」	2010年初等教育学科卒業 作詞作曲家 前迫 潤哉	96
都留で紡いだ学びと出会い、色とりどりのミライへ	2019年英文学科卒業 CA 伊藤 英理	98
遊び、学び尽くした4年間	2021年比較文化学科卒業 新聞記者 北條 七彩	99
母から、都留から、学びをつなぐ	2021年国際教育学科卒業 IB教員 猿渡 涼香	101

都留文科大学での思い出	2022年学校教育学科卒業 中学校教員 石澤 里菜	102
「きっかけ」という宝物が落ちている場所	2023年地域社会学科卒業 公務員 岩本 昂己	103

VI. 地域とともに

市内飲食店インタビュー		106
バンカムツル		106
川藤		107
Trattoria PIPS		108
松鶴		109
都留市内思い出マップ		110
ミュージアム都留での展示		119

VII. 資料編

公立大学法人都留文科大学 定款		124
都留文科大学 歴代役職者名		130
都留文科大学 施設案内図		134
都留文科大学 施設関係		135
都留短期大学 学科別卒業生数		136
都留文科大学 学科別卒業生数		136
都留文科大学 大学院修了者数		138
都留文科大学 文学専攻科修了者数		138
都留文科大学 卒業生就職状況		139
教員就職者数の推移		140
過去十年間の就職率の推移		141
都留文科大学 在学生数		142
都留文科大学 学科別入学試験志願者一覧		143
都留文科大学 年度別授業料等諸納金一覧表		144
都留文科大学 名誉教授称号授与者		145
歴代学長 就任のあいさつ		146
公開講座(市民講座)のあゆみ		154
現職教育講座のあゆみ		159
県民コミュニティーカレッジのあゆみ		160
大学沿革(2015～2025年)		161
鶴鷹祭成績一覧		165
都留文科大学 創立70周年記念事業期成会		166
編集後記	創立70周年記念誌編集部会長	167

I. ご挨拶・祝辞・メッセージ



答えのない問題に 対峙できる人材を育て 明るい未来の創造に貢献する

都留文科大学理事長 山下 誠

都留文科大学は、前身である市立都留短期大学が創設された昭和30(1955)年から数えて創立70周年の記念すべき年を迎えました。

本学は、創設当初から「教員養成」を柱とし、全国から集まった若者を地域を支える人材として育成し、またそれぞれの地域に返すということが続けて参りました。

今や都留文科大学は、教育分野では全国にその名を知られる大学となり、その教育内容にも高いご評価を頂戴しております。そうした評価を得ることができましたのも歴任教職員の皆様のご努力と都留市の皆様のご支援、そして何よりも全国各地におられる卒業生の一人ひとりが、それぞれの場所で長年にわたりご活躍をされてきたからであります。

現在本学は、その後の学部学科の再編を経て、2学部6学科約3,500名の学生が在籍する大学となりました。

「教員養成」という本学の原点は、これからも維持して参りますが、時代の要請に応え、教員だけではなく幅広い分野で社会を支える人材を輩出していかねばならないと考えております。

今日の世界は、格差、分断と対立、発展と環境の調和、他者を顧みず自己の利益のみを主張する勢力の台頭など様々な問題に溢れています。次々と生じてくるこうした問題を解決しなければ、やがて社会は壊れてしまいます。しかし、いずれも答えが容易に見出せない、ひょっとしたら答えなどないかもしれない難問ばかりです。

こうした答えのない問題に対峙し、新たな秩序を打ち立て明るい未来の創造に貢献する有為な人材を世に送り出す。それこそが、社会が危機に直面した時の大学の使命です。

問題解決のためには、混沌から物事の本質を見極め、文理の枠を超えた幅広い知識を基に深く思索し、他者と意見を交わし、多様な知を結晶させることが必要であります。そして、そのためには何よりも言語能力を磨くことが求められます。

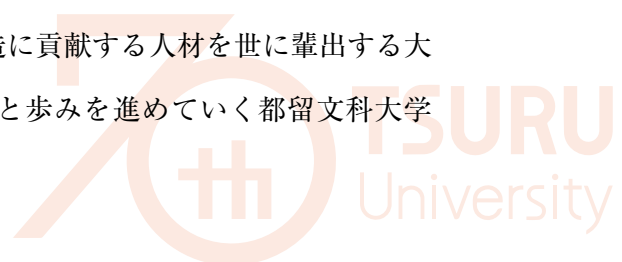
こうした問題解決能力を持つために必要なことを学び追究する、実はそれこそが人文科学であり、人文科学を追究する都留文科大学が果たすべき役割は極めて重要です。

一方で、大学は、少子化の進行による18歳人口の減少という大きな問題に直面しております。十数年後には18歳人口が現在の概ね6割程度にまで減ってしまいます。

「魅力ある大学づくり、選ばれる大学づくり」を進め大学間競争を勝ち抜いていかなければなりません。そのためにも「教育の質の向上」を図ることはもちろん、同時に良好な「教育環境の充実」をハード・ソフト両面において進め、学生が成長を実感できる大学にしていく必要があります。

一昨年には、ICT機器も備えた文理を超えた学びの象徴である新校舎THMCを整備し、昨年には学びの幅を広げる新カリキュラムをスタートさせ、本年には校舎であり、地域に知を提供する場所、そして交流の場でもあるつるフィールド・ミュージアムを新設しました。また、本学最大の建物である1号館の大規模改修工事に2年半後の完成を目指し、このほど着手いたしました。ここ数年でキャンパスの景色は大きく変わります。

都留文科大学は、今後も工夫と努力を重ね「教育の質の向上」と「教育環境の充実」を図り、将来にわたり明るい未来の創造に貢献する人材を世に輩出する大学で在り続けます。次の10年、更にその先へと歩みを進めていく都留文科大学へのご支援をお願いいたします。





都留文科大学 創立70周年を祝して

都留市長 日向 美徳

都留文科大学創立70周年を、心よりお喜び申し上げます。

これまで長年にわたり、都留文科大学を支えてこられました理事長及び学長をはじめ、教職員並びに学生、同窓生など関係各位の不断のご努力とご熱意に対し、深く敬意を表しますとともに、設立団体である都留市といたしましても、厚くお礼申し上げます。

都留文科大学は、昭和28年の山梨県立臨時教員養成所を起源に、昭和30年4月に都留市立都留短期大学として誕生後、昭和35年に四年制の都留文科大学となり、「地域に根ざした教育」を理念に掲げ、文学・教育・国際理解を基盤とする学びを通じて、多くの優れた人材を社会に送り出してこられました。その歩みは、本市の歴史と深く結びつき、文化・教育の発展に多大なる貢献をいただいております。大学は、本市の誇りであり、地域の知の拠点として、これまでのご尽力に改めて心より敬意を表するところでございます。

また、大学は、戦後の教育復興期において、地域の高等教育機関として誕生した背景があり、以来70年にわたり、教育の質を高める努力を重ね、時代の変化に応じた学部・学科の充実を図りながら、地域社会と共に歩んでこられました。特に、学生の皆様が地域活動に積極的に参加し、市民と交流する姿は、まさに活気と希望をもたらし、地域コミュニティの絆を深める大きな力となっています。こうした取り組みは、単なる学問の場にとどまらず、地域社会の発展に寄与する「共創の場」としての大学の役割を体現するものといえます。

それは、本市と大学が、教育・文化・地域振興など多方面にわたり協力関係を築いてきた証拠であり、今もなお、市内で開催される文化イベントや国際交流事

業において、学生や教職員の皆様が地域と繋がり発展していくことは、地域にとって欠かすことのできないものであります。

さて、この度、都留文科大学創立70周年記念誌を発行するにあたり「色とりどりのミライへ。」をキャッチコピーに多様性や豊かさ、そして学生と大学が多様な可能性を持つことを表し、未来への展望を共有することをコンセプトとしていると伺っております。

この取り組みはまさしく過去、現在、未来を繋げ、大学がより発展できるよう皆様の願いが形になったものであると考えております。

近年では、地域課題の解決に向けた共同研究や、地域資源を活かした観光・産業振興の取り組みも進められており、大学と地域が一体となって未来を切り拓く姿勢がますます強まっており、70年という節目は、新たな未来への出発点であり、人口減少やグローバル化など、社会は大きな転換期を迎えています。こうした時代だからこそ、大学と地域が互いに支え合い、知恵と力を結集することが求められ、大学が、これまで培ってきた教育理念をさらに発展させ、世界に開かれた学びの場として飛躍されることを心より願っております。

本市といたしましても、大学とともに歩み、地域の魅力を高める取り組みを進めてまいり所存でございます。

終わりといたしまして、改めまして創立70周年を心からお祝い申し上げますとともに、関係者の皆様のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。挨拶といたします。





祝辞 創立70周年に寄せて

都留文科大学 第19代同窓会長

渡邊 正司

都留文科大学創立70周年誠におめでとうございます。都留文科大学は、昭和28年に山梨県立臨時教員養成所として創設され、「広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を探究し、あわせて高い見識と広い視野を持つ、有能な社会人及び教育者たるべき人材を育成することを目的とする」を学則に掲げ、「菁莪育才」という建学の精神のもと、短期大学そして大学へと発展してきました。現在は2学部6学科編成となり、さらに大学院文学研究科を設置し、教員養成及び国際性、地域性の追究に主眼を置き、優れた資質を持つ教師、豊かな国際人、広く地域に貢献できる人材等、時代の要請に応えた幅広い人材を育成しております。私たち同窓生にとって、現在の大学の環境はとても素晴らしく、これまで様々な困難を乗り越え目覚ましい発展にご尽力いただきました学校関係者、市当局及び学生に敬意と感謝を申し上げます。

本学は、創立70周年を迎えた令和7年、4月には大学と地域をつなぐ新たな拠点施設「つるフィールド・ミュージアム」が完成しました。また、9月からは1号館大規模改修工事が着工しました。平成28年に国際交流会館が完成し、令和6年に元南都留合同庁舎の改修と駐車場跡地の整備により6号館THMC (Tsuru Humanities Center)が完成しました。急速な少子化が進む中、令和2年度以降のコロナ禍を乗り越え、本学は魅力ある選ばれる大学として、教育の質の向上に向けて、学生が学ぶ環境の整備を進めてきました。本学の特色である全国から学生が集う個性豊かな大学として、未来に向けた確かな地位を築き今後益々発展していくものと確信しております。

私が入学したのは昭和59年、高度経済成長を経て世界第2位の経済大国となり、

日本が活気に溢れた時代でした。その中で、先生方から幅広い知識と教養を得、全国各地から集う学友たちと交流を深め、様々な人との関わりの中で人間性を磨き、仲間とともに思い出深い学生生活を過ごすことができました。ゼミ、卒業論文でお世話になったのは和田明子教授でした。先生の指導は大変厳しく、毎回の授業では、先生のご指導のもと、ゼミ生が切磋琢磨する中で、地域の産業や都市構造の教材化を学び、地域教材の学校教育における教育的価値についてご教示いただくとともに、授業づくりについて指導していただきました。研究に対する厳しさの中に温かい優しさのある先生のご指導が思い出されるとともに私の教員としての姿勢は和田先生にご指導いただいたものと感謝しております。

同窓会は、東京都の桐井副会長、大阪府の杉中副会長をはじめとして本部役員及び各都道府県の支部長、支部役員の母校への愛と母校での学びへの誇りにより活動を展開しております。創立70周年を記念しまして、記念事業費と1号館大規模リニューアル工事事業費、つるフィールド・ミュージアム建設事業費を寄付させていただきました。創立70周年記念事業に貢献できたことを会員の皆様とともに喜びたいと思います。同窓会は、大学発展への寄与と会員相互の親睦を会の目的としています。平成27年度に和歌山県支部、平成30年度に青森県支部、そして令和元年に栃木県支部が支部会員の熱意と努力により設立され、現在41支部となりました。今後、支部未設置県に支部を設置し、新たな歴史と伝統を築いていく大学と後輩へのさらなる支援のために、全国の同窓会員とともに手を取り合い協力して取り組んでいくことをお約束し、お祝いの挨拶といたします。



70周年のその先へ

都留文科大学長 加藤 敦子

都留文科大学は、本年、創立70周年という大きな節目を迎えることができました。これもひとえに、長年にわたり本学を支えてくださった地域の皆さま、同窓生の皆さま、そして日々教育・研究・運営に携わってきた教職員の尽力の賜物であり、心より御礼申し上げます。

本学は1955年、戦後日本の教育復興を担う教員養成を使命として誕生しました。「菁莪育才」という学訓のもと、人を育て、人を通して社会に貢献する大学として歩みを重ね、これまで巣立った多くの卒業生が全国各地の教育現場をはじめ、多様な分野でそれぞれの地域と社会を支えています。

60周年からの10年間、本学は時代の要請に応えるべく、立ち止まることなく自己変革を続けてまいりました。国際教育学科の新設、学校教育学科、地域社会学科の設置をはじめとする学部・学科再編、全学的なカリキュラム改訂とともに、学びの幅を広げる副専攻プログラムを開講し、学生一人ひとりが専門性を深めつつ多角的な視点を養える体制を構築しました。教育施設の充実においてもTHMC、つるフィールド・ミュージアムを開設し、60年の歴史を持つ一号館の大規模改修にも着手するなど、地域と大学を結び、世代や立場を越えた交流を生み出す新たな学びの場を整備してまいりました。70周年を記念するさまざまな事業もまた、単なる祝典にとどまるものではなく、これからの本学のさらなる発展へと確実につなげていくための礎です。

現在、DXの進展により世界は劇的に変化しており、情報リテラシーやデジタルサイエンスの素養は、これからの時代を生きる上で欠かせないものとなっています。本学は、このような新たな社会の要請に柔軟に対応しながらも、時流に流

されるのではなく、テクノロジーやデータを何のためにどのように活かすのかという哲学を通して、人間と社会と技術の未来を構想する知性を育ててまいります。これこそが、人文学・教育学の伝統を有する本学の使命です。

また、本学は学生の9割近くが山梨県外からこの都留の地に集い、地域の方々との交流の中で深く学び、卒業後には約半数の学生が自らの地元へとUターン就職をして全国各地へ羽ばたいていくという、全国でも稀有な特色を持つ大学です。地方の公立大学でありながら、日本各地の未来を支える担い手を着実に育成し、送り出し続けていることは、本学の存在意義そのものにほかなりません。70周年にあたって掲げた「色とりどりのミライへ。」というコンセプトには、大学が多様な価値と可能性を受け止める場であり続け、そこで学ぶ学生一人ひとりがそれぞれの個性と志を抱いて多様な未来へ歩み出し、多彩な未来を創り出してほしいという願いを込めています。

70年の歴史の中で、私たちは常に、人を育てる大学として社会の課題に真摯に向き合ってきました。日本社会における少子高齢化や格差の拡大、国際社会における紛争や気候変動といった解決困難な課題に直面する今、本学は人と社会を結ぶ知の拠点として、次の世代に希望ある未来をつなぐ責任を果たしてまいります。本学70年の歩みを支えてくださったすべての皆さまに、あらためて深く感謝申し上げますとともに、今後より一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。





都留市に欠かせない存在 ～都留文そして文大生～

事務局長 小宮 文彦

都留文科大学は本年、創立70周年を迎えました。改めましてその歴史を振り返りますと、本学は、昭和28(1953)年4月に創設された山梨県立臨時教員養成所を前身とし、地域住民の恒久的な高等教育機関の設立を切望する声や先人の方々の先見的視点により、昭和30(1955)年4月に都留市立短期大学が現在の市役所の場所で開学し、昭和35(1960)年4月には4年制の都留文科大学へと移行しました。その後、多くの諸先輩方による大学改革などの変遷を重ね本学は発展してまいりましたが、その歴史の重さをひしひしと感じる「70」という節目の年に、事務局長として携われる奇跡と幸せに感謝するところであり、先人の皆様の開学へと導いていただいたご尽力が、現在の本学発展、そして都留市の経済牽引と地域貢献に繋がっていることを改めて実感し、この場を借りて、先人の皆様へどのように表現してよいかわからないほどの大きな感謝と敬意を申し上げる次第であります。

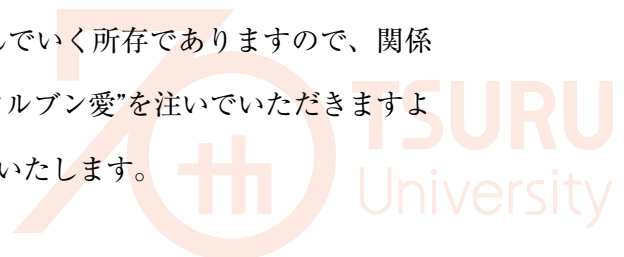
本学は開学以来70年にわたって、教育現場が求める優秀な教員を輩出し、全国各地の小中学校、高等学校等で卒業生が活躍しています。都留市内の学校をはじめ県内でも多くの卒業生が教育現場を支えており、地域に根差した大学としての役割を果たしてきました。毎年約800～900名の学生が全国47都道府県から集い、かつては民家への下宿という形で地域行事に積極的に参加するなど、地域コミュニティに溶け込み、学生であるとともに一市民としても地域で活躍してきました。私自身、学生が多く住む谷村地区の出身で、当時は私の家の二階の4部屋のうち3部屋を“文大生”の下宿として貸しており、残りの1室が私の居室でありました。小さい時から、“文大生”は私たちの生活の中において、欠かせない存在でした。都留市は、昨年市制70周年を迎えましたが、市民の10人に1人が都留文科大学生という

ことで、まさに学生とともに歩んできた街であり、“文大生”は自然にこの街に溶け込み、学生を温かく見守る風土が根付いています。大学教職員や市職員にも本学のOB・OGが多く活躍していますが、私の後輩の中には、本学を卒業後に一度地元に戻り就職したものの、“ツルブン愛”“ツルシ愛”が強く、都留市に舞い戻り永住し活躍している職員も多く、本学と都留市を盛り上げる強い力になっています。

また、人材不足が叫ばれる昨今、富士北麓・東部地域において本学の学生は欠かせない即戦力の人材としても活躍しており、先日、理事長、学長、私小宮で、地域の大企業へ訪問した際に、その会社の社長様から「当社にとって“文大生”は欠かせない存在で、社員より真面目で勤勉」とお褒めの言葉をいただいたところでもあります。

開学から70周年を迎えた本学では、「色とりどりのミライへ。」をコンセプトに、学生と大学のミライを豊かに彩り、未来への展望を共有して進んでいくという考えのもとに、多種多様な記念事業を進めてきました。中でも、10月11日に都の杜うぐいすホールなどで行われましたメインイベントとなります「70周年記念式典・記念講演会及び祝賀会」では、私も本学70周年記念事業期成会総務部会長として、部会員である職員を中心に準備から開催まで取り仕切らせていただきましたが、本学の在学学生、教職員、同窓生、都留市民をはじめ地域の方など多くの方々にご参加いただき、盛会のうちに終了しました。式典や祝賀会で行われた在学学生による演奏やダンスパフォーマンスは、本学の学生らしい個性が光る素晴らしいものでありました。ご来場いただいた皆様から「鮮やかで、“ツルブン生”らしい勤勉さが出ていたステージで本当に良い式典だった」という言葉をいただいたところでもあります。

現在、本学では「将来構想委員会」が立ち上がり、中堅の教員を中心に10年20年先の本学の将来を見据えた議論が始まりましたが、本学の未来を紡いでいく鍵は、学長、副学長を中心に教職員一同が心ひとつに、本学の学生を「磨けば光る原石」として育てていくことでもあります。今後も本学への“シビックプライド”を持った全国で活躍する同窓生の皆様と連携し、教職員が鋭意努力を重ね、都留市民、地域の方々とともに本学の更なる発展のために歩いていく所存でありますので、関係各位におかれましては、今後とも変わらずの“ツルブン愛”を注いでいただきますようお願いを申し上げ、事務局長としての寄稿といたします。



名誉教授からのメッセージ

本学 名誉教授 森江 晃三先生より、本学の貴重な写真(自然科学棟や本部棟の建設過程、研究室や実験室の様子、都留の自然など)をご寄贈いただきました。先生からのご解説付きで、一部ご紹介します。



自然科学棟建設の頃(1981~1982年)

私(森江)が都留文科大学に就職したころ(1966年)、まだ旧校舎(旧谷村高女校舎)と半分できた現在の1号館で授業が行われ、その次の年に1号館が完成したのですが、実験室は化学実験室と生物実験室だけで、それも高校程度でした。自然科学棟ができる時は何度も設計者と話し合いました。物理、化学、生物(動物・植物)、地学がどの階に入るか議論しました。



自然科学棟の上の天体ドーム工事



楽山のクラブハウス(1975年1月)

急斜面で周囲は桑畑でした。



旧実験室(1号館1階)での生物実験の様子(1975年1月)

顕微鏡が新しくなり、大分よく「見える」ようになりました。それ以前は顕微鏡が小中学校で使うようなもので台数も少なかったような気がします。写真は植物の茎の切片を永久プレパラートにして、その顕微鏡写真を撮影しているところです。薬品が十分でなく、プレパラート作りに失敗する学生もいました。よくできたものは、残っていれば今でもきれいに見えるはずです。

演習卒論・研究会・京都旅行

名誉教授 加藤 静子

創立70周年を迎えられ、おめでとうございます。
都留文科大学を定年退職してから、私はすでに15年になるでしょうか。大学での記憶は、はるか彼方になりました。

学生さんたちとの出会いは、東京教育大学(現筑波大学)の先輩久保木哲夫先生(2022年12月に御逝去)から、非常勤講師の依頼で御世話になったことにはじまります。

久保木先生は当時学長職にありました。先生には大学3年生の時、東京教育大の鈴木一雄先生の研究会「中古部会」に参加が許されて以来(研究会は形を変えて今も存続)、御一緒させていただきました。そして、私は退職後には、久保木先生が主催なさっていた都留文大の卒業生が中心の「平安私家集研究会」に入れていただきました。注釈書を何冊か刊行する体験をしました。私家集をいかに読解するかを学ぶ貴重な場でした。

非常勤講師の時は、授業中学生さんの視線がまっすぐに教師や黒板に注がれて、お話するにも心地よかった思い出があります。その後、久保木先生の後任人事の公募がありました。私は、『大鏡』(新編日本古典文学全集)の注釈を抱え、公募を諦めました。でも、人事は流れて翌年に公募があり、『大鏡』も終えたので応じて、運よく採用されました。

専任となった学生さんたちとの思い出は、まずは演習・卒論。『源氏物語』をはじめ、平安文学は膨大な先行研究が立ちはだかります。惑わされずに、作品とまっすぐに向き合って読みこむことを勧めました。自分なりの気づきや論理により文章化出来るようにという願いからでした。3・4年生が合宿した卒論中間発表の場も、皆さんの個性が知られる楽しい思い出となっています。卒論は各自一章ほどの分量にして、卒論文集を作りました。

週一度の研究会は、変体仮名に親しみ、注釈書の相違を比べ、担当者の問題意識に添って資料を作り発表、そして議論する。教師側も準備をして臨んだ記憶があります。

3年生の時、平安文学作品に見える土地を訪ねる、京都への旅行も楽しい思い出です。行く先々の土地と平安文学との関係について調査し、時には論文も引用し、冊子を作る。それを携え、東京駅新幹線乗り場に集合。一度も何の問題もなく旅行できたことも、楽しい思い出となった一因でしょう。

都留文科大学での思い出

名誉教授 田中 実

都留文科大学を定年退職して早や14年が経ちました。老人となった現在、かつての学生諸君、先生方の顔が懐かしく思い起こされます。この原稿を書くにあたって、退職の際に『国文学論考』に金子博先生から御寄稿戴いた回想記を読み返し、今さらながら恵まれた職場だったとの思いを強くしています。

わたくしは遠く、九州福岡県の南端の大牟田で育ち、18歳で上京してから31歳まで立教大学の学部及び大学院に籍を置き、その後私立武蔵高校の教師を2年勤めて、以降思いもかけず鷺只雄先生のお誘いで、定年までの32年間、都留文科大学に勤務しました。

都留文科大学の最大の特徴は、地方公立大学であるにも関わらず、全国各地に試験会場を設け、全国各地から学生が集まり、そのほとんどが都留市内で下宿生活を送ること、しかも、わたくしの勤めていた頃は、そのほとんどは台所や風呂、トイレも共有という、言わば24時間生活を共にしているようなものでした。わたくしは都内から通勤していましたが、ゼミのある日は毎回、学生数人とビールか日本酒を飲みながらの夕食を摂るのが恒例で、ゼミの続きの話を彼らとしていました。ゼミの時間が延長することもしばしば、「エンドレスの田中」と影で噂されているとも聞きました。他の大学ではこ

のような濃密な付き合いは叶いません。ゼミでは〈近代小説〉の根幹を求めて、人類の生命の在り方を問題にし、世界と自己との相関とはいかなることか、そんな議論をすることが何よりの楽しみで、そこには学生諸君との一体感があつたとわたくしは思っています。

当時学生諸君の多くは教員志望で、教育実習を出身校でさせてもらう関係もあり、全国に出張に行き、中学や高校の先生達(中には卒業生もいました)と交流できたのも都留文科大学ならではのでしょう。また、縁あってほとんど素人の柔道部の顧問もしていて、道場に行くことはなくてもコンパには必ず出席し、高崎経済大学との交流試合にも付き添って、部員諸君との交流を深めました。1999年の後期は北京日本学研究センターに赴任し、その縁で後に二度、ゼミの学生達と中国の大学を訪問、旅したこともいい思い出です。

教員生活の大半を都留文科大学で送ったことは自身の運命にして宿命であり、そこで学生諸君と共に過ごした日々が、今日のわたくしの研究生活を支えてくれています。都留のキャンパスと街の様子が今、ありありと目に浮かんでいます。

1979年より29歳から41年間勤務

名誉教授 福田 誠治

就職当初、日本領の朝鮮半島の師範学校を出たけど卒業証書も持ってないという先生もいらっちゃって、正確に定まらない初任給格付けを国立大学教員並にする格差是正が教職員組合の課題でした。

『30年誌(都留文科大学記念誌)』(1989年11月)を引き継いで『50年誌(都留文科大学創立50年記念誌)』(2004年1月)の編集に携わりました。編集委員会は、2001年10月にスタートしましたが、当時は「都留文科大学の学生ストライキ」(1965年7月)と、それを「扇動した3教員の懲戒免職」(同年9月)そして裁判闘争に発展という事件があり、対立する立場にあった先生が在職されていました。編集長の小林重章先生は、とても神経を使われたと思います。

また小林先生は、学生たちが飲み屋に残した落書き帳まで読んで、学生生活の実態を調査しておられ、本章の1～3章を担当されました。寺門日出男先生は第4章で「拡充期の都留文科大学」、私は第5章で「時代の変化と都留文科大学」を担当し、植村憲治先生にも加わっていただいて私と共に資料編を編集しました。大学広報を丁寧に読み込んで、教員数、学生数などのデータ一覧を作成したり、歴代学長の新入生への挨拶を復元したり、大学の公開講座、大学の行事年表と社会の出来事とを対照した年表な

どを収録したものです。

『70年誌』を編集するとすれば、都留文科大学の法人化前の課程認定の取り下げ、「大学法人化」(2009年)、2学部化の成果と問題点、改訂前「学校教育法」と「大学定款」とのずれ、「学校教育法」改訂後の学内統治機構とのすりあわせ、18歳人口の減少と大学の将来、DX対応、国際政治情勢と交換留学制度の将来、などがテーマになりますが、あまりに大きく、複雑すぎて意見はまとまりそうもないですね。

学生と教員との仲もきわめて良好でした。初等教育学科の西洋教育史の担当として採用され、免許法に基づきカリキュラム変更があるたびに授業も、教育社会学、道德教育の研究、教育原理などを分担しました。途中で比較文化学科に転科し、いつしか夏休みには1週間かけてユース・ホステルを梯子しながらイギリスを横断するゼミ卒業旅行に出かけたものです。学生たちの主体形成、人生選択と成長にお付き合いさせていただいた夢のような職業でした。

5年後には小規模大学が、10年後には都市部の有名私学でさえ倒産すると予想されています。これまで考えられなかったスケールと質の改革が本学に求められています。

楽しく充実した36年間 — 新米教員からの出発 —

名誉教授 鶴田 清司

本学に赴任したのは1985年4月。まだ29歳だった。大学院博士課程に在学中であったが、初等教育学科の専任教員として採用された。研究業績が少なく、非常勤講師の経験もなかったが、「将来の可能性がある」という理由で選ばれたようである。その後、1988年助教授、1996年教授に昇任。

2007年4月からは、3期6年にわたり、学科主任(その後学科長)を務めた。法人化の際は学内が混乱、紛糾して、その対応に苦慮した。

2013年度より、それまで所属していた国語系(国語教育ゼミ)から教育実践学系(教育方法論ゼミ)に移籍。2017年度には、ゼミ3期生A君のお嬢さんが私のゼミに入ってきた。親子二代にわたって教えることになり、30年の時の流れを実感した。

2021年3月で定年退職。

最も印象に残っているのは、何と言っても一年目のこと。当時の初等教育学科は学生数も多く、いきなり15人のゼミ生を担当することになった。当然、講義も初体験。一回目の授業は緊張のためか早口になって、たった15分で終わってしまった。夏のゼミ合宿(4年生、東伊豆)では、コンパが盛り上がりすぎて暴走……。3年生のゼミでは、私の大学院時代のテキスト(R.Palmer, *Hermeneutics*)をそのまま原文で読ませるなど、失敗の連続。

教育実習の派遣指導では、1週間かけて四国の実習校を7校訪問。宇和島市から高松市まで、

まるでお遍路さんのような出張であった。ゼミ生M君の自宅に泊めてもらったことも懐かしい思い出。

国語系の先輩教員で、芥川龍之介の研究で知られる故関口安義先生は、研究室が隣ということもあって、新任の私によく声をかけてくださった。「昨日は何枚書きましたか？」が毎日の挨拶である。関口先生は大変に研究熱心で、寸暇を惜しんで論文執筆に没頭されていた。本学は、幸いにも教員の研究時間を確保してくれる勤務様態になっている。関口先生の激励(圧力?)と恵まれた環境のもとで、自分の研究を深めることができた。在職中に出版した単著は17冊、論文は400編を超える。

学外研究の制度を利用して、博士論文を提出することもできた。『〈解釈〉と〈分析〉の統合をめざす文学教育—新しい解釈学理論を手がかりに—』(2010年、学文社)は私のライフワークとなった。

また、スキーをこよなく愛する同僚の高田理孝先生とゼミ生も交えて毎年スキー合宿をしたことも楽しい思い出。八方尾根の「まるで旅館」が常宿である。高田先生とは海外スキーにもたびたび出かけて、まわりの颯感を買ったらしい。

退職した今も都留文科大学への愛着は変わらない。人口減少に伴い、大学の生き残りが厳しい時代となっているが、本学はその荒波を乗り越えていけるものと確信している。

色とりどりの個性の歌 ― ゼミ歌会の思い出 ―

名誉教授 鈴木 武晴

都留文科大学創立70周年を心からお祝いし、ご依頼の稿を寄せます。「都留での学生との思い出」の中から、ゼミでの歌会とその作品集について記します。

ゼミでは、万葉集の歌の研究を充実させるために、歌を作る教育活動を取り入れておりました。その実践が毎年恒例の正月歌会で、その成果を編集して、次の作品集が生まれました。

- ①『歌の翼で羽ばたく、未来へ』(2012年)
- ②『歌の花束』(2014年)
- ③『歌のハーモニー』(2016年)
- ④『歌の翼で羽ばたく、世界へ』(2019年)

私は、『歌の花束』に次の序歌を載せています。

心込め歌いし歌の花の束色とりどりの個性の花束

この歌は、くしくも創立70周年キャッチコピーの「色とりどりのミライへ。」と響き合うものがあります。学生の色とりどりの個性は、大学が多彩な未来を開き、創造を更新してゆく原動力であると思います。

都留文科大学を表すキーワードの中に、2013年に世界文化遺産に登録された「富士山」と、「教員」があります。上記作品集の①と②から、富士山の歌を引用します。

- ・富士登山行き交う人の「頑張れ！」が私の心にエネルギー補給 望月 香那

- ・バイト帰りの道に見る富士「おつかれさん」と私の背中を押してくれるよう 清水 春那
大学の夏期集中授業の「富士登山」体験の歌と、大学生活の心に寄り添う富士山の歌です。

上記③と④からの三首は、志望を実現させ、教員になったゼミ生の歌です。

- ・水かけ菜ぬくい湧き水にくぐらせばきらり輝く都留の正月 山岡 美咲

都留のフィールド活動に参加しての都留名産の歌です。

- ・カルタ札積み上げるように一歩ずつ夢に向かって努力重ねん 奥澤 敦子

教員という夢に向かって進む一途な歌です。

- ・初雪にはしゃぐ子どもが僕の目に太陽よりも眩しく映る 林 頼輝

教員になった作者の原点に立つ歌と言えます。

歌が未来予祝の機能を持っていることを改めて思います。



II. 70周年記念事業



70周年記念事業

70周年を記念し、様々な取り組みが行われ、イベントが開催されました。

2025
2/1

70周年記念サイト 公開



70周年記念サイトは
コチラ

2025
4/2

ブランディングムービー公開

※2025年度
限定公開

出演: 俳優・鈴木美羽さん 楽曲: スタンドバイユウ/JIJIM



2025
3/19

モニュメント 除幕式

都留文科大学のロゴマークは、大学創立60周年の記念事業として制作され、その後、大学のシンボルとして広く愛され続けています。3月19日(水)、大学創立70周年を迎える節目に、このロゴマークを基にした記念モニュメントが設置され、除幕式が盛大に行われました。このモニュメントは、地域とともに連携し成長し続け、新しい世代の学生たちに質の高い教育を提供し続ける決意を示しています。当日は、同窓会長をはじめ、学生自治会執行委員長や桂川祭実行委員会長などの学生も参加し、記念写真の撮影など特別な瞬間となりました。

フォトスポットなどでもぜひご活用ください。



2025
4/20

ホームカミングデー開催



4月20日(日)にホームカミングデーを行いました。当日は卒業生をはじめ、現職教員や恩師の先生方など、計120名にご参加いただきました。イベントでは、30年以上前に制作された貴重な動画や、大学の70周年を記念して制作されたブランディングムービー、さらに現在の大学紹介動画を視聴していただいたほか、学校教育学科の邊見信先生による講演「[メディア]という妙薬と劇薬!～子どもとメディアの歴史から～」が行われ、参加者は非常に興味深く聴講していました。

また、学生の案内によるキャンパスツアーも行われ、改修工事を控える1号館や、THMC(6号館)を含む様々な施設が紹介されました。参加者は懐かしいキャンパスを巡り、思い出を胸にその時を楽しんでいました。

その後の親睦会では、乾杯後、参加者同士が再会を喜び合い、和やかな雰囲気の中で歓談を楽しみました。旧友や教員との交流が深まり、みなさんにとって貴重なひとときとなったことと思います。

イベント終了後にご協力いただいたアンケートでは、「懐かしい学内を見学でき、旧友とも久しぶりに会えてとても貴重な機会でした。」や「卒業を改めて誇りに思い、後輩たちに心からエールを送ります。」といった温かいお言葉をいただきました。

なかには「次のホームカミングデーはいつですか」と尋ねる方もあり、こうしたイベントを催す意義の深さを実感しました。



2025
4/29

つるフィールド・ミュージアム 落成式

4月29日(火・祝)、地域の自然や人との出会いを楽しみ、生き物や人との交流を通して学びを深め、新たな人間関係を創造する拠点「つるフィールド・ミュージアム」の落成式が執り行われました。

「つるフィールド・ミュージアム」は、自然に囲まれた環境に位置するだけでなく、施設内の設計にも細かな配慮が施されています。建物を取り囲むように配置されたテラスは「まちの縁側」として地域住民や訪問者が交流できる場となり、木質を基調とした温かみのある室内は、学びの場として心地よく落ち着いた雰囲気を醸し出しています。施設内には、地域交流研究センター、調理室、被服室、実験室、交流スペースなどがあ

り、地域住民とともに学び合い、創造的な活動を行うための豊かな環境が整えられています。

実施設計を担当したのは、牧野富太郎記念館や東京メトロ渋谷駅などを手掛けた内藤廣建築設計事務所です。長い準備期間を経て2024年5月に工事が始まり、ついに完成を迎えました。

落成式には多くの来賓において頂き、施設のコンセプトについての説明やテープカットなどが行われました。この新たな施設が地域活性化の拠点となり、多くの人々に愛され、学びの場として活用されることが期待されています。



こどもまんなかほとりフェスタ※に出展

※つるフィールド・ミュージアムに隣接する公園「つるビーパーク・いこっと」の開園イベント

つるフィールド・ミュージアム落成式と同日に開催された「こどもまんなかほとりフェスタ」では、VR体験イベントを実施しました。

「つるビーパーク・いこっと」の開園もあり、多くの方々にご参加いただき、賑やかな企画となりました。



2025
7/12

俳句ワークショップ開催



当日の様子は
コチラ

7月12日(土)、日本文学研究者のロバート キャンベル氏と、俳人・詩人として活躍する佐藤 文香氏をゲストに迎え、俳句の魅力を深く掘り下げ、さらにAIによる俳句創作という新たな表現の可能性に挑む、俳句ワークショップ「時空を超える俳句～よむことの本質を探る～」を開催しました。

本ワークショップは、国語国文学会と都留文科大学俳句会の学生が中心に企画し、ミーティングを重ね、当日の司会などの運営も行いました。

午前の部は、「Lecture & Talk session」として、キャンベル氏と佐藤氏による古今の名句の講義と、学生との対談形式によるセッションが行われました。キャンベル氏は、「俳句は時代とともに意味を変えながらも、人の心の奥底にあるものを映し出す鏡のような存在」と語り、時代を超えて読み継がれる句の魅力を紹介しました。佐藤氏は、現代に生きる私たちが「いま、俳句をよむ」という行為にどのような意味を見出すかについて、自身の経験や創作の背景を交えて語りました。参加者たちは傾きながら聞き入り、対談でも活発なやり取りが交わされました。

午後の部の「Lab」では、「AI俳句を詠み、読む」と題し、グループごとに参加者自身がAIツールを使って俳句を生成・鑑賞・批評する体験型のワークショップを実施しました。生成されたAI俳句に対して、キャンベル



氏と佐藤氏が講評を加えるなど、人間とAIの協働による俳句創作の可能性が実感される時間となりました。

本ワークショップには、定員いっぱいの学生が参加し、デバイスを片手に、五感を働かせながら俳句の世界に没入する一日となりました。

キャンベル氏からは、学生たちに向け、「普段の授業やバイトなどで忙しいと思うが、今日のように学生や先生方が集まり、同じ目線でものを創り、一緒に体を動かし、批評しあうことは、実は深い学びであり、学びの喜びを味わうきっかけになる。積極的に周りに自分のやりたいことを伝え、少しずつ自分たちの学ぶ時間を変えていくこともできる。在学中は、遊び・学びをあまり分けずに気持ちよく勉強を深めてほしい。」とのメッセージをいただきました。



ロバート
キャンベル氏



佐藤 文香氏

2025
10/8

ツルブンの学生歌・愛唱歌が 駅メロディに



当日の様子は
こちら

富士急行線「都留文科大学前駅」において、本学の学生歌と愛唱歌が駅メロディとして導入されることとなりました。

この駅メロディプロジェクトは、70周年記念事業のイベント企画を学生から募る中で、学生や教員にとって身近で親しみのある駅で本学ゆかりの楽曲が流れることにより、地域住民も含めた駅利用者の方々に、本学が「地域の中の大学」であることを感じてほしい、という学生の発案によるものです。今回、駅メロディとして導入されたのは、本学の象徴である学生歌「花のかげ」と、創立60周年記念事業の一環で制作された愛唱歌「都留はuniverse」の2曲です。富士山麓電気鉄道株式会社のご協力のもと、朝8時から夕方6時までの間、

上り方面に「花のかげ」、下り方面に「都留はuniverse」が、列車の接近時に流れます。

10月8日(水)には、都留文科大学前駅で駅メロディお披露目式を開催し、本学関係者、富士山麓電気鉄道株式会社の皆様、学生など多くの方々が集まりました。式では、加藤学長が一日駅長として制服姿で登場し、式を盛り上げました。学長は挨拶の中で「地域とともに歩んできた70年を振り返りながら、これからの未来に向けた希望のメロディとして、多くの人々の心に届いてほしい」と述べました。

その後、実際に列車の接近に合わせて2曲のメロディが流れると、駅構内に集まった参加者からは大きな拍手が送られ、会場は温かな雰囲気に包まれました。



富士山麓電気鉄道株式会社 石井社長と加藤学長



駅前での記念撮影

2025
10/11

創立70周年記念 オリジナルグッズ作成



販売詳細は
こちら

山梨の伝統工芸品である甲州印伝の「印伝の山本」とコラボし、本学の学章がデザインされた特別な「印鑑ケース」を制作しました。印鑑ケースは、日常生活やビジネスシーンで長くご愛用いただける実用的なアイテムです。伝統と現代性が融合したオリジナルデザインは、未来にわたって「知の拠点」として魅力ある大学であり続ける私たちの想いを象徴しています。

創立70周年記念式典にてプレ販売を行い、現在は一般販売も行っています。



2025
10/11

都留文科大学創立70周年 記念式典開催

場所 都の杜うぐいすホール

式典は、都留文科大学創立70周年記念事業期成会副会長である渡邊正司同窓会長の開会の辞を皮切りに、本学管弦楽団と合唱団による学生歌「花のかげ」、愛唱歌「都留はuniverse」の奏楽で幕を開けました。続いて、期成会会長である山下誠理事長の式辞、加藤敦子学長の挨拶があり、来賓の皆様を代表して都留市長 堀内富久様、山梨県知事 長崎幸太郎様(代理:副知事 井上弘之様)、衆議院議員 堀内詔子様よりご祝辞を賜りました。その後、学生生活の披露として、合唱団による心に届く歌声と、ストリートダンスサークルの躍動

感あふれるパフォーマンスが式典に彩りを添えました。さらに、小宮文彦事務局長の紹介により、本学の70年にわたる歩みを振り返る映像が舞台上に映し出され、参加者の皆様に深い感慨をもたらしました。最後に、佐藤明浩副学長の閉会の辞をもって、式典は盛会のうちに終了しました。

当日は、500名以上の方々にご参列いただき、都留文科大学の「色とりどりのミライへ。」向け、意義深い式典となりました。



都留文科大学創立70周年記念講演会

「国内外の災害見聞記録から問う 人文学の現在地」

講師 ロバート キャンベル 氏



創立70周年記念講演会として、日本文学研究者のロバート キャンベル氏を招き、災害、戦争と人文学との関係、役割について講演をいただきました。まず第1部としてキャンベル氏の日本文学研究について振り返りがおこなわれました。器にまなざしを向け、そこに潜む歴史を読み解いていく研究に、氏の思考の深さを感じることができました。次に氏が8月に訪れたウクライナでの体験を語られました。毎晩のように空爆がおこなわれる中、怒り、そして自国を守るという強い意志を、さまざまな形で表現し記録していく姿に、文学が生まれている場を感じることができました。第2部の加藤学長との対談は国

文学科の古川裕佳教授をコーディネータとし、講演をあらためて掘り下げ、人文学の現代的価値を講演参加者に感じさせる対談となりました。都留文科大学創立70周年という節目に、あらためて人文学の価値を感じることができた素晴らしい講演会でした。



70周年記念事業一覧

(各学科・センターにてそれぞれ70周年記念と冠して実施した事業を含む)

日 付	内 容
2025年1月	THMCのエントランスにて思い出の写真パネル掲示
2月 1日	70周年記念サイト公開
3月19日	記念モニュメント設置除幕式(THMC前)
4月 2日	ブランディングムービー公開
4月20日	ホームカミングデー (記念講演・キャンパスツアー・親睦会)
4月29日	「つるフィールド・ミュージアム」落成式 同一敷地内にて同日開園の「つるビーパーク・いこっと」開園イベント 『こどもまんなかほとりフェスタ』に出展しVR体験を実施
6月13日	都留文科大学創立70周年記念講演会 Mayu 氏 「留学を通して得たもの～Speak English and Explore the World～」(英文学会)
6月20日	都留文科大学創立70周年記念講演会 出口 剛司氏 「人と猫はどのように互いを理解し合っているのか—社会学的相互行為論の観点から—」
7月12日	俳句ワークショップ 「時空を超える俳句～よむことの本質を探る～」(国文学科)
7月12日	都留文科大学創立70周年記念ビブリオバトル(図書館)
8月 1日	文大生のための70冊(図書館)
8月22日～ 24日	第6回日韓国際ヴァージニア・ウルフ学会2025 The 6th Japan-Korea International Virginia Woolf Conference 2025 “Virginia Woolf and Our Future — Mrs Dalloway’s Centennial and Beyond” 講演者：マックス・ソーンダース博士(英文学科)
10月 8日	富士急行線都留文科大学前駅における電車の接近メロディお披露目式 学生歌「花のかげ」、愛唱歌「都留はuniverse」
10月11日	記念式典・記念講演会 ロバートキャンベル氏 「国内外の災害見聞記録から問う人文学の現在地」、 キャンベル氏と加藤学長とのパネルディスカッション
10月13日	都留文科大学創立70周年記念イベント「読書する読書会」(図書館)
11月 1日	桂川祭70周年記念版 ランタンイベント、JIJIM (ブランディングムービー楽曲)ライブ、花火など
11月 5日	都留文科大学創立70周年記念翻訳ワークショップ 多和田 葉子氏・満谷 マーガレット氏 「不死の鳥／翻訳の鳥」(英文学科・英文学会共催)
11月 8日～ 2026年2月1日	ミュージアム都留企画展「地域の中の大学—都留文科大学の歴史とこれから—」 同時開催：エントランスホール展『「山梨の生活史」と俳優・品川隆二』山本芳美教授監修
11月12日	都留文科大学創立70周年記念講演会 阿辻 哲次氏 「漢字文化の原動力」(国語国文学会)
12月19日	都留文科大学創立70周年記念講演会 小泉 凡氏 「現代によみがえる〈つながりの文学〉～小泉八雲とセツの世界～」(比較文化学会)

III. 都留文の現在

学生の声





つながる想いと 仲間の存在

陸上競技部 主将
地域社会学科 勝又 理子



都留文科大学が創立70周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私たち陸上競技部は、部長の佐野夢加先生をはじめ、河端雄一先生、後藤剛嗣先生、そして今年度より新たにご指導いただいている冨子あまね先生のもと、部員31名で活動を行っております。

令和7年度の活動では、関東インカレにおいて7種目に10名が出場し、3種目で入賞を果たしました。出場種目・入賞数ともに昨年度を上回る結果となりましたが、目標としていた順位や得点には届かず、悔しさも残る大会でもありました。

また、関東甲信越大学体育大会や27大学対校戦では、部員一人ひとりが個人の目標、そしてチームとしての目標に向かって、日々の練習と大会に真摯に取り組みました。特に対校戦では、競技面だけでなく、それ以外の場面でも、日頃の努力が形となって表れる場であることを実感しています。

私たちは、日々の活動や各競技会、対校戦での振り返りを通して現状に向き合い、改善策や考えを共有することで、競技力の向上はもちろん、チームとしての成長にも力を注いでいます。

こうした活動の背景には、長年にわたり受け継がれてきた陸上競技部の伝統があります。その伝統は、佐野夢加先生の女子4×100mリレーでのロンドン五輪出場をはじめ、日本選手権リレーでの入賞、女子4×400mリレー関東インカレ2連覇など、輝かしい成績を残された先輩方によって築かれてきました。そしてその礎には、長年にわたり陸上競技部をご指導くださった麻場一徳先生の存在があります。麻場

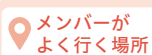
先生の熱意あるご指導と温かいご尽力が、今の陸上競技部の雰囲気や考え方の土台となっています。

私たちが現在活動できている環境は、決して当たり前のもではありません。長い年月をかけて築かれてきた伝統と、それを支えてくださった多くの方々のおかげで、今日の陸上競技部があります。日々ご指導くださる先生方をはじめ、卒業生の皆様、地域の皆様、そして家族の支えがあってこそ、私たちは競技に打ち込むことができます。この場をお借りして、深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

陸上競技部で過ごした時間と経験は、私にとって誇りであり、生涯の財産です。陸上競技は個人で戦う場面が多い競技ですが、そこに至るまでには仲間の存在が欠かせません。私たちのチームは人数が多くはありませんが、だからこそ一人ひとりの存在が大きく、互いに支え合う関係が築かれています。

私たちのチームには、私たちらしい強みがあります。今後もその強みを見つけ、磨き、それを自信につなげていくことが、チーム全体の成長につながると信じています。これからの活動においても、常に目標を見据え、個人としてもチームとしても高め合いながら、“みんなが伸びるチーム”であり続けるために、仲間とともに努力を重ね、より良いチームづくりを目指していきたいと思います。

都留文科大学のさらなるご発展を心より祈念申し上げます、結びの言葉とさせていただきます。



- 手打うどん 石井:練習後や午後の活動の前に学年問わず皆で行きます!
- 雅龍(ガロン):夜遅くまでやっているため、ミーティング後や平日練習後に行きます!

合唱団



紡ぐ

都留文科大学合唱団 団長
学校教育学科 河野 凛々

都留文科大学合唱団は1963年の創立以来、約60年にわたり、合唱と共に歴史を紡ぎながら歩んでまいりました。豊かな自然と歴史、文化に彩られたここ都留市を拠点に、中村仁先生を新たに顧問・常任指揮者としてお迎えし、全国各地から集まった約40名の仲間と共に、心からの「文大サウンド」をお届けすることができるよう日々活動に励んでいます。2008年から長きにわたり、当団の顧問・常任指揮者として多大なるご尽力を賜りました前任の清水先生をはじめ、OBOGの皆様、そして長い年月を見守り、ご支援いただいているすべての方々に、心より深く感謝申し上げます。

当団は、1年を通じて、山梨県合唱連盟主催の山梨県合唱祭や都留市合唱連盟主催の都留市合唱祭への参加、他大学との交流会の開催、県外への訪問演奏など、様々な活動を行っています。2025年2月に福島県福島市で開催された第18回声楽アンサンブルコンテスト全国大会で、当団初の部門別金賞ならびに本選入賞を果たすことができました。また、11月に佐賀県佐賀市で開催された第78回全日本合唱コンクール全国大会(一般職場部門・大学ユースの部)に於いて、2年連続・通算7回目となる金賞ならびに文部科学大臣賞を受賞するという栄誉にあずかることができました。

2025年、日本は終戦から80年という一つの大きな節目を迎えました。戦争を直接体験していない世代が大半を占める現代において、世界はなお争いや対立に揺れています。だからこそ、この時代に生きる私たちには、平和の尊さを次世代へと伝えていく責任があります。12月に開催された「第60回記念定期演奏会～紡～」第3ステージでは、OBOGの皆



全日本合唱コンクール関東大会演奏後



大学創立70周年
記念式典 演奏後

さんと共に、「混声合唱とピアノのための《ぼくの村は戦場だった—あるジャーナリストの記録—》」を演奏いたしました。この作品は、都留文科大学OGである山本美香さんの著作を原作に、戦場の子どもたちを題材とした文章で構成されています。私たちは、その一つひとつの現実の声を重ねながら、合唱を通して痛みと祈りを未来へと届けました。第60回記念定期演奏会は、作品のもつ力と私たちの想いが重なり合い、新たな都留文科大学合唱団の息吹と世代を超え紡がれてきた伝統が響き合うステージとなりました。

合唱団にとって、この1年間は、例年と異なる挑戦の連続でした。団長として日々迷うことも多くありましたが、その度に仲間と対話を重ね、互いの想いを確かめ合いながら、一つひとつ乗り越えていくことができたと思います。喜怒哀楽を分かち合い、よりよい音楽を追究するために互いに高め合ってきた仲間、そしてどんなときも私たちを信じ、温かく導いて下さった先生方に対する敬愛の念を改めて深く感じるとともに、これからの都留文科大学合唱団が、さらに豊かな音楽と出会いを紡いでいくことを、心から願っています。

メンバーが
よく行く場所

●都の杜うぐいすホール



人と、地域と つながる吹奏楽部

都留文科大学吹奏楽部 第57期部長
地域社会学科 石毛 友基

都留文科大学の創立70周年、誠におめでとうございます。豊かな自然に恵まれた環境のもと、日々のびのびと学びを深め、また学生団体活動ができることを大変光栄に思っております。

私たち都留文科大学吹奏楽部は、1969年の吹奏楽愛好会の発足から現在まで活動を行い、現在は55期生から59期生の大学院生、学部生で活動を行っております。時代や環境の大きな変化を受け、私たち吹奏楽部も新しい音楽づくりの体制構築、組織の抜本的改造など、多くの変化に挑戦してまいりました。「今の私たちの環境にふさわしい活動とは何か」「持続可能な組織を実現するにはどうすればよいのか」、こうした問いを胸に、試行錯誤の日々が続きました。私たちが最も大切にしていることは「自分たちで音楽をつくる」という姿勢です。中学校や高校の部活動と、大学の学生団体活動は大きく異なります。顧問の先生が主導するような組織ではなく、私たちができる最善を尽くし、私たち自身の力で実行する必要があります。これこそが学生団体のあるべき姿であり、維持していかなければならないものだとは私は考えます。大きな変化の中でも、「どうにかしてより美しい自分たちの音楽をつくらう」、「より健全な学生団体としての活動を行おう」という思いのもと、仲間と知恵を出し合い、話し合い、時にぶつかり合いながら、この部を前進させてまいりました。

日頃の練習においても、一人ひとりの部員が責任を持つ演奏者としての自覚を持ち、個人の技術を日々磨いています。この結果、2024年9月28日に開催された西関東吹奏楽コンクールにおいて、山梨県代表として出場を果たし、金賞を受賞することができました。普段私たちが練習に励むことができ



山梨県吹奏楽コンクール



奈良井宿宿場祭



東桂小学校

いること、またこのような成果を得られたことは、偏に大学職員の皆様、文化会並びに学生団体の皆様のご理解とご協力があったことです。心より感謝申し上げます。

私たちの吹奏楽部では「人と、地域とつながる」ことを大切に活動しております。地域の皆様に開かれた自主開催公演の実施や、地域イベントへの参加など、様々な機会を通して地域とのつながりを深めてきました。近頃では演奏のご依頼をいただく機会も非常に多くなり、私たちの音楽を楽しんでお聴きいただけることを大変嬉しく思うと同時に、私たちの活動を温かく支えてくださることに心より感謝申し上げます。私たちはプロの楽団ではありません。学生という立場の中で、「演奏すること」だけにとらわれず、一つの学生団体として、地域の皆様の「力」となる活動とは何かを模索しながら、これからも邁進してまいります。今後ともご支援、ご声援のほど、よろしくお願い申し上げます。

都留文科大学吹奏楽部は、挑戦を止めることなく学生団体の可能性を追求し、これからも前進し続けてまいります。都留文科大学の今後益々のご発展を心より祈念し、結びの言葉とさせていただきます。

メンバーが
よく行く場所

- 都の杜うぐいすホール
- 手打ちうどん 石井
- あやの
- らくしよ
- またぎや
- 吉廣

準硬式野球部

最後の
学生野球

準硬式野球部 65代主将
学校教育学科 河野 愛音

私たち準硬式野球部は、現在新関東リーグ1部に所属しており、リーグ優勝および上位大会進出を目標に、日々練習に励んでいます。今年のチームは、数年ぶりに「本気でリーグ優勝を目指す」と言える体制が整いました。そこには、学生野球最後のシーズンを「勝利」にこだわって締めくりたいという、強い覚悟が込められています。

新関東リーグに所属する大学のうち、都留文科大学を除くすべてが私立大学です。私たちは、過去に連続して下位の成績に甘んじていたこともあり、周囲から軽んじられることもあったかもしれません。しかし、「弱者でも勝てる野球」の徹底と、何よりも勝利にこだわる「底力」を信じ、日々研鑽を重ねてきました。

まず初めに、私たちは部の組織再建に取り組みしました。主将をはじめ、主務や会計との連携を強化し、「時を守る」ことの徹底を図ることで、規律ある運営体制を築いてきました。これからの都留文科大学準硬式野球部を担う世代が、より野球に集中できる環境づくりを意識した取り組みです。

私たちの目標はリーグ優勝ですが、目的がリーグ優勝ではありません。部活動は単に技術があればよいのではなく、野球だけに打ち込めばよいというものでもありません。だからこそ、私たちは「学校に良い影響を与える存在でありたい」と考えました。その思いから、途絶えていた桂川祭への出店や、体育会の業務への積極的な参加など、身近なところから一つひとつ行動を重ねてきました。これらの成果が1年後、2年後そして数年後に良い結果となることを願っています。



私たちが都留文科大学として勝利を目指すうえで大切なのは、他大学との間にあるものを「差」ではなく「違い」と捉える発想だと考えています。たとえば、野球の技術を「差」として捉えてしまうと、技術力の高いチームになることが目的となってしまいます。

もちろん、技術の向上は必要不可欠です。技術があることが必ず「決定的な勝因」になるとは限りませんが、技術不足が「負ける要因」になることは確かにあります。そこで、私たちは技術で勝負するのではなく、他大学との“違い”を磨くことこそが重要だと考えました。

だからこそ、技術を向上させつつ、自分たちだけの武器を磨くことにフォーカスして練習に取り組んできました。この姿勢が、都留文科大学らしい勝ち方につながると信じています。

私たちの代はわずか1年限りの活動ですが、決して何も残さずに引退することはありません。必ず先輩たち、これからの世代に良い遺産を残して最後の学生野球を終えたいと思います。

メンバーが
よく行く場所 ● 楽山球場



ワンゲルにとっての 2025年

ワンダーフォーゲル部 第60代主将
地域社会学科 奥野 敬子



こんにちは、第60代ワンダーフォーゲル部主将を務めました、奥野敬子と申します。この度は都留文科大学が創立70周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

ワンゲルでは月に1回ほどのペースで登山に行っております。日頃の活動では、週に2回の机上講座、週に3回の朝練を実施して登山のための知識や体力、技術を身に付けています。また個人でもキャンプやボルダリングに行く部員もおり、自然活動全般を楽しむ部員が増えてきています。

令和7年度は部の公式の活動においてあまり天候に恵まれなかったという印象がありました。1年間の活動のなかで特に力を入れる夏合宿では悪天候により日程が1日短縮となり、新体制になって最初の幹部養成合宿では山域の変更を余儀なくされました。ですが、非常時の判断をするというひとつの経験になったと感じています。ワンゲルの活動は苦い思い出だけではありません。天候に恵まれた登山ではきれいな景色と達成感を味わうことができます。特に新人合宿では山頂で雲海を見ることができ、山域を変更した幹部養成合宿では2日目に天気回復してきれいな富士山を見ることができました。また新しい試みとして新入生歓迎を兼ねてキャンプを5月末に行いました。バーベキューをしたり、バドミントンをしたり、夜は同じテントで眠ったりと、例年よりも早く新入生と親睦を深められたのではないかと感じました。天気に恵まれた日の活動はもちろん、恵まれなかった日の活動もすべて思い出・経験となって自分たちの力にできた1年だったと振り返ります。

さて、ワンダーフォーゲル部は私の代で60周年

を迎えました。これまで多くのOB・OGの方々に支えられて活動を続けることができました。令和7年度の新人合宿では食糧を寄贈くださったOBの方もいらっしゃいます。普段の活動ではなかなか感じることのできない部の歴史やつながりを感じました。自分たちの力だけではなく、周りの人からも支えてもらって活動ができていることを忘れずに今後も活動を続けていきたいです。

最後にはなりますが、この記念誌が発行される頃には代替わりをして本格的に新体制が動き出していると思います。ワンゲルでは引退した幹部は監事となって活動のアドバイスをするのが伝統になっています。これまでの先輩方のようにアドバイスで直接力になれるか不安ですが、楽しくのびのびと活動ができるように見守っていきたいと思います。部員みんなで協力し合って、ワンゲルでしか味わえない経験や楽しい思い出が増えていくことを願っています。今後のワンダーフォーゲル部がどのように発展していくのが楽しみです。



メンバーがよく行く場所 ●本部棟前の広場 ●大学の裏山(楽山)
●つるびーパーク横のグラウンド

つる子どもまつり事務局



地域と学生が紡ぐ つる子どもまつり

第56回つる子どもまつり 事務局長
地域社会学科 府内 宏樹

都留文科大学の創立70周年を心よりお慶び申し上げます。

私たち、つる子どもまつり事務局は毎年5月に大学にて開催される地域の子どものためのイベントを運営しています。「子どもたちに地域の中で健やかな成長を遂げてほしい」という想いのもと、学生が主体となって活動しています。このほかにも地域の方や文大生OBOGなど多くの方の協力を頂き準備を進めています。子どもまつり当日は参加団体が「くに」と呼ばれるブースを出展し、子どもたちが普段することができない体験を提供しています。

創立70周年となる2025年は5月25日に「第56回つる子どもまつり」を開催しました。第56回の目標は「みんながつながりあえる子どもまつりにしよう」でした。少子化や家庭用ゲーム機の普及により、学校以外で子どもたちが集まって遊ぶ機会が減っているのではないかと仮説を立てました。そして、異なる学校や年齢の子どもたちが子どもまつりで出会い、力を合わせて楽しむことができる場をつくらうと考えました。

この目標をもとにポスター掲示やビラ配布、SNS発信など広報活動を例年以上に強化するとともに、参加団体には子ども同士がつながり合える企画を依頼しました。当日はここ数年では最も多い約250人の子どもたちが遊びに来てくれました。子どもたちはそれぞれのブース企画で交流を深め、笑顔と熱気に包まれた一日となりました。子どもたちの楽しそうな様子から、つながりを生み出すことができたのではないかと感じています。

子どもまつりは、子どもたちがさまざまなことに挑戦・体験できる場です。しかし近年、少子化によ



第56回
つる子どもまつりの様子



り子どもの人口減少が進み、遊びに来てくれる子どもの人数が減少傾向であることが課題として挙げられます。将来的には子どもまつりの在り方が問われる日が来るかもしれません。それでも私たちは、子どもまつりを「地域における子どもたちの出会いと挑戦・成長の拠点」として守り続けたいと考えています。

都留文科大学の創立70周年という節目の年に、半世紀を超えて築き上げてきた子どもまつりの歴史と歩みを改めて確認し、次の10年、20年先の子どもたちへ引き継いでいくことが私たちの使命であると考えています。学生が主体性を持って地域とともに創り上げる子どもまつりは子どもたちだけでなく参加する学生の成長の場にもなっています。学生が企画から当日の運営まで責任を持ち、地域の方々と協働しながら行う体験は実践的な学びの場であると感じています。

結びにあたり、子どもまつりを支えてくださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。私たちは今後も子どもたちの健やかな成長と交流の場を守り育ててまいります。そしてつる子どもまつりが未来へと受け継がれ、さらなる発展を遂げることを願い、ここに決意を新たにいたします。改めまして、都留文科大学の創立70周年を心からお祝い申し上げます。

メンバーが
よく行く場所

●あやの都留店:新歓や子どもまつりに参加している団体さんとの交流の場でした。



鶴鷹祭と 半世紀の伝統の絆

令和7年度体育会本部会長
地域社会学科 神崎 耶音



はじめに自己紹介をさせていただきます。令和7年度都留文科大学体育会会長を務める神崎耶音です。蹴球部に所属しており、今年度は第49回鶴鷹祭実行委員長も担当しました。本稿では、創立70周年を迎える本学の記念誌に際し、今年の鶴鷹祭についてご紹介いたします。

鶴鷹祭は、都留文科大学と高崎経済大学による総合体育対抗戦として1973年に第1回が開催され、両校の学生が互いに切磋琢磨し、友情と競技の興奮を分かち合う伝統行事として長く受け継がれてきました。今年度は都留文科大学のホーム開催であり、選手や運営スタッフにとって、日頃の努力を発揮できる特別な舞台となりました。

大会は陸上、バスケットボール、バレーボール、ソフトテニス、剣道、水泳など、多彩な競技で構成され、各競技で一進一退の熱戦が繰り広げられました。特に水泳競技では応援と競技が一体となる場面が多く、総合体育対抗戦ならではの盛り上がりを感じることができました。

結果として、都留文科大学は実に7年ぶりの勝利を収め、高崎経済大学の連覇を止めることができま

した。競技の勝敗以上に、両校の学生が互いに健闘を称え合い、試合後の交流会で親交を深める姿は、鶴鷹祭の大きな魅力です。日頃は別々に活動する部活動同士も、鶴鷹祭を通じて一丸となり、応援し合うことで、体育会活動の意義や楽しさを改めて実感しました。

近年はコロナ禍により大会中断もありましたが、昨年度の開催を経て、今年は完全復活を果たしました。地域の皆様、協賛企業、関係者の支援があったからこそ、安全かつ円滑に大会を運営できましたことに、心より感謝申し上げます。

来年度はいよいよ節目となる第50回大会を迎えます。これまでの伝統を受け継ぎつつ、さらに多くの競技・学生が参加することで、より熱く、魅力ある大会に成長することを期待しています。鶴鷹祭は単なる体育大会ではなく、仲間と協力し挑戦する力を育む場であり、学生生活を豊かにする大切な文化として、今後も両校に根付き続けることを切に願います。

メンバーが
よく行く場所 ●体育会室



桂川祭実行委員会



桂川祭を終えて

第70回桂川祭実行委員会委員長
地域社会学科 田中 陽菜

私は第70回桂川祭実行委員会の委員長を務めさせていただきました。都留文科大学が70周年という記念すべき年に、桂川祭も70回目を迎えることができました。この長い歴史を紡いでこられたのは、桂川祭の成功に向けて努力を重ねてきた歴代の実行委員、大学職員や地域の皆様、そして参加して下さる学生の皆様のご理解とご協力のおかげです。心より感謝申し上げます。

今年度の桂川祭は、1号館の改装により様々な変更を余儀なくされました。しかしそのような状況の中でも、昨年度よりもさらに良いものを作り上げようと、出店場所を一から考え直し、長い時間をかけて企画を練り、キャンパスを華やかに彩り、素敵なパンフレットを作り上げてくれた委員たちがいます。彼らの努力には、尊敬と感謝の念に堪えません。

桂川祭の準備は5月頃から始まり、お客様の姿が想像できないまま、長い期間続きます。その中で、「楽しみにして下さっている方は本当にいるのだろうか」、「自分にできることなのだろうか」と悩むことも少なくありませんでした。それでも前進し続け、当日にお客様の笑顔や喜ぶ姿を見られることが、私



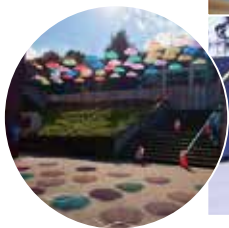
たち実行委員にとって何よりの幸せです。今年度も、長い準備と努力を重ね、当日は多くのお客様にご来場いただき楽しんでいただくことができました。委員たちの努力が実ったことを誇りに思います。

委員長という大役を務めさせていただき、学んだことは、一人の力では何もできないけれど、一人一人が力を合わせることでとても大きなことでも成し遂げられるということです。私が方向性を示すと、副委員長が意見をサポートしてくれ、委員たちがそれを実行に移してくれました。この経験を通じて、多くの人の思いと力が集まったときに生まれる大きな成果を実感することができました。これからの桂川祭も、参加して下さる団体の皆様、大学職員の方々、来場者の皆様への感謝を忘れず、すべての人にとって楽しい祭りであり続けることを願っています。

今年の桂川祭のテーマは「灯」でした。この灯が来年の桂川祭へと受け継がれていくことを、期待しています。

メンバーがよく行く場所

●雅龍(ガロン): 新入生歓迎会や打ち上げを行うことが多いです。





伝統を受け継ぎ、 未来へ挑む

女子バレーボール部主将
学校教育学科 齋藤 真愛

本学女子バレーボール部は、創部以来60年にわたり活動を続け、現在は関東大学バレーボール連盟2部リーグに所属しています。学生主体の運営のもと、日々の練習や試合を通じて技術の向上を図るとともに、仲間と協力し合いながら人間的にも成長できる場となっています。これまでの歴史の中で、多くの先輩方が築いてきた努力と伝統を受け継ぎながら、現役部員は日々練習に励んでいます。

活動は週に5回、学内体育館と市民体育館を中心に行っており、基本練習から試合形式まで、チーム全体のレベルを上げることを目標に取り組んでいます。また、定期的に合宿や練習試合を実施し、チーム力の向上に努めています。バレーボールを通じて培われるのは技術だけでなく、協調性や責任感、挑戦を恐れず前進する姿勢であり、部員一人ひとりの成長につながっています。

近年は着実に力を伸ばしており、令和7年度春季リーグ戦では関東大学2部リーグで第4位という成績を収めました。2部リーグの中でも上位に食い込むことができたのは、日々の積み重ねや部員同士の絆の成果であると感じています。一方で、1部昇格



を目指す上では、試合の中で課題も多く見つかりました。ラリーの中での決定力や粘り強さ、試合終了での集中力の持続といった点は、今後さらに強化していきたい部分です。

今後は、技術面の向上はもちろんのこと、チーム全体としての一体感を高め、どんな場面でも諦めずに戦い抜けるチームづくりを目標としています。部員一人ひとりが自ら考え、互いに声を掛け合い、支え合うことで「全員バレー」を実現し、応援して下さる方々に感動を届けられるような試合を展開していきたいと考えています。さらに、これまで支えてくださった多くの先輩方や関係者への感謝を胸に、伝統をつなぎながらも新しい挑戦を恐れずに取り組んでいく所存です。

女子バレーボール部は、今後も学生スポーツの魅力を発信し続けながら、学内外の多くの方々に応援していただけるよう、精進してまいります。そして、1部リーグ昇格という大きな目標に向かって、部員一同これからも練習に励み、成長を続けてまいります。

メンバーが
よく行く場所

●雅龍(ガロン):ガロンパフェが最高です!



児童文化研究部～COLORS～

育む心、
子どもたちとの関わり

2025年度児童文化研究部～COLORS～部長
国文学科 古平 芽生



手作り紙芝居を読む様子

都留文科大学児童文化研究部～COLORS～（通称：児文研^{じぶんけん}）は1956年に設立され、今年で69年になる、歴史ある部活です。

主な活動は、東桂地域コミュニティセンターで行われる「子ども教室」と文化祭での「にじいろよみきかせかい」、毎年5月に行われる「つる子どもまつり」への参加、その他依頼を受けてのイベント参加などです。そのため、日々の部活動では、それらのためのイベント企画や準備が中心です。子どもたちが安全に、そして楽しく参加してもらうためにはどうしたら良いのかを、企画の段階から部員一丸となって試行錯誤を重ね、工作の試作やミニゲームの作成を行っています。

今年の5月に行われた「つる子どもまつり」では、この児童文化研究部も「アートのくに」を出店し、テクスチャアート体験を行いました。今年は、3人1組でひとつの作品を制作し、自由にアートを制作してもらいました。くにで体験を提供するなかで大切にしていたことは、自由な子どもたちの発想を尊重し制作させていたことと、部員が積極的にコミュ

ニケーションの橋渡し役となり、子どもたちが自然に協力し合える雰囲気を作ることです。その結果、子ども同士人見知りすることなく活動することができ、来客数もアートに使うキャンバスが足りなくなるほど大盛況となり、大成功を収めることができました。ラメやスパンコール、絵の具などを独創的に使用し自由に作品をつくるその姿は、私たち大学生にとっても大きな刺激と喜びに繋がりました。来年の子どもまつりでは今年のプロセスを踏まえつつも、普段子どもが触れることの少ない体験を通して、良い体験や楽しい思い出になるようにしていきます！

今後は、メンバー全員で手書き紙芝居制作や、子ども向けの紙芝居作りワークショップを行うなど新しい取り組みにも力を入れる予定です。子どもたちの健やかな未来を願い、これからも活動していきます！

また、部員も絶賛募集中です！明るくアットホームな雰囲気の部活で、子どもたちと遊びませんか？

メンバーがよく行く場所 ●川藤



文化祭でのよみきかせかいの様子

学生団体一覧 (2025年6月現在 大学に届出を行っている団体)

自治会所属団体

- 学生自治会執行委員会
- 体育会
- 文化会
- 新入生歓迎運動実行委員会
- 桂川祭実行委員会

事務局

- つる子どもまつり事務局

体育会所属団体

- 男子アイスホッケー部
- 女子アイスホッケー部
- 空手道部
- 弓道部
- 剣道部
- 硬式庭球部
- 蹴球部
- 柔道部
- 準硬式野球部
- 少林寺拳法拳士会
- 水泳部
- ストリートダンスサークル
- 男子ソフトテニス部
- 女子ソフトテニス部
- 男子ソフトボール部
- 卓球部
- 男子バスケットボール部
- 女子バスケットボール部
- バドミントン部
- 男子バレーボール部
- 女子バレーボール部
- 男子ハンドボール部
- 女子ハンドボール部
- 氷上部
- 陸上競技部
- ワンダーフォーゲル部
- 女子ソフトボール同好会

文化会所属団体

- アカペラサークル☆☆☆
- F.S.C uni

- 演劇サークルまつゆき
- 都留文科大学合唱団
- かるたサークルあまつかぜ
- 都留文科大学 管弦楽団
- 競技麻雀部
- 軽音楽部
- サイクリングサークルPinkies!
- 茶道部
- 児童文化研究部 ～COLORS～
- シネマファクトリー
- 写真部
- 出版サークルらなんぷらす
- 書道部
- 都留文科大学 吹奏楽部
- 都留JAZZ倶楽部
- PLUS ONE+
- 邦楽部 息吹
- 都留文科大学マンドリンクラブ
- ユースホステルクラブ
- 落語研究会
- Revo編集部
- 路上ライブ

サークル団体

- OUTFITTER
- あきやまがかり
- Athletic Rappiner
- アニメ・声優研究会
- アンサンブルサークル～心花～
- WILLCOME
- うら山観察会
- A.C.Rosso Bianco
- F.Cリベロ
- 沿線地域活性化プロジェクト
「ツールリズム」
- OPPI
- OLIVE
- 学生団体“TSURU”
- かくれんぼサークル
- 合唱サークルLibertas
- 家庭部
- 華道サークル
- カフェ巡りサークル「ふらっと」
- カンボジア支援サークルPlenty
- クイズ同好会

- KPOPダンスサークルPersona
- 紅茶同好会
- こめっと。
- しえあはび
- 社会研究サークルMachina
- ジョギングサークルGO
- ST♡like
- 性教育サークルsexoligy
- 創作サークルfari
- 卓球サークルArc
- 都留文科大学
お菓子づくりサークルTorte
- 都留文科大学短歌会
- 都留文科大学俳句会
- 都留文科大学ブランカ
- 都留文科大学
メソポタミアサークル
- 都留文科服装学院 シュシュ
- 都留文キッパーズ
- つるぶん編集部
- 都留文放送局
- つるポケ
- デジタルゲームサークル
- 天文サークルメステラ
- 道志村ぼ。
- 図書館サークルLibropass
- 日本舞踊サークル雅～miyabi～
- 猫ボランティアサークル
- バドミントンサークルα β
- バレーボール同好会
- ピアノサークルAbumarsch
- 美術サークルPatchworks
- フィールド・ミュージアム・
スタディーズ編集部
- Bullっばい
- Hoops
- フラサークルMoani
- ぷらっとはうす
- ボードゲームサークル策士
- POKKA
- MASETTA△つるーんTFT
- 漫画研究会
- lads
- L!nk

IV. 教員の声

未来を見据えた教育・研究





国文学科の伝統と未来

国文学科長 野口 哲也

国文学科では、国語学(古代語・近代語)と国文学(古典文学・近代文学)に加え、国語教育学、漢文学、日本文化を専門領域とする専任教員がゼミを担当し、学生はこれらの領域が相互に関連しあった重層的な言葉の世界について体系的に学んだうえで、それぞれの関心に従って卒業研究に取り組んでいます。戦前の文学部で掲げられた「国文学科」という名称を今でも維持する大学は少なくなってきていますが、私たちはこの学問領域のもつ歴史的な蓄積を安易に手放すことなく、それ自体にも対峙し挑戦し続けながら新しい時代に発信していこうという意志を強く持っています。古典から近現代まで、日本語と日本文学について幅広く学ぶことはもちろん、これらを対象としてきた学問の歴史そのものも重要な研究対象と考えているのです。創設以来の充実したゼミとカリキュラムの体制を減ずることなく、むしろ拡充してきた努力の積み重ねを誇りとしています。

このように、それ自体が歴史的古典になりつつある看板にむしろ惹かれてきた入学者や、それを推薦して下さる高校の先生方も少なくないので、国文学科の学生の特長は問題関心や性格が重厚なことであり、生活の仕方や友だち付き合いや遊び心にもそれが表れているように見えます。どのゼミでも落ち着いた緊張感を持って議論が戦わされ、そこで得られた知見が、身近にある別の領域に開かれています。たとえば近代文学で卒論を書く学生であっても古典文学や漢文学の豊かな地層のうえにそれが成立していることを謙虚に知っており、古典を研究する学生もまた今日あるいは未来の文化や教育にそれがどう継承されているのかという活きた問題意識を持っているのです。

国文学の研究は、便利な物を作ったり経済的な利益を生んだりする明確な展望に欠けるように見えるかもしれませんが、学生たちは難解で複雑な言葉を読み解いて分かりやすく表現するという普遍的な説得力を身につけて不透明な社会に羽ばたいています。中高の教員や図書館司書はもちろん、学術や創作の場で活躍している卒業生もいますが、私たちのモデルケースはもっと迂遠で多様な道を歩みながら社会を豊かにしているのだらうと思われまます。自分という存在が何の役に立つのかという一種残酷な問いから解放されて、素朴にいま自分の好きなことや不思議に思うことについて、心も言葉も通じる仲間と徹底的に考えられる場所で純粋に学んだ経験こそが、過酷な変化に堪えて自身や他者を励まし助け樂しませる持続的な力になる。これは学生に限らず教員についても同様であって、特に人文系の研究者である学科教員はみな自分たちの環境をととても恵まれたものと感じています。

二十歳前後の若者が、自分の知識に驕ることなく刺激しあい、他者の関心を尊重しながら、時間をかけて鍛えあっている姿。それは目先の功利的な価値観や技術革新が人間の思考や感覚を甘やかし鈍らせていくような昨今の動向にあって驚くべきことです。都留の静かな学びの環境と国文学科の長い伝統に支えられた、誇りある個性に他なりません。国文学科の平均的な学生像は、時に内面の重厚さにコミュニケーション能力が追いつかないこともあって、そういう個性を好ましく思う私たちは、親心からつい手を差し伸べ口を出したくなりますが、『孟子』の故事にあるような「助長」の拙速に陥ることのないよう、四年間の成長を大切に見守っていきたいと思います。



英文学科

この10年間の歩みと現状

英文学科長 三浦 幸子

英文学科が創設されたのは1963年4月1日で、実業界で英語運用能力のある人材が求められていることや教育界で英語科教員が不足気味だったことを受けて、初等教育学科、国文学科に続く3番目の学科としての開設でした。創設当初の定員は50名(現在は120名)で、英語の名称もDepartment of English Literatureでした。その後、時代の変化や世界の動きに応じて、コミュニケーションの手段としての英語力養成の開始、文学文化、言語文化の2領域とイギリス文学・文化、アメリカ文学・文化、言語文化(英語学を含む)の3本柱となり、現在のカリキュラムでは世界英語(World Literature, World Englishes)、文学・文化(American Literature and Culture, British Literature and Culture)、英語学と英語教育(English Linguistics and Education)という3領域を専攻できるDepartment of Englishとして発展してきました。以下、この10年間の英文学科の歩みと現状を述べます。

1. 国際的に通用する英語運用能力の育成：英語文学、文化、言語、英語教育に関する専門性を高めるだけでなく、あらゆる場面で通用する実践的かつ専門的な英語運用力を身につけた人材の育成を目指しています。1,2年次に配当されているCommunication (English Skills, Advanced English Skills)のほとんどは英語母語話者の教員が担当し、生きた英語の指導を行っています。さらに、学生のニーズに応じて、英語母語話者と会話ができる「Eスペース」を昼休みに運営しています。
2. 専門領域研究の推進：専門領域に関しては、授業や演習(ゼミ)での学びだけではなく、近年、対外的に学べる場を学生に提供し続けています。2018年よりハーバード大学の世界文学研究所と

協定を結び、学生をセミナーに派遣できる資格を得ました。2024年度は関東甲信越英語教育学会の研究大会を、2025年度はヴァージニア・ウルフ学会の国際大会を本学で開催し、学生たちも積極的に参加しました。さらに、8年前より多和田葉子先生を本学科の特任教授としてお迎えし、毎年ワークショップを開催して、学生たちの学びを深めています。

3. 入試改革：一般入試や推薦入試に加え、15年前から総合型選抜(旧AO入試)を開始し、英語力に加えて英語に関する諸活動を考慮したり面接を実施することで、多様な学生の確保に成功しています。現在、(編入試験を除いて)4種類の入試を実施していますが、各入試形態がうまく機能し、魅力ある学生が日本全国各地から英文学科に集まっているといえます。
4. GCPの導入と進路選択の拡大：2015年度からグローバル・キャリア・プログラム(GCP)を開設し、現在は副専攻として運営しています。これは、日本人として国際感覚を持ち、英語で自分の意見が言える、また、英語による交渉、プレゼンテーションの出来るグローバルシーンで活躍する人材養成を目指す学科独自のプログラムです。日本のことを英語で説明できるように英語による授業科目のIntroducing Japan, Introducing Mt. Fujiも開講しました。またBusiness English, Hospitality Englishも開講し、英語教員や公務員を多く輩出するだけでなく、企業、特に英語を用いる航空系、観光系の進路も拡大しています。

英文学科は、専門性を保ちながらも時代とともに成長を続けています。



初等教育学科から 学校教育学科へ

学校教育学科長 水口 潔

■ 沿革

初等教育学科から学校教育学科への名称変更と

この10年間の歩み

この10年間で本学科では大きな変革があり、平成30(2018)年に大学内の学部再編に伴い、文学部初等教育学科から教養学部学校教育学科へ名称が変更されました。初等教育学科の出発点は、昭和28(1953)年4月に設立された山梨県立臨時教員養成所(1年制・定員50名)であり、それを母体として昭和30(1955)年4月都留市立都留短期大学(初等教育学科50名、商経科50名)が設立されました。その後50年を超える初等教育学科の伝統を引き継ぎ、平成30(2018)年4月に初等教育学科から学校教育学科への学部学科改組となり、令和7(2025)年4月定員180名として現在に至っています。これまでに14,000名を超える卒業生を輩出し、卒業生の多くの方が全国の教育現場で活躍されています。

■ 学校教育学科の特色

1. 教員免許状取得の拡がり

学校教育学科では、従来の卒業要件としての小学校教諭1種免許状取得以外に、中学校教諭(数学・理科)免許状、特別支援学校教諭免許状(知的障害者・肢体不自由者・病弱者)の取得が可能なカリキュラムになりました。また、他学科の科目履修によって、中学校教諭(国語、社会、英語)、高等学校教諭(国語、地歴・公民、英語)の資格獲得を目指す学生も多く見受けられます。今後、設置が予想される義務教育学校や公立の中高一貫校にも応えられる人材を輩出する教育の基盤が整備されています。

2. 教育フィールド研究・

SAT活動(Student Assistant Teacher)の充実

本学教員、教職支援センター、都留市教育委員会の協力のもと、学童保育(教育フィールド研究Ⅰ)学校の現場(教育フィールド研究Ⅲ)で、子どもたちと触れ合い、学び合う機会を経験するこの活動を通して、教えることや伝えることの、楽しさや難しさや真摯に対峙しています。このような活動が、その後の教育実習、ゼミ活動、学外でのボランティア活動、などの礎になっています。

■ 今後の展望

学科ポリシーを理解して志望してくれる高校生に出願してもらうため、様々な入試改革に取り組んでいます。少子化に伴う一般入試の出願減少に対応して、これまでのAO入試を総合型選抜入試に変更、一般推薦型入試の拡大、大学入学共通テストによる審査(共通テスト利用推薦、前期日程入試、中期日程入試)における3教科型と5教科型の導入、などから高校生の能力を多面的に評価する入試を実施しています。

本学科では、多様な専門領域である教員の力を結集するとともに、個々の強みを活かしたワーキンググループを形成し、様々な課題について、研究・検討を行っています。長き伝統にある「深い子供理解」を通底として、常に社会全体を見据え、数年先を見越した改革に取り組んでおります。ICTの活用、義務教育学校への対応など、今後の教員に求められる能力を教員と学生が一丸となり、社会の期待に応えられる人材を多く養成できるように邁進して参ります。



地域社会学科

誰もがその力を発揮できる社会をめざして。 条件の整備と、個々人ののびやかな活躍を

地域社会学科長 田中 里美

■ 概要

地域社会学科には、北海道から沖縄まで、まさに全国各地から、また海外から、4学年約700名の学生が集っている。その教育目標は、地域で活躍できるグローバルな視点を持った人材の育成である。2018年の学科発足以来、「地域経営」、「公共政策」、「環境社会」、「教育文化」の4コース、16名の専任教員が、これからの社会において、さまざまな人々とともに地域問題の解決に向けて活動するために必要な、地域を様々な角度から理解するための視点と力、また、社会を構想し、行動する力、そして、他者と協働する力を養うため、グループディスカッションやディベートなど、アクティブラーニングの手法を用いた講義、ゼミを展開している。

■ 沿革

それまで、初等教育学科、国文学科、英文学科という3学科体制だった都留文科大学に、1987年4月1日、定員60名の社会学科が新しく作られた。1995年、大学院文学研究科修士課程の開設時には、社会学地域社会研究専攻が定員5名でスタートした。2000年には学科定員の変更があり、社会学科の定員は100名と、約2倍に増やされた。2007年4月1日には社会学科が再編され、現代社会専攻(定員90名)、環境・コミュニティ創造専攻(同60名)という二つの専攻が新たに設置され、定員は従来の1.5倍へと拡大した。その後、2009年に大学は都留市立都留文科大学から、公立大学法人都留文科大学となった。2018年4月1日、これまで文学部のみだった都留文科大学に新しく教養学部が加えられ、社会学科は教養学部の下、上記4コースを備えた地域社会学科として改変、スタートした(定員150名)。

■ 近年の状況

都留文科大学が70周年を迎える2025年、地域社会学科は開設8年目を迎えた。2022年3月に初めての卒業生を送り出してから、すでに4学年が都留を巣立っていった。この間、2024年には地域社会学科で新カリキュラムがスタートしている。

■ 今後の展望

学習指導要領の変化を受け、また、大学での次のカリキュラム改訂を見越して、高校から大学の学びへの連続性、また、2年後期にはじまるゼミでの学びへとつなぐ地域社会学科の独自カリキュラムである「社会創造基礎」I～IVの組み立てについて、現在、学科で検討を開始している。



学生によるエコツアーガイド 浅間神社



フィンランドの村おこしの現場へ(2019年・社会学科)

比較文化学科の33年



比較文化学科長 菊池 信輝

比較文化学科は、1993年、現在同様「教員離れ」が強く懸念される中、本学において教員養成以外の新機軸を打ち出すために設置された。発足当時はまだ留学生は皆無に等しく、留学協定もなかったが、国際性を強く打ち出す学科として歩みはじめた。

「国際関係学科」や「国際コミュニケーション学科」ではなく、「比較文化学科」を名乗ったことは、人文科学系の大学である本学の本質を反映し、単なる政治や経済を超えた、人々の深い交流を企図した、意義深いものであったといえる。

発足当初の1995年の新聞では、入学後に教員免許が取れないことがわかり、戸惑っている学生がいたという記事もあったが、徐々に国際関係や国内外の文化について学ぶ学科として広く認知された。幸いなことに、多くの優秀な学生に恵まれ、2025年で33年目を迎えた。

国際性、現代性、学際性が当学科の基本理念であり、日本、欧米、アジアという3つの地域に、政治学、社会学、歴史学、文化人類学、文学といった様々な専門領域を有する10名の専任教員を配置し、さらに芸術と表象、国際開発、国際紛争とその解決といった、地域を越えた超域分野にも専任教員を3名配置している。

過去30数年を通して築き上げた当学科の特徴は、第一に、10周年、20周年、30周年と、それぞれの節目に、時の専任教員による共著として記念誌を刊行してきたことである（『記憶の比較文化論——戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』柏書房、2003年；『せめぎあう記憶——歴史の再構築をめぐる比較文化論』柏書房、2013年；『共生と記憶の比較文化論——とものつくる歴史と現在』春風社、2024年）。また、学生主体の「比較文化学会」を専

任教員が積極的に支援したりするなど、学科全体としてアカデミズムに重きを置いていることである。

第二に、アカデミズムに重きを置きながらも、専任教員が引率して学生と国内外において実体験を通して学ぶスタディ・ツアーや、国内の博物館見学、地域研究や国際協力の機関への訪問、富士山信仰の歴史を学ぶためのフィールドワークなどの学外授業が多数行われるなど、現場からの学びを重んじていることである。

第三に、外国語学習に力を入れていることである。2024年度からの現行カリキュラムでは、必須取得単位数が若干減ったものの、英語関連科目の必須取得単位数は相当数に上っている。併せてフランス語、ドイツ語、スペイン語、韓国・朝鮮語、中国語の中から1科目を、いわゆる第2外国語として履修することを義務づけている。

こうした学科の特色を背景に、多くの卒業生が、国際理解や多文化理解を求められる国内外の民間企業やNPO/NGOで活躍している。また、国や地方自治体の公務員として働くほか、本学大学院修士課程をはじめとする大学院を経て研究者として羽ばたく卒業生もいる。

発足当時と異なり、国際系の学部・学科は全国的に増大傾向であり、競争は一層激しくなる一方であるが、これまでの伝統に安住せず、常に成長を続け、多くの学生が集う学科として40周年を迎えたい。



国際教育学科

教える・学ぶを世界基準に — IB・国際教育のさらなる可能性

国際教育学科長 青山 郁子



1. 国際教育学科設立からの歩み

国際教育学科は、都留文科大学の教員養成という伝統の延長線上に、国際バカロレア (IB) 教育の教員育成を柱とする新たな教育構想として、2017年4月に創設されました。

本学科は、IB機構から認可を受けた数少ない高等教育機関の一つであり、4年制の文系学部としては日本初のIB教員養成コースを提供しています。4年間でIBの理念とスキルを体系的に学び、所定の単位を修得することで、PYP/MYP/DPのいずれかに対応する **IB Educator Certificate in Teaching and Learning (IB教員認定証)** を取得できることが、学科の大きな特色です。

カリキュラムは、IB教育に対応した授業を英語・日本語の両言語で展開し、教育理念、教育スキル、教育哲学などを幅広く学びます。ヨーロッパからの留学生とともに共修することで、多文化的な視点を育みつつ、高度な語学力と実践的なコミュニケーション能力を養う構成となっています。また日本全国のIB校との連携協定により、実践的な教育実習の場も多様に確保されています。

交換留学制度も本学科の柱です。北欧を中心とするヨーロッパ各国の教員養成系大学と独自に提携し、2年次後期には英語要件を満たす希望者を派遣します。学科設立当初は提携先はデンマーク、スウェーデン、フィンランドの3カ国であったが、その後、ベルギー3大学、リトアニア1大学と新たな協定を結び、学生は学びたいことに応じて明確な目的意識を持って、留学先を選んでいきます。

現在5期生までの卒業生が本学科から巣立って行きましたが、日本全国の様々な教育現場でIB教育に携わる卒業生の数も増え続け、ありがたいことに「IB

教員養成の都留文・国際教育学科」として広く認知していただいております。

2. 国際教育学科の未来像

設立10年を目前に控え、将来に向けて以下のような展望と挑戦を念頭に置いて進化を図りたいと考えています。

●提携校・異地域とのネットワーク強化

既存の北欧中心の提携大学を維持しつつ、教育制度・文化的背景が多様な欧州以外の地域との提携を拡大することで、学生の視野をさらに広げることができるのではと考えています。さらに、オンラインの国際共同授業や協働探究プロジェクトを構築し、より多くの学生が国際経験をえられる機会を提供できるよう、提携校との調整を進めています。

●卒業生ネットワークと教育コミュニティの深化

本学科は1学年に40名ほどの小規模学科であるため、学生同士の結びつきが強く、先輩が後輩のサポートを積極的に行っているのが特徴でもあり誇りです。今後、オンライン同窓フォーラム・講演会開催等を通じて、知見・経験を循環させるコミュニティを形成し、在校生との繋がりを深めて行きたいと考えています。

●キャリア支援と多様な進路形成

教育現場だけでなく、NGO・NPO、国際機関など教育を媒介とする多様なフィールドへ卒業生を送り出すため、インターン制度拡充を整えていく計画です。

こうした展望を掲げつつ、国際教育学科は“グローバルな学びと地域との共鳴”を両輪としながら、次の10年、20年を牽引していきたいと考えています。

都留文科大学附属図書館の この10年の歩みと今後の展望

附属図書館長 春日 由香



都留文科大学附属図書館は、大学創立70周年という節目にあたり、過去10年間の取り組みを振り返る機会を得ました。この期間、図書館は教育・研究活動を支える「知的基盤」として、学術情報環境の整備に力を注いできました。近年では、学術総合データベースの拡充により、学生・教職員が多様な情報資源にアクセスできる環境を整備しました。また、図書館ガイダンスの内容を充実させた結果、平成26年度に1,086名だった年間受講者数は、令和6年度には2,084名にまで増加しました。附属図書館は、利用者が情報を主体的に活用できる力を育む支援を継続的に行っています。

特筆すべき取り組みとして、平成26年に図書館サークル「Libropass」が結成されました。所属学生による図書館行事への積極的な参加が増え、読書活動イベントの企画・提案が行われるようになったことで、図書館は「学びと交流の場」としての役割を一層強めています。「新入生向け図書館ツアー」や「館内スタンプラリー」などの開催を通じて、学生の図書館利用の第一歩を支援しています。オープンキャンパスでは、来場者に図書館の魅力を伝える

案内活動を行い、大学の知的環境の一端を紹介しています。近年では「図書館総合展地域フォーラム」などへの登壇など、活動の幅を広げています。これらの取り組みは、図書館が単なる資料提供の場を超え、学びのコミュニティとして進化していることを示しています。

さらに、『都留文科大学研究紀要』は令和6年10月に第100集記念号を発行し、本学の研究成果を広く発信する節目となりました。

一方で、今後の課題も明確になってきています。データベースやE-journalにかかる費用は年々高騰しており、限られた予算の中で持続可能な情報提供体制を構築する必要があります。また、図書資料のデジタル化が進む中、紙媒体とのバランスを考慮した予算の割り振りも重要な課題です。これらの課題に対応しながら、都留文科大学附属図書館は今後も学生・教職員・地域のニーズに応え、「知の拠点」としての役割を果たし続ける所存です。70周年の節目を新たな出発点とし、次の10年に向けて、より開かれた、より豊かな図書館づくりを目指してまいります。



オープンキャンパス図書館ツアー



図書館外観 入学式の頃



図書館4階



情報センター

情報センターの役割と展望

情報センター長 佐藤 裕

■ 情報センターの概要

情報センターは1994年4月に設置され、以後、学内ネットワークとコンピューターを使用した情報教育をおこなってきました。通常業務に対しても学務事務システムを構築し、その管理とサポートにあたってきました。現在、情報センターは事務職員に加えて1名の専任教員と複数の非常勤講師を擁しており、それぞれが日々のセンター業務を担っており、情報センター運営委員会を通して課題を共有する体制が整っています。さらに、機器の点検やトラブルの確認に加えて、学生向けのWord、Excel、PowerPoint講座を担当するICT指導員によって、日々のセンター業務が円滑に進められています。

情報センターによって、(1)学内LANシステムの管理、(2)情報教育教室の管理とサポート、(3)学務事務システムの管理とサポートが支えられています。キャンパス内では無線LAN (Wi-Fi)が利用でき、無線LAN対応のプリンターから印刷し、授業でiPadやパソコンを活用した講義が可能になっています。

■ 近年の状況

情報センターでは、文部科学省が掲げる「教育の情報化」に呼応するかたちで教育の質向上を図り、情報社会への適応と人材育成を念頭に(1)情報リテラシー、(2)情報フルエンシー、(3)教職リテラシーの教育を重視してきました。とくに教職を希望する学生に対しては、教科指導における情報通信技術 (ICT) の活用を授業に組み込んできましたし、教職外のキャリアを希望する多くの学生に対しても、情報技術の習得をめざした実践的な指導に力を入れてきました。

さらに、情報センターは教職員のあいだで議論を重ねながら、値段やスペックを加味しながら新入生

が購入しうるノートパソコンを推奨してきました。これにより、学生のあいだでの本センターの認知度も高められてきました。

一方で、諸会議でのiPadの原則使用や、演習やゼミ指導を中心とした授業でのZoomの活用など、教育における情報化や業務の効率化推進に対しても、情報センターが果たしてきた役割は大きいといえます。

■ 今後の展望

情報センターでは情報インフラの耐性強化を模索してきました。とくに2024年には本学のセキュリティ対策を大幅に改善する機運が生じ、情報センター長や事務職員らが他の複数の大学を視察、先進事例を学ぶとともに、大学ICT推進協議会の年次大会にて本学が抱える課題や展望を報告しました。

目下進められている1号館の改修工事を受け、情報教育の教室が2号館に移転しました。それを機に、情報センターではこれまでの反省をふまえながら、授業進行が適切におこなえるようなインフラストラクチャに関する議論を重ねてまいりました。その結果、教室の広さにあわせた電子黒板や中間モニターを配置し、機材等をつなぐ配線の位置を整え、受講生のニーズにあわせたサイズの机を設置しました。今後も情報センターを挙げて、学習者目線に立った教育インフラや、災害や火災、サイバー攻撃など不測の事態にも耐えうる情報インフラを整備しつづけていく所存です。



情報教室



入学センターの歩みと 今後の展望

入学センター長 両角 政彦

入学センターは、2017年度に本学のセンター改革の一環として新設されました。これには2020年度から始まった大学入学共通テストに対応していく目的もありました。組織機構としては、入試制度委員会の業務を引き継ぎ、入学センター運営委員会が入試全般を統括し、入試管理委員会と入試選考委員会と連携しながら業務を行ってきました。

入学センターの設立の目的について、福田誠治元学長・名誉教授は、『学報』134号(2017年)で、「入試だけでなく、高大接続にも配慮しながら、高校と大学が共同して若者の進路選択を支援する活動に展開し、「山梨の都留の地に大学生を集めるだけの魅力を保ち、若者にアピールし続けることが期待」されると述べられています。

これらの目的を達成するために、当センターは入学選抜の企画立案、学生募集、大学説明会、進学相談会、高校訪問を行い、企画広報担当やIR担当とも密に連携してきました。高校訪問では教職員が2022～2024年度に年平均で300校を超える訪問を行ってきました。また、伝統の地方入試についても志願状況に合わせて会場を再編しながら、現在は全国17都市(推薦16会場、中期14会場)で行っています。少子高齢化・人口減少が一層進み、志願者の確保が難しくなる中で、入試業務とともに広報活動も含めた業務が不可欠になってきたこととなります。

2016年度入試から2025年度入試までの過去10年間の志願者数の変化を振り返りますと、2017年度以降に4年連続で全志願者数が減少し、その後、増減を繰り返しながら、2025年度入試では過去10年間で2番目に多い志願者を確保することができました。ただ今後の大学のゆくえを左右する18歳人口の変化によると、2030年度入試で急減し大きな節

目になることが予想されています。また、本学への入学者が多い山梨、静岡、長野の3県の18歳人口は、2025年度から2034年度までの今後10年間に相対的に高い減少率が予測されています。

こうした社会状況に適応するため、既存の大学の序列にとらわれない優れた志願者の確保と入学者の獲得へ向けて、高校との関係強化や新たな入試制度の導入などの入学者選抜方法の改革、入試の地方会場の見直しといった対応が必要となってくるでしょう。また、高校訪問や出前講座、進学説明会といった事業により一層力を入れて取り組み、地域連携的な学びやきめ細やかなサポート、そこでの学びを活かしてさまざまな分野で活躍していくことができるというツルブンならではの強みを広くPRし、全国から多様な価値観を持つ優秀な学生の確保に努めて参ります。



教職支援センター

伝統と革新を両輪に、 教員養成の未来を拓く

教職支援センター長 野中 潤

都留文科大学は、1953年に山梨県立臨時教員養成所として発足して以来、約70年間にわたり、累計7,000名以上の教員を全国の教育現場に輩出してきました。本学が一貫して目指すのは「教育のエキスパート」の育成です。この伝統ある教員養成の理念を、少子高齢化に伴う公立学校の統廃合や、生成AIの登場によってこれから加速していく社会の劇的な変化といった現代的な課題に対応しながら具現化する中核組織が、教職支援センターです。

教職支援センターは、複雑化が進行している学校教育において資質・能力の高い教員を育成・支援することを目的に設置され、以下の3部門体制でその役割を担っています。

センター1（地域連携・SAT推進部門）

センター2（教職キャリア支援部門）

センター3（ICT活用推進部門）

本学の強みである「理論と実践の往還」を担うのが、センター1が推進する本学独自の「SAT (Student Assistant Teacher)」活動です。大学での理論学習と並行し、学生が地域の小中学校等で実践的な経験を積みます。近年はこのSAT活動を基盤とし、地域の小学校と連携した「都留文科大学探検」の受け入れを実施しました。これは、学生が現場へ「出向く」だけでなく、未来の教員として地域の児童を大学に「迎える」という、新しい双方向の地域連携の形を創出したものです。

そして、学生の入学から卒業、さらにその先までを一貫して支えるのが、センター2（教職キャリア支援部門）です。近年の分析では、「教職入門」履修者（主に1年生）のうち、3年生までに教職を志望し続ける学生が約半数にとどまるという、早期の意欲減退が課題として示されています。この課題に対し、

センター2は、学生一人ひとりの学びの軌跡を可視化する「教職ポートフォリオ」の活用を推進し、教職への意欲を継続的に高めるための履修支援を強化しています。また、「教職実践研究会」の開催などを通じて在学生の専門性向上を図るのみならず、本学の強みである「卒業生・現職教員との連携強化」を掲げ、彼らの知見を在学生に還元すると同時に、「現職教員への継続的な支援(卒後支援)」も視野に入れた取り組みを展開しています。

さらに、GIGAスクール構想の進展など「新しい時代に合わせた教職課程のアップデート」を牽引するのが、センター3（ICT活用推進部門）です。未来の教員は、多様な環境に対応できる実践的指導力が求められます。センター3は、THMC（6号館）3階の「デジタルコモンズ」を拠点に、VRシステムや3Dプリンター等の先進機器を活用した教材開発や授業研究も進めています。

創立70周年のキャッチコピーは「色とりどりのミライへ。」です。教職支援センターは、いかなる教育現場においても輝きを放つ「教育のエキスパート」の育成に、今後も邁進してまいります。



教職支援センター



地域交流研究センター

地域交流研究センターの これまでとこれから

地域交流研究センター長 鈴木 健大

地域交流研究センター（以下、センターと記す）の設立は、1980年代における教育学者であり本学学長を務められた大田堯先生による「都留自然博物館」構想と動物学者の今泉吉晴先生による「都留市フィールド・ミュージアム」構想に端を発しています。それまで地域で学生や市民、教職員が蓄積してきた諸実践や理念を大学として大切に受け継ぎ、発展させる目的で、2003（平成15）年にセンターが発足しました。センターの方針及びその役割は、次の3点になります。

- ①大学に対する地域の要請に、本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと。
- ②地域性や実践性の問われる本学の研究・教育の一環として、地域（現場）に赴き、「課題」と取り組む地域の人びとと共同して活動を展開すること。
- ③これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うこと。

センターが地域のあらゆる要請に対応する単なる「地域交流センター」ではなく、地域との交流のあり方を本学の研究や教育の側面から捉え直し、兼担教員の持ち味を活かした取組を通して地域での交流のあり方を研究する「地域交流研究センター」であることも確認してまいりました。

本学の研究・教育の特色を活かした地域貢献活動を充実させるために、センターでは現在、主に次の5点の活動を柱に実施しています。

一点目は、研究活動として、「自然共生研究部門」、「共生教育研究部門」、「まちづくり研究部門」、「グローバル交流研究部門」を設置し活動しています。二点目は、教育活動として、Tsuru副専攻プログラム「フィールド・ミュージアム研究」の提供、

地域交流研究フォーラムの開催、子ども公開講座の開催等を実施しています。三点目は、地域貢献活動として、市民公開講座、都留市放課後子ども教室事業、地域におけるボランティアニーズと学生間のマッチング事業「文大ボランティアひろば」等を実施しています。四点目は、地域交流研究教育プロジェクトとして、都留市総合計画に基づいた「食育つる推進プラン」の実践等に取り組んでいます。五点目は、広報活動として、都留文科大学前駅における展示やニュースレター「Tsuru Field Museum News」の発行等を行っています。

2025年4月、都留市複合型居住プロジェクトにおける大学連携施設「つるフィールド・ミュージアム」が竣工し、センターの新拠点が誕生しました。1階は太田堯先生のコレクションを収蔵する資料室やセミナー室、2階は家庭科に関連した調理室や実験室、被服室となっています。「楽しむ」、「学ぶ」、「つながる」といった施設計画のポリシーを体現できるよう、今後もセンターの活動をより一層充実させていきたいと考えております。これまでセンターに関わっていただいた全ての皆様に感謝申し上げますとともに、今後もセンター活動への皆様の御理解・御協力を賜れますよう、よろしく願いいたします。



つるフィールド・ミュージアム(2025年4月竣工)



国際交流センター

この10年間の国際交流と
未来へ向けて

国際交流センター長 茂木 秀昭

この10年間の国際交流の歩みは、国際交流センターのみではなく、2017年度開設の国際教育学科や各学科でのスタディツアーなど、量的にも質的にも拡大が図られた。

2015～2016の2年間は、全員留学を柱にした国際教育学科の準備室教授として、既存の留学プログラムとは別枠での提携先開拓を求められ、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパを訪問して交渉する中、唯一北欧の三カ国が、相互の学費無料での交換留学に応じてくれて、デンマークの教育系6大学、フィンランド・オーボ大学、スウェーデン・ウプサラ大学との提携が実現し、2018年には1期生の2年後期に52名派遣、北欧からは28名を受け入れた。

それと同時に、それまで日本語を1年以上勉強してきた留学生しか受け入れてこなかった体制を改め、日本語中級以上しか提供していなかったカリキュラムも変更し、日本語初級講座を開設し、日本語が全くできない留学生も受け入れるようにした。

1998年から始まったカリフォルニア大学との交換留学は先方の事情により2018年1月に提携終了の通告があった。

2019年度より国際交流センター長を拝命したが、6月にはワシントンD.C.でのNAFSA（北米での国際交流の年次大会）で、英語圏の提携校の全てと話し合いを持ち新しいパンフレットを渡し、交流の継続を確認し合った。9月にはヘルシンキでの国際交流の年次大会(EAIE)に参加して、新たな提携先の開拓のためいくつかの大学と話し合いをもった。

交換留学2年目の国際教育学科では北欧生約30名を受け入れ、2期生の2年生38名程を送り出したが、日本語JASTプログラム、JSP（英文学科、国文学科、

比較文化学科の三学科合同のJapan Study Program）と国際教育学科への留学生受け入れプログラムを統合して、全学的なTsuru International Student Program (TISP)を作成し、本学への留学生が共に学べるように、英語で提供される科目をまとめ、履修モデルの作成などをおこなった。

しかし年明けにコロナ禍が拡がり、2月の韓国への留学は実施できたものの、3月のセントノバート大での語学研修は中止となり、2020年度4月以降は、交換留学等全て中止、もしくは延期となった。その間、留学再開の基準などを定めた「留学に関する安全ガイドライン」を作成し、7月以降、タスマニア大、セントノバート大、湖南師範大、上海外語大、韓国外国語大、トゥールーズ大等への派遣学生の選考を開始したが、本格的な留学再開は2022年度以降となった。

2020年度からセンターの特任教員も2人体制となり、瀬尾尚史先生(英語圏)、周非先生(アジア圏)の貢献により、2025年度には、コロナ前と比較すると、交換留学協定校が6大学から12大学へと倍増し、新たにイギリス・グリニッジ大学、スウェーデン・ダーラナ大学、ベルギー・アントワープ大学、イタリア・ナポリ東洋大学、エストニア・タリン大学と交換留学協定を締結し、国際教育学科の交換プログラムを除いて、本学から派遣予定の学生は12名となり、受け入れも15名前後と過去最高の水準に達している。アジア圏でも、中国・北京理工大学、西北大学、韓国・世宗大学校、誠信女子大学校、啓明大学校との派遣、受け入れが2024年度から新たに始まっている。

将来の本学の生き残りを懸けて、今後、全学的な国際交流のさらなる拡大と充実をはかることが期待される。



語学教育センターの これまでと展望

語学教育センター長 上原 明子

語学教育センター（Center for Language Education）は、2005年設立の外国語教育研究センター、2013年設立の国際交流センターを経て、国際交流センター内の外国語教育部門と日本語教育部門の配置換えにより、外国語教育の充実と高度化を担う組織として2017年に発足しました。3号館3階に設置され、所属メンバーは、センター長、英語の専任教員2名、中国語の特任教員1名、スペイン語の特任教員1名、日本語の特任教員1名、事務職員1名です。これに加え、三十数名の非常勤講師が授業を担当しています。

語学教育センターの使命は、相互につながった世界で成功するために必要な言語スキル、文化的知識、批判的思考力を学生が身につけられるようにサポートすることです。革新的な教育アプローチ、デジタルツールとリソースの活用、そして学術的卓越性への取り組みを通じて、学生が主体的に多様な文化に関わり、視野を広げ、グローバル市民になれるよう支援することを目指しています。言語を学ぶことは単なるスキルの獲得にとどまらず、異文化理解や国際的な対話能力を高めることにつながります。語学教育センターは、学生が言語を通じて異なる文化や価値観を理解し、グローバルな視野を持って行動できるよう、教室内外での多様な実践的活動を促進していきます。

語学教育センターでは、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、韓国朝鮮語、留学生のための日本語、そして日本語教員を目指す人のための日本語教員養成課程など、さまざまな言語に関する科目を開講しています。共通教育の外国語は、全学生にとって必修です。12単位取得する必要があったのですが、2024年度から8単位取得に縮小されま

した。このことにより、外国語を学ぶ時間が減った学生がいる一方、必修で履修した外国語以外の外国語を選択科目として履修することが可能になり、複数の外国語を学ぶことができるようになりました。英語については、習熟度別クラスにより授業を行っており、e-learningシステムも導入しています。授業以外にも、学生の外国語能力を最大限伸ばすため、個々の希望に応じて専門スタッフが幅広い支援を行っています。各言語の検定試験の学内での実施、検定試験対策講座の実施、留学希望者および一般学生向けの外国語学習相談などです。さらに、参考書や問題集、DVDの貸し出しや、交流イベントの開催、CALL教室の開放なども行っています。

近年は、グローバル化とデジタル化の進展により、地理的制約を超えて世界各地とつながる機会が広がりました。本学が創立70周年を迎える今日、語学教育センターは、学生が言語を通じて異なる文化や価値観を理解し、世界と地域を結ぶ架け橋となれるよう、教育・研究の拠点として一層の発展を目指してまいります。日本語教員養成課程については、現在、登録日本語教員養成機関の申請に向けて準備を進めています。充実したカリキュラムにより、これまで以上に、専門性を有する日本語教師を輩出していくことができると考えています。



学習相談の様子



共通教育センター

都留文科大学の共通教育のこれから

共通教育センター長 日向 良和

都留文科大学共通教育センターは、都留文科大学で学科の専門科目以外の教育のデザインと実施を目的として2019年に設置されました。現在まで、専任教員1名(センター長)が配置され、初年次教育や教養教育、情報教育、体育科目など幅広い科目の開講、運営をしています。

都留文科大学では大学生として、また一市民としての教養を深める教養科目、学生の健康維持や各種スポーツ等の体験を目的とした共通体育科目、基本的なICTを身につけることを目的とした情報専門科目、学生の人生設計の基礎となるキャリア科目、語学能力を身につける語学科目などを、主に学部1年次から2年次にかけて履修し、大学生としての基本的な知識、スキル、そして研究に対する意識を身につけて、3年次以降の学科専門科目、ゼミナール、卒業研究に向かうことを学修のモデルとして設計しています。このうち、共通教育センターでは、それぞれ管轄するセンターがある、キャリア科目、語学科目、情報科目以外の科目について、そのデザインと開講、運営をおこない、学生の初年次教育の重要な部分を担当しています。

また、2024年度から、学部共通の副専攻コースとして「デジタルシティズンシップ」、「フィールド・ミュージアム研究」、「ジェンダー研究」、「環境ESD」を設置し、教養科目の内容を体系化して、学生が共通教育で学んだ内容についても学修成果として社会で示すことができるようになっています。変化の大きな時代に、自己を確立し、社会の課題を解決していくための基礎的な知識、スキルを身につけた学生を育てていくことは、全ての大学に課せられた使命です。共通教育センターは、この基礎的、一般的な知識、スキルを学生が身につけ、卒業研究

や社会で活躍することを目標として、日々活動をしています。

現在共通教育全体としては、急速に進む生成系AIの利用や、デジタルデータを元に駆動する社会活動に対して、本学学生が参加していくための、新しい技術や知識を学ぶことについて、教育内容や方法を一新していくことが課題となっています。また日本の社会も多様化し、摩擦も大きくなっています。社会においてさまざまな背景や考えをもった人々と暮らしていくためには、さまざまな価値観や視点を学び、自らを客観視する力を育てることが重要で、こちらも今後の共通教育全体で対応する必要があると考えています。

共通教育は学科での学びと違い、学生の興味関心を喚起することが比較的困難です。現代の社会に通じ、魅力的なテーマの科目を開講していくことが、これからの都留文科大学共通教育センターの役割と考えています。



新しい学習の場 THMC3階ラーニングcommons



保健センター

「学生生活支援」のハブとしての 保健センターへ

保健センター長 加藤 めぐみ

■ 保健管理室から保健センターへ

学生たちが安心して学び、大学生活を謳歌するためには「心身の健康」が不可欠です。保健センターは2025年度、保健部門に保健師、看護師各1名、学生相談部門に常勤カウンセラー2名と非常勤カウンセラー3名、事務職員、さらには臨床心理を専門とする特任教授という体制で、学生たちの日々のところとからだの健康を見守り、サポートしています。しかし現在のような保健部門と学生相談部門からなる組織が、救護室、休憩室、面接室、計測室、コミュニティ・スペースを備えたセンターとして4号館1階に設置されたのは2009年7月のこと。それまではコミュニティーホールの地下の小さな部屋で「保健管理室」として、保健担当の先生と臨床心理士のお二人であらゆる業務が担われていました。

■ 新型コロナ・ウィルス感染症対策の 拠点から学生相談の充実へ

学生たちのニーズに応え、進化を遂げてきた保健センターに2020年春、新型コロナ・ウィルス感染症のパンデミックは大混乱をもたらしました。マスク・消毒薬の確保、発熱者の対応、鳴り止まない電話相談、ガイドラインの作成、ワクチン接種の案内、部活動・課外活動の管理指導… 県外移動、外出が制限され、オンライン授業が行われていた最中も保健センターはフル稼働で、私自身、保健センター長として丸3年間、対応にあたりました。本学が重症患者、死者を出すことなくコロナ禍を乗り切れたのは、学生、教職員の健康、安全を第一に考える保健センターのスタッフの誠意、熱意、それに応えてくださった皆様のご協力があったからこそと感謝しています。コロナ禍を経た現在の保健センターには一見、穏や

かな時間が流れていますが、実は、学生たちのところの相談は絶えません。2025年春、新入生に実施した「ストレスチェック」の結果851名中120名に気がかりがあったため(うち87名に希死念慮が確認されました)、全員と面談を行いました。彼らのところにいかに寄り添い、支援していくかが目下の課題です。

■ 「学生生活支援」のハブとしての保健センターへ

本学には心身のケアにかかわる保健センターだけでなく、キャリア支援・国際交流・教職支援各センター、学生担当、教務相談など、学生たちの悩みに応じる窓口が複数あります。でも沢山ありすぎて、学生だけでなく教職員も、どこの窓口でなにを相談したらいいのかわかりません。そこで2025年8月、4号館に移設した学生支援課の一角に「なんでも相談窓口」を開設しました。どんなささいなことであっても、そこで尋ねれば、適宜、解決への道が拓かれるはずです。相談によっては、ひとつの窓口での解決が難しいこともあります。そのような場合にも対応できるよう大学では学生支援課、教務課、各センターがつながる「学生生活支援連絡会議」を組織しています。本会議を通じて、学内の関係部署の担当者が連携して問題解決にあたり、必要に応じて担当教員、家族、学外の医療機関、市役所、警察などとも協力できるシステムを構築しました。学生たちが安心して学べる教育・生活環境のさらなる充実を目指し、これからも保健センターは「学生生活支援」のハブとして、進化を続けていきたいと思っています。



保健センター内のくつろぎスペース
旭川から来たシロクマがお待ちしています!



キャリア支援センター

キャリア支援センター設立から、 より充実した学生支援への展開

キャリア支援センター長 山本 芳美

ご存じのとおり、本学は教員養成課程を軸にして発展してきた大学です。1985年になって教務厚生課 就職係が発足し、1998年の機構改革に伴い、学生課就職室となりました。この間に社会学科や比較文化学科が増設されており、本学が教員以外の進路、つまり、公務員や一般企業、大学院進学などへの進路支援に本腰を入れ始めたことが窺えます。2000年前後には、国が取り組むインターンシップ推進などにみるように、全国的に学生の就職斡旋・就職支援の観点だけでなく、将来の人生を考えるキャリア教育の視点を取り入れた学生支援の重要性が高まりました。事務的な組織としての「就職課」から、教育機関としての「支援センター」に生まれ変わる動きが広まったことも背景にあります。

本学においても、2005年にキャリアサポート室、2012年にキャリア支援センターと名称変更を経ながら、体制整備を図ってまいりました。2012年夏には、センターの改装がはじまり、BGMが流れる明るいワンフロアに、ティーディスペンサーがあるフリースペースなどを擁する、学生が気軽に情報収集できる空間に生まれ変わりました。

私自身は2003年に本学比較文化学科に着任し、2年間で「就職委員会」に所属しました。その際、学生の7割が女子にもかかわらず、女性の就職相談員が配置されていないことに気づきました。母校の跡見学園女子大学を訪問したところ、就職課長であった山崎礼子先生が定年を迎えることがわかり、本学のキャリアアドバイザーとなっていただきました。

当時は、都庁を退職された方が公務員受験者の相談員となり、教員採用試験受験者の相談員として元小学校教員の方がおられました。キャリアに関する多岐にわたる希望や悩みをもつ学生の相談に対応するのは難しくなってきた時期でもありました。その後、少し

ずつ相談員体制が充実していき、2025年現在、キャリア相談員は地元のハローワークから派遣されている方を含めて9名を数えます。本学の規模の公立大学としては、充実した相談体制が整っている状態です。

90年代初頭のバブル崩壊以降、日本社会は経済が低迷し続けて「失われた30年」と評されています。企業就職でみれば、21世紀初頭は学生たちが50社以上まわっても希望する業界や職種につけなかった時期でありました。教員採用試験ならびに公務員試験も倍率が高い状態でした。しかし、少子高齢化が進んだことや若者層の人手不足もあり、2015年から10年間の就職希望者に対する就職率は、表(p.141「過去十年間の就職率の推移」)のとおりとなっています。ここ数年は98%前後を維持していて、以前のような就職活動の厳しさは薄れたと言えます。

経済動向に左右されますが、現在は楽観的に捉えれば「選ばなければ仕事はある」時代といえます。ただし、センター長としては、現状に満足せず、よりよい活躍の場を求めてほしい気持ちがあります。

「ガクチカ」という言葉を、就職活動に関して学生が意識するようになってきました。「ガクチカ」とは「学生時代に力を入れたこと」の略です。進路を決める時期になって、自分には「ガクチカ」がないとたじろぐ前に、すでに40年の歴史があるキャリア支援センターに足を運んでもらうよう努力しています。これからも、キャリア支援センターでは「あなたの一歩」を踏み出す支援を続けていきます。



キャリア支援センター



V. 70年を振り返る

思い出を語る 同窓生より





卒業生が語る、学びと青春の記録

Interview インタビュー

きん じょう ひろ やす
金城 宏安さん

「とにかく全力投球をして、そして自分の進むべき道を見極める、ということが必要」。インタビュー開始前、金城さんはインタビュアーを務める二人の沖縄県出身の学生たちにこう語りかけられた。本学の学生たちにメッセージを頂きたいというお願いにあらかじめ用意してくださった言葉であった。その言葉は、金城さんの学生時代とその後の人生が、まさにそのような時間だったからこそ頂いたものだった。

都留文科大学の前身、都留市立都留短期大学卒業生の金城宏安さんは、現在の沖縄県豊見城市で生まれ育った。1950年代後半の高校卒業が近づく頃、金城さんの周囲では「学校を卒業しても、ほとんど職がない時分」で、「集団就職で毎年、何十人か何百人かの人たちが「東京、大阪へ送り出されていた」という。この頃の胸中を、金城さんは本学創立

■ 話し手

金城 宏安さん

(1959年 都留市立都留短期大学初等教育科卒業)

■ 聞き手

東江 孝太、平良 菜都(学校教育学科学生)
菊地 優美

創立70周年記念誌編集部会員(学校教育学科講師)

2025年9月19日(金)10:00～12:00 沖縄県那覇市内にて
記録:藤原 達生 創立70周年記念誌編集部会員(図書館担当)

50年記念誌に寄せた回想記で、「どうしても本土に出たい、中央の風を肌で感じたいという夢を捨てきれず、一年近くかけて父母を説得」したと語られている(「第二のふるさと谷村の青春」)。そうして、食いはぐれないように教員免許を取ることを条件に、御父上が進学先として調べて来られたのが都留短期大学だった。

沖縄返還前の当時、本土に渡航するにはパスポートが必要だった。金城さんもパスポートを携えて船に乗り、身分証として「何かがあるときにはそれを提出する」という旅路には「違和感」を覚えたと言った。沖縄からはまず船で一昼夜かけて鹿児島に渡る。新幹線はまだなく、鹿児島から東京までは十数時間かけて移動した。その後でさらに東京から山梨へ、という長い道のりだった。

都留にたどり着き、下宿はその日のうちに決まっ

た。当時は学内の厚生課で下宿を紹介しており、学生の多くは個人宅に下宿していた(【参考】図1)。金城さんも、最初は70歳を過ぎた一人暮らしのおばあさんのお宅に下宿することになった。当時の都留では養蚕を行う家が多く、金城さんが下宿した家にも繭を生糸にする機械があった。その機械が糸を紡ぐ音を子守歌がわりに聞きながら眠りについた。

入学時、初等教育科の沖縄県出身の学生は金城さんと女子学生が3人。本土から沖縄を訪れる人もまだ少なかったであろう当時、金城さんには周囲から「日常会話も英語で喋ってんのかと、言われたんです」という記憶が残る。「だからそういう人には、僕は日本語だったらアンタより上手いよって言い返した」。負けん気とユーモアのある青年時代の横顔のぞく。あるときは近隣大学の空手部の学生が、金城さんが沖縄出身と聞いて試合を申し込んできた。空手は経験がないと断ったそうだが、その頃本土で抱かれていた沖縄へのイメージも垣間見える。一方で、金城さんは都留短大の学生たちには「おとなしい人が多かった」といい、沖縄出身ということでの「差別とかなんか」を「全然感じなかったというのは、そういうせいかもしれないね」と振り返られた。

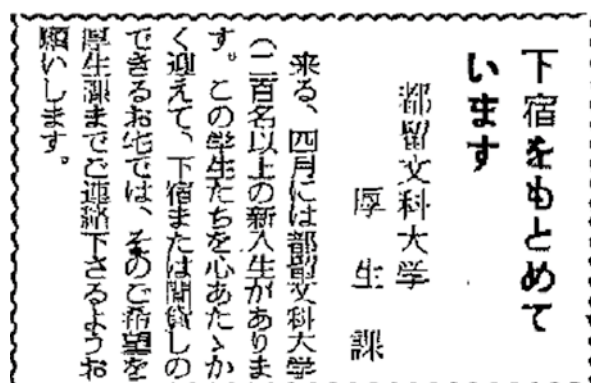
当時の都留短大の校舎は、前身の山梨県立臨時教員養成所の建物が利用され、谷村町駅の近くにあった。学生生活で思い出されるのは、この線路沿いの校舎で教員免許を取るために文字通り“日夜”励んだピアノの練習だという。当時の学生数に対してピアノは2、3台しかなく、「それをみんなスケジュールを組んで順番を待って。で、夜中の2時3時から出かけて行って練習するんだって」。金城さんの耳には、ピアノの音色とともに「すぐ近くをガッチャンゴットン電車が通って行く」音が残っている。

授業が終わると、下宿代や帰省費用などを稼ぐためアルバイトに勤しんだ。金城さんは、現在の都留市駅近くにあった「ボヌール」という喫茶店でバーテンダー見習いをしていた。太宰治の大変なファンだったというマスターにお酒の調合を教わり、「小

説らしい小説」も彼に勧められて初めて読んだ。その辺りは、学生や地元の人が利用する店で賑わっていた。都留短大の周辺地域には「学生相手の個人営業(の店)が多かった」そうだ。朝食をとるにも、「下宿屋を一步出たら、もう店がたくさんあるからね」、「菓子パンだとか牛乳を買って、飲んだりするんだよ」。昼と夜は短大や下宿に近い食堂で空腹を満たした。学生たちが一日を通して賑やかに行き来する街の活気が目に浮かぶ。

長い休みには、アルバイトで貯めたお金で都留から日本各地へ旅行に出かけた。当時は学生証を出して、「いわゆる安あがり旅行」ができたそうだ。「今でも思い出すけど、鈍行列車でね、青森から都留まで37円で帰ってきたことある。なんていうかな、鈍行の列車に乗って、それで夜を明かすわけ。翌朝着いてみたら別のところだっていうのね」。旅のなかでは学生だと言うと「大目に見てくれた」のだという。「朝早く、おばあちゃんたちが頭からでかい樽みたいなカゴに品物入れてどこかの街に売りに行くわけさ。で、朝早く出てきてるもんだからおにぎりを食べてる。それをこう、分けてもらったりとかね」。

都留の近くでは、冬の凍った山中湖でスケートを楽しんだり、学生たちで「三つ峠に一年に一遍くらいハイキング」に行ったりもした。「下宿屋で弁当作ってもらった人が野猿に弁当を盗まれたとかね。そういうの、沖縄で考えられることではないことだよね」。



【参考】図1 『広報つる』(1960年2月)下宿先募集の記事



“沖縄では考えられない”思い出深い体験はもう一つある。初めて都留で過ごした冬の寒さは今でも覚えているという。「初めて雪に降られた時にね、雨靴履いて夜通しあの谷村の街を歩いた覚えがある」。初めて見る雪の嬉しさに、誰もいない夜の街を寒さもかまわず一人歩き続けた青年の心の高揚が想像される。

こうした都留での日々のなか、一年生の夏休みにある出来事が訪れた。多くの学生が帰省するなか、都留に残った金城さんは、友人の両親が営む葡萄園で収穫の手伝いをするようになった。葡萄園では、果実を食べに来る雀や鳩を寄せつけないようボリュームをいっぱい上げたラジオが流れていた。葡萄をもいでいると、山梨放送の放送劇団募集の告知が耳に留まった。高校では放送部の部長を務めていた金城さんは、友人に「あんたそれ興味があるんだったら受けてみんか」と言われ、「じゃあ、受けてみようか」と応募することにした。すると、約100人の応募者から6人ほどのなか選ばれた。このとき出演したのが、武田信玄の息子・武田勝頼の生涯を描いた「勝頼と真葛」という放送劇である。金城さんが演じたのは、勝頼が織田信長に攻められた時、武田家の旗印を持って大菩薩峠に逃げのびた人物という役どころだった。放送劇の出演料は学生のアルバイトよりも割がよく、「良い商売だな」と感じた。それをきっかけに「放送関係にもっと携わっていきたいな」という目標を抱くようになる。

その後、金城さんは谷村町の小学校での教育実習

を経て教員免許を取得し、都留短大を卒業された。さらに、今度はアナウンサー採用試験の受験資格を得るため、四年制の東洋大学経済学部へ編入した。東洋大の卒業後、沖縄ではすぐにはアナウンサーの採用がなく、まずは小学校教員として勤めることになった。都留短大の他の沖縄出身の学生たちも、多くが地元に戻って教員になっていた。当時、沖縄の小学校教員に男性は少なく、金城さんには5、6校から声がかかったという。金城さんは兼城小学校で一年間教員として勤めた後、ラジオ沖縄に入社し、アナウンサーとして歩み始めた。ラジオ沖縄では、人気番組となった「シャープと共に」、「歌の巡行船」で番組の司会進行をするディスクジョッキーや、「民謡のど自慢」の司会などを務められた。

金城さんのラジオ番組には、電話や葉書で日本各地にまつわるメッセージが寄せられた。ここで学生時代の経験が役に立ったという。「よく旅行してたの、あれがね、ディスクジョッキーなんかで、ちゃんと、青森の話でいうと青森でこういうのがある、というね、山梨でこういうのがあるというの、それをちゃんと列記して喋れるから。自分で見てきて経験してるから」。学生時代を都留で過ごし、アルバイトでお金を貯めて各地へ旅行をした経験があったからこそ、全国の話題について聴取者に自身の言葉で語りかけることができた。今回インタビューを担当した学生のご家族も、ラジオで金城さんの番組を聴いていたそうだ。そのように長年沖縄の人々の生活とともにあった金城さんのラジオ番組には、彼が都留で過ごした時間も織り込まれていたのだ。

金城さんは、都留短期大学を「親父から言われて免許を取るため」というきっかけではあったが「転職機を迎えた」場所だったと振り返られた。後年は「恩返し」として同窓会の沖縄県支部長も務められている。

最後に、今を生きる本学の学生たちに向けて、金城さんは次のように語られた。「いわゆるアルバイトであれ、それから自分の与えられた仕事であれ、

とにかく全力投球をして、そして自分の進むべき道を見極める、ということが必要と思う」。そして、「何か目標を持って人間取り組めば、道が開けて来るよっていうことをね、言いたいですよね」と話された。ただし、「口では言いやすいけどね。なかなか努力をするのができない」とも言い添え、「好きこそものの上手なれ」というが、それもまた「努力」を伴うものだと言われた。自身が「何を見ても、何を経験しても」ディスクジョッキーとしてどう活かせるかを頭の中で常に考え続けたように、「努力をして初めて上手になってくる」のだと。

金城さんの歩みは、本学で学ぶ学生たちに向けて、自ら求め続ければ、都留からそれぞれの望む未来へと道が開かれる可能性を語りかけ、力づけてくださるものであった。そして、70年の間に本学を巣立っていった多くの学生たちが、今このときも、自らの力を活かし、それぞれの居場所で歩み続けていることを私たちに示してくださった。

インタビュー感想

東江 孝太

金城さんの挑戦に満ちた歩みに触れることで、大学の長い歴史とその重みを改めて実感しました。同時に、私たちがこれからどのように未来を切り開いていくべきかについて、多くの示唆と勇気をいただくことができました。

平良 菜都

今回、貴重なお話を直接伺うことができるとてもよかったです。インタビューの中で金城さんのこれまでの歩みや挑戦する姿勢がとても心に強く残っています。大学時代の学びがその後の人生に大きな力となったことを伺い、私もこの都留文科大学でしか得られない経験や学びを大切に、人生の大きな分岐点になるよう日々努力していきたいと思いました。

参考文献：金城宏安「第二のふるさと谷村の青春」『都留文科大学創立五十年記念誌』2004年2月、274-275頁





卒業生が語る、学びと青春の記録

Interview インタビュー

あわ の か ゆ り
淡野 香百合さん

はま かけ りょう きち
濱欠 亮吉さん

インタビューに応じていただいたお二人は、大学初期の卒業生で、都留文科大学同窓会を長きにわたり支えてこられた。11月6日(木)、ともに来学していただき、学生生活の思い出やかつての大学の姿について、たいへん興味深く示唆に富むお話をうかがうことができた。

淡野香百合さんは、都留の出身で、都留市立短期大学に地元の仲間とともに、推薦により入学された。2年後に4年制の都留文科大学初等教育学科に編入し、さらに2年間学ばれた後、同学科を卒業。卒業後は、家業のお店を継がれた。一方、濱欠亮吉さんは青森県の出身。通っていた高校の校長先生の推薦

■ 話し手

淡野 香百合さん(1965年 初等教育学科卒業)
濱欠 亮吉さん(1965年 国文学科卒業)

■ 聞き手

佐藤 明浩
創立70周年記念誌編集部部长(学生・教育担当副学長)
志村 高男
創立70周年記念誌編集部部长(教務課長補佐)

2025年11月6日(木)10時～12時

記録:藤原 達生 創立70周年記念誌編集部部长(図書館担当)

で都留文科大学国文学科に入学された。推薦状のみで、入学試験はなかったという。国語が好きで、国文学科への推薦となった。当時、学生の半分ほどは、推薦による入学であったという。お二人が在学中の1963年に英文学科が設立されると、そちらへ転入する学生もいた。卒業後は地元に戻って教員になる同窓生が多いなか、濱欠さんは、卒業後も山梨県に残り、友人たちの勧めもあって自動車販売会社に就職。当時、セールスマンとして、大学卒業者は唯一であり、会社は濱欠さんのために独身寮を設けた。それだけ会社にとって貴重な戦力であったらしい。その後、不動産業に転職、宅建資格を取得された。

現在も富士北麓地域で活躍を続けている。

大学には、北海道から九州、沖縄まで、全国各地から学生たちが集まってきた。北海道出身のある学生は、地図を見て東京から近いと思っていたが、実際来てみると、都会との違いに驚いた。鹿児島から来たある同窓生は、はじめ「都留」を「みやこどめ」と読んでいた。当時の学生は、女性が3分の1くらい、あとの3分の2は男性であったという。濱欠さんによれば、地方からやってきた学生は、大学の紹介で住まいの下宿やアパートが決まったといい、共同生活が多かった。濱欠さんの下宿は、四畳半1部屋、2食付きで、家賃は月4,000円程であった。富士山七合目の山小屋でアルバイトをされ、ほかに病院でレントゲン撮影の助手もされたという。学生のアルバイトとしては家庭教師が多く、また、現在地に1号館を建設する前の準備作業もあったという。一方、文化部による中学校訪問などもあり、学生の活動は多彩であった。娯楽は、映画とパチンコが主なもの。映画館は2軒あった。都留市宝地区出身の俳優、品川隆二さんが出演された映画も長期間上映されていた。なお、濱欠さんは演劇部に所属していて、劇場を借り切って有料上演をしたこともあったという。

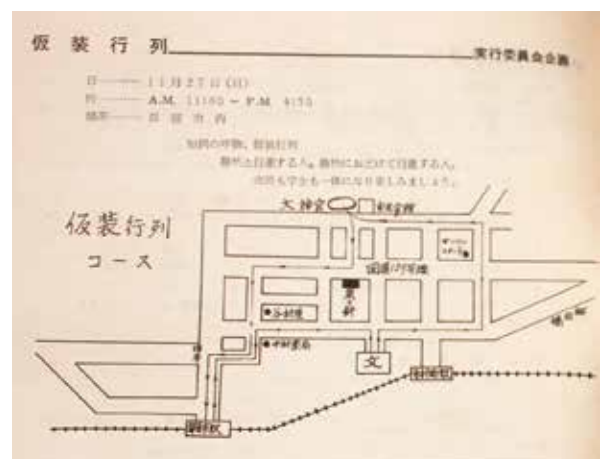
大学の周りには飲食店が多く、たくさんのお客で賑わっていた。淡野さんのお実家、魚藤にも、濱欠さんも含め、学生たちが訪れていた。街も会場となった大学祭の様子も印象に残っているという。名物となった仮装行列、県人会による郷土芸能の披露があり、また、マラソンも行われて、街と学生たちが一体となり、賑わっていた。仮装した行列が高尾町を練り歩き、夜にはダンス・パーティーが開かれるなど、学生たちの熱気が街にあふれ、地域の方々も観客として加わっていた。

当時の校舎は、現在の都留市役所にあり、建物は少なかった。淡野さんたち初等教育学科の学生は、夜、ピアノ練習用の教室に自分たちで電球を持参して練習に励んだという。住まいも、たとえば織織りが行われなくなり、織機を撤去して空いたスペース

を間仕切りして下宿に転用するなどして用意された。公私にわたり創意工夫に満ちた日々であった。

授業の様子も、現在とは随分異なっていた。体育の授業では、中学校のグラウンドづくりのために石拾いをすることもあり、授業が終わると、「ご苦労様」と飴玉を一つもらうこともあった。一方、三つ峠までの登山が授業の一環であり、全員出席し、楽しかったという。また、国文学科の英語の授業で『白鯨』やシャーロック・ホームズ・シリーズの原書が教材であったのがおもしろく、印象に残っているという。初等教育学科では、音楽や家庭科など、小学校教員免許を取得するために必要な科目は多様で、学生たちは限られた施設、設備のなかで懸命に学んでいた。当時、ピアノの課題として「バイエルの66番と53番が弾ければ単位が取れる」といった話もあり、淡野さんも苦労しながらも工夫して乗り越えたという。

学生時代の先生の思い出も聞かれた。学長の諸橋轍次先生は小柄な方で、入学式や卒業式でお話しされていたことをよく覚えているという。小田和金貞先生は、当時のパンカな服装などに厳しく、怖いという印象だが、強力なリーダーシップを発揮された。教授会、学生たちの反発もあったが、全国から学生を集め、今に続く大学をつくっていった立役者でもあると考えているという。



第11回桂川祭パンフレットより 仮装行列のコース

卒業論文は手書きで、濱欠さんは400字詰め原稿用紙200枚分の文章を万年筆で書き上げた。国立国会図書館に通って資料を集めるなど、学生たちは真摯に学問に向き合っていた。淡野さんは、地元ならではの、富士山の御師をテーマに卒業研究をされた。濱欠さんは、淡野さんとは学生時代からの知り合いであったが、卒業研究のテーマは、今回のインタビューではじめて知ったという。卒業後は教員になる同窓生が多かったが、濱欠さんのように民間企業で活躍する卒業生も増え、進路先の幅は広がっていった。また、他県の出身だけれども卒業後も都留に住み、活躍を続けている方々もいる。

淡野さんは、同窓会の設立初期から事務(監事)を担当され、さまざまな書類を作成されていたという。濱欠さんも同窓会の役職を務められ(現在事務局次長)、今に至るまで支えてこられた。同窓会は、全国規模のネットワークへと発展していく。同窓生ど

うしのつながりは大学の成長とともにいよいよ強くなり、また、「第二のふるさと」として都留を訪れる卒業生も多い。同窓会については、全国各地から卒業生が集う場となっている。

「当時は偏差値と関係なく、推薦で入学したが、今では誇りに思える大学となった」と語る濱欠さん。ずっと地元を見てこられた淡野さんも「人口3万ほどの市に大学があることの価値は大きい。はじめは協力的でない地域の方もおられたが、今では『大学があつてよかった』という人が多い」と話す。

本学は、教員養成を原点としながら着実に実績を積み、時代とともに学科、学部を拡充し、多様な分野で活躍する卒業生を輩出し、また地域を支える大学として成長してきた。卒業生たちの思い出をうかがって、その歩みの確かさを実感するとともに、「色とりどりのミライへ。」の希望を新たにすることができた。



私が入学した頃

1984年国文学科卒業・本学名誉教授・創立70周年記念誌編集部会員

寺門日出男



■都留との出会い

私が都留を初めて訪れたのは、昭和55年3月下旬。国文学科への入学を決め、まずはアパートを探すためでした。無論、当時はオープンキャンパスもホームページもありません。東北出身の人間にとって、そもそも山梨県が何の縁もない土地(東北人にとってフルーツ王国といえば福島県)でした。取り寄せた出願書類(有料)に同封された薄っぺらいパンフレット以外に情報はなく、地方会場の入試を受験していたため、都留がどんなところなのか、全く知りませんでした。まあ公立大学なんだから、大丈夫だろうぐらいに軽く考えていました。

■大学までの交通

富士急行線内には現在、朝夕の時間帯に中央線快速のオレンジ色の電車が乗り入れています。当時はそんなものはありません。朝夕の直通電車数本がある以外は、大月で乗り換えていました。ただ、日中の中央本線の普通列車は、多くが新宿発でした。新宿を出ると最初の停車駅が立川(!)、次の停車駅が八王子、その次が高尾で、わざわざ特急・急行に乗らなくても、高尾までは快適に移動できました。

大月駅で富士急に乗り換えて、まずは衝撃を受けました。座席の外枠、肘掛け、床、日除けのブラインドまで、全てが木製。私の郷里の秋田でも古い車両は走っていましたが、さすがに木製はとうの昔に姿を消していました。木製車両に乗ったのはこの時だけでしたが、他の車両も(多分)国鉄のお古の払い下げで、古びた列車ばかりでした。乗客も少なく、外国人観光客であふれかえっている現在とは全く別

風景でした。地元の人には車が主な移動手段で、通学の中高生を除くと、あまり電車には乗らなかったのだと思います。

最寄りの駅は谷村町。駅舎自体は今とあまり変わりはありませんが、待合室正面の広告を見て、びっくりしたことを覚えています。その広告看板は電気屋さんのもので、何と百ワットの電球が大きく描かれたものでした。前年にウォークマンが発売されていた頃です。さすがに目玉商品が白熱電球だったはずはなく、相当前に設置された広告がそのままになっていたんだと思います。今はこの看板はありませんが、私が平成4年に着任して以後も、しばらくの間は残っていました。

■街の様子

駅舎を出ると目の前は食堂・焼き鳥屋、右手にはスナック等の飲食店が並んでいるばかりで、寅さん映画にでも出てきそうな風景で、およそ大学のある市の中心部とは思えませんでした。アパートを探しに来た母子が、こんな所に娘を置いていくのかと、泣き崩れたこともあったと聞いています。ただ、当時は織物産業が盛んで、谷村町駅近辺のそこかしこで、織機のバタンバタンという音が聞こえていました。ミュージアム都留の敷地には、捺染工場がありました。今はすっかり寂れてしまいましたが、都留市駅から谷村第一小学校に至る通りには様々なお店があって、なかなか活気のある街でした。やがて中国から安価な絹製品が入り、着物が日常生活から離れたこともあって、今はすっかりなくなってしまうかもしれませんが。

一つ手前の都留市駅から、大学の授業時間に合わせて路線バスがありました。私は都留市駅近くに間借りしていましたが、雨の日にはバスを利用することもありませんでしたが、あまり乗客は乗っていませんでしたように記憶しています。

■アパート

当時、学生のアパート(下宿というべきか)は谷村町駅近辺に多く、次いで十日市場駅付近に集中していました。大学の山手方面はほとんどありませんでした。今は当たり前のワンルームタイプはほとんどなく、専用のキッチンがついている部屋さえ少数でした。一般的なタイプは、台所・風呂・トイレが共同、玄関近くにピンク電話があって、電話番・風呂掃除は当番制。どこのアパートも大抵は壁・床の防音性はあまり良くなく、所によっては隣室および廊下を隔てた向かい側の住人と、自室にしながら会話が出来る、悪く言えばプライバシーのない、善く言えば(学校で友達が出来なくても)孤立することのない環境だったと言えます。同じ敷地内に大家さんの家があり、漬物を頂いたり、逆に田舎の土産を差し上げたりするなど、親しい付き合いがありました。

ただ、私が3年生になるぐらいの頃から、大学近くの斜面が開発され、ワンルームマンションが次々と建てられていきました。大家さんは都留市外のケースが多く、大家さんとの繋がりがなくなったのは残念なことです。結果、引きこもりや心を病む学生が増えてしまったように思います。

■大学の建物

入学時、まともな建物といえるのは、1号館と旧図書館(現4号館)、少し離れた所に美術研究棟(後に増築されて現在に至る)、あとは体育館があるぐらいでした。翌年に本部棟が出来るのですが、入学当初はまだ建築中。先生方の研究室は1号館2階にあって、三人一部屋。二つの部屋の間にのぞき窓みたいなものがあるところに電話が置いてあります。

つまり、電話は6人にひとつだけでした。

音楽棟、柔道場、いずれも創立時の旧校舎の建物を移築した古色蒼然とした木造建築でした。教室が不足していたため、音楽棟2階でも授業がありましたが、授業終了後は一斉に教室を出ないように、注意がありました。倒壊の恐れがある(!)からだそうです。冗談みたいですが、本当のことです。生協にいたっては建物すら無く、1号館前に停められたマイクロバスが店舗でした。

学生食堂は、現在の学生ホールのあたりにありました。1号館建設時に作業員の食堂として作られた木造平屋建ての再利用で、床は土(!)がむき出しでした。頭上には洗濯ロープがはられ、雨の日には洗濯した布巾が干されていました。

本部棟建築の際に使っていたプレハブ2階建ての工事事務所が、1号館西北側にありました。これも工事終了後に解体せず、学生自治会室として再利用していました。

この頃から財政的にも余裕が出来て、自然科学棟、音楽研究棟、2号館と、続々と施設が充実していくこととなります。現在の充実ぶりから見ると、まるで嘘のような世界でした。

■市民と大学

市民の方々の支援が大学を支えてきたことも、特筆すべきことだと思います。私の知っている事例を、いくつか紹介しておきます。

1号館と本部棟との間、1号館とグラウンドとの間にある植栽の多くは、1号館が竣工した後、市の広報の呼びかけに応じて、市民から寄贈されたものです。

長年、学食の運営にあたって頂いた都留市未亡人会の存在も、本当に有り難いことでした。学食は旧校舎の頃に既にありましたが、何分大学は休みが多過ぎる(夏・冬・春休み合計5ヶ月)ということがあって、一般の業者は早々と撤退してしまいました。未亡人会が何時から運営にあたったのかは確認してい

ませんが、私の学生時代の頃はもとより、私が赴任した平成4年以降も、しばらくは続いていました。個人的には、あの甘辛だれの天井を、あの野菜たっぷりの味噌ラーメンを、もう一度食べてみたいものです。

今はなくなってしまいましたが、高尾町商店街にあった山本書店は、岩波文庫・新書を扱ってくれる、有り難い本屋さんでした。岩波の本は買い切り制で返品が出来ないため、大学生協にもありませんでしたし、他の書店でも敬遠されていました。もちろん、ネットを通じての注文などない時代です。同書店がなければ、都内または甲府にまで出かけなければいけませんでした。もちろん、固い本ばかりでは書店経営は成り立ちません。エッチな本も置いているのですが、学生がその手の本を見ていると、店主が叱ってくれたそうです。

腹を減らした運動部の学生のためにサービスしてくれる食堂もいくつかありました。例えば、経済飯店という店は、中華丼の上に目玉焼きを載せた「経済ランチ」350円が人気メニューでしたが、50円の割増し料金で、バケツで盛ったといっても過言ではない量で、赤字覚悟の出血サービスだったろうと思います。

■おわりに

今でこそ、公立大学は全国で100校もある時代ですが、都留文科大学創立時、公立大学を有するのは、高崎市を除けば東京都、横浜市、名古屋市、大阪府等、政令指定都市および大規模な都府県に限られていました。高崎市にしても群馬県下最大の市で、人口3万の市が大学を持つことなど、考えられないことでした。

およそ十分とは言えない設備で、学生も教員も頑張っていましたが、市民の協力なくして大学の今はなかったでしょう。

思い出いろいろ



1967年英文学科卒業
元高校教員 早川 泰男

都留文科大学創立70周年記念にあたり心よりお祝い申し上げます。

私は1945年3月13日生まれ(女優吉永小百合さんと同生年月日)で62年前に都留文英文学科に入学しました。入学前は近代的学園都市と思っていました。都留市に入ると故郷の田舎と少し似かよった佇まいで馴染みやすい感じでした。日本一の富士山と富士五湖や三つ峠、大菩薩峠など素晴らしい景観と共に過ごした4年間となりました。

都留での思い出は尽きせぬくらいあり、手前味噌ですが思い起こすままに述べてさせていただきます。入学後すぐ近くの城山に登りクラス顔合わせ歓迎会があり、山頂から谷村町全貌が見渡せた時の情景が鮮やかに脳裏に刻まれています。大学から見える富士山はトイレの窓越しからで講義の疲れを癒してくれました。是非登頂するぞとの思いを馳せました。

顧みれば教員になり、学生時代の様々な経験がところどころで生かされたと思います。

私は38年間で福井県内の県立高校5校に勤務し、普通科だけではなく職業科などで英語を教え、ALTの世話もして、中学校講師2年歴任で幅広く生徒に接することができました。

例えば小浜水産高校クラス担任では航海実習があり太平洋三崎港から函館港経由、日本海回り佐渡から若狭湾小浜港に帰港。生徒とともに貴重な船上体験ができ、他校では得られない感動を得ました。運動部部活もラグビー、サッカー、野球、ソフトボールなどの顧問歴任、なかでも若狭東高校ラグビー部長での全国大会花園3回出場は印象的です。

都留大での活動が今でも活力源となっています。

大学に入ったからには何でもやろう! の精神でいろんなサークルや部活動に所属。1年次には先ず体力作りで陸上部に入り、谷村からトンネル越えのグラウンドまで毎日走っていました。体育授業はグラウンドの石拾いから始まりました。大学祭では各科クラス対抗駅伝に参加し英文学科は2年連続優勝でした。二年次からソフトボール部に加入し市民大会、県大会をはじめ山梨大や高崎経済大との交流試合に出場。今では関東大学リーグに加盟して後輩部員が活躍。卒業後ソフト部OB会仲間横浜や大阪での同窓会に出席して旧交を温めました。健康維持のため76歳まで卓球もしました。現在はグラウンドゴルフとゲートボールに興じています。思いがけなく2018年の福井国体グラウンドゴルフで優勝できたのは幸運でした。運動ばかりの話でよく皆に体育の専門かと言われました。実は大学時に文科系のESS部とユースホステル部に入部、合宿やキャンプの楽しい思い出もあります。ESS部では桂川祭での英語劇、避暑地での合宿。Y.H部では西湖や日光のユースホステル合宿。また地元富士吉田ハイランドホテルでの関東ユースラリーに我が大学も参加し、開会式で代表歓迎挨拶を任せられました。各地の由緒ある名所を訪れて記念になっています。

御多分にもれずアルバイトもしました。夏休み中に学生課幹旋でゴルフのキャディーを富士山の麓、河口湖と山中湖で真っ黒に日焼けしながら体験。印象に残っているのは初のミス日本一の女優、山本富士子さんがゴルフ場に訪れ付き添いで回ったことです。バイトで購入したばかりのカメラで撮った最初の写真が彼女となりました。写真店のウィンドウに

飾られ評判になりました。おかげで学生生活の写真も増え、今では良き回想資料になっています。夢に描いていた富士山には大学1年次に友人と登頂し、山梨に住んだ証し、貴重なみやげ話となりました。

もう一つのバイトは横町のクリーニング店です。おかみさんが傑作な方で、時たま夕食時に大衆酒場に連れて行ってくれました。一家団欒家庭の味を知りました。数年前に都留訪問時にお会いしました。下宿先での家族も親切でおばあちゃんとは友達で、おやつ時に再々呼ばれ、お茶と沢庵が常でした。またよく仲間が寄りはしゃいだ八百屋の老婦人も懐かしいです。

桂川祭の思い出も満載。全国各地の訛りも飛び交い郷土色豊かな仮装行列、4年連続出場の紅白歌合戦など楽しいメモリーです。今、その名残か、月2のカラオケを満喫しています。

福井県人都留大同窓会の名前も懐かしいお城山から「城山会」となっています。

現在は益々素晴らしい景観のキャンパスと人間教育で誇りの母校です。幸いにも私達4年次に第1号館の姿に触れることができました。今やどんどん増設され目を見張るばかりです。県人会で訪問の際は発展途上の立派な各棟に圧倒されました。長々と失礼いたしました。

最後に益々のご発展を祈るばかりです。

令和7年5月23日記

📍 思い出の場所 ● 文章内に記載



完成の1号館で

書と刻字に明け暮れた 青衿時代

入学に当り、国語の教師になって筆を持つ仕事がしたいと、迷わず書道部に入りました。そこでの出会いが、三十代後半の講師渡辺寒鷗先生でした。幸い先生はお若く、その世界では、まだ時間的余裕があられたのか、毎週金曜日に教室に来て下さって、私達学生相手に丁寧なご指導と、書道の楽しさを伝授して頂きました。春と夏の合宿練成会では、夕食時にお酒を呑みながら、大いに語り、歌い、盛り上がったのを思い出します。

部員は、この合宿のために多くはアルバイトをして参加費を捻出していましたが、私も夏休みには、河口湖の富士ビューホテルのレストランで働いて蓄えをするのが、毎年の恒例になっていました。

従業員用の寮での住み込みでした。湖畔にあって、エアコンは無くても涼しい風が窓から常に入って来るという好条件の環境でした。書道の道具を持参して、空き時間は“古典の臨書”という書学習に没頭することが出来、一週間ごとに下吉田の先生のお

1973年国文学科卒業
書家 安藤 重光
(雅号 豊邨)



部活動風景(左後頭部が筆者、左真ん中男性が渡辺先生)



宅へお邪魔して添削指導を受けていました。この時に培った書技が現在の私の書家としての技術の根幹を成しております。

ある時、一階玄関に入ると二階から槌音が響いて来ましたので、てっきり大工さんでも入っているのかなと、一步一步階段を登って行くと、何とそこには先生自らが槌を振って板に文字らしきものを刻しておられたのです。思わず「先生、何をされてるのですか。」と問うと「毎日書道展に出す作品を作っているのだよ。君もやってみないか。」とのご返事でした。

私が刻字というものを初めて知ったのがこの時でした。木工は好きな方でしたので、早速、材木屋さんを尋ねて、一メートル程の板を購入し、先生にお手本を揮毫して頂いて刻し上げました。これが私の刻字処女作です。その翌年先生のお薦めもあり、毎日書道展に出品し、初入選となりました。以後、五十年余り刻字作品を制作し、後進の指導もし続けております。

四年生の時、私にとって学生時代での一大出来事といえる山梨県芸術祭への出品がありました。三年生時に初めて出品し、翌年は山梨で暮らす最後になるから、記念すべき最良の作にしたいと、早くから計画し構想を粘り上げました。二二七cm×五三cmの紙は、四畳半ではあまりに狭く、荷造りの紐を壁と壁にひっぱり、そこに書いた紙を引っ掛けて、少しずつずらしながら慎重に揮毫して仕上げた事を思い出します。

出品後、愛知へ帰省して教育実習に励んでいたある日、帰宅すると山梨から電話があり、県芸術祭で一席の芸術祭賞の受賞という吉報でした。このような賞は、過去に頂いた事がなく、渡辺寒鴉先生にご報告すると、実は先生も以前に受賞されたとの由。先生が頂いた賞と同じものを私に頂けた事も重なり大変嬉しい思いでした。

山梨にもどると、甲府NHKと山梨放送のテレビ番組に出演依頼があり、これも人生初めての経験となりました。

初代学長諸橋轍次先生に憧れて入学し、前述のような体験ができた事は、以後の私の人生に多大な影響を及ぼしたのはまちがいありません。卒業後、教員生活に入り、初任給である名著「大漢和辞典」入手に到りました。

今から数年前、諸橋先生の故郷である新潟三条を訪れる機会に恵まれ、一首詠ませて頂き、刻字作品を制作し、現在、都留文科大学長室に陳べられています。同時に、この創立七十周年を機に刻字大作「無休学芸」を寄贈致しましたところ、図書館に置いて頂いております。



山梨県芸術祭賞作品 県庁収蔵となる

学生時、折角書道を志すのだから、「書道人生に爪跡を残したい。」との思いから、今迄、小・中・高校とそれぞれの母校に刻字作品を収蔵させて頂いて参りましたが、この度の都留文科大学で全て完了となりました。ありがとうございました。

最後に、私の創立七十周年への憶いを拙詩に託します。

憶都留文科大学創立七十周年

對峙芙蓉七十年。	対峙す 芙蓉 七十年
求真尋古學徒聯。	求真 尋古 学徒の連
菁莪育士藝林舎。	菁莪 育士 芸林の舎
遙憶止軒明德僊。	遙憶す 止軒 明德の仙

菁莪…人材を教育することを楽しむこと(詩経小雅)。大学の建学精神
止軒…初代学長諸橋轍次博士の号



NHK 甲府 収録(右から2人目が筆者)

📍 思い出の場所 ● 文章内に記載

二十歳が田原の穴蔵で



1989年国文学科卒業
自由業 西 桂子

まずは70周年を心からお祝い致します。おめでとうございます。

大学の4年間で何かあったかなと思い出してみたら、若者らしいエピソードが見つかった。

3年生の頃だったと思う。

かなりひどい風邪をひき、大月の病院を受診、自転車で帰宅したところ、40度近い高熱が出た。

何もできずに下宿の布団に入って寝たら2日経っていた。

びっくりした。

まだ熱が高かったので、本を読んでまた寝入った。

起きたら翌日の夕方だった。

この辺からちょっと面白くなっていたと思う。

「人はどれくらい寝られるのか」

と思ってしまった。本を読んで、また寝入った。

翌日の夜に目が覚めた。

小さな窓からは大学の校舎が見えるわけだが、授業にも出ず、本を読んで(荒俣宏『帝都物語』)(面白くて続きが気になったため)また寝入った。

誰か異状に気づいて部屋を訪ねては来なかったのか、と思うだろうが、私には友達がいなかった。いわんや彼氏をや。(国文学科をちょっと發揮)それをいいことにこの二十歳はまだ寝てみるのだった。

5日目、快調に寝続けた。

6日目、ちょっと飽きてきた。

空腹だったが、食べなくても寝続けることができた。若いとはこういうことであろう。本もほぼ読み終えた。

そして7日目、薄いドアをノックされてうたた寝から目覚めた。

「かつらこ(当時の私の渾名)、かつらこ、開けて」隣の部屋の、初等教育学科の女の子が外から呼んでいた。

しかし、私は体を寝床から起こすことができなかった。そして、初教の女の子が、大家から借りた鍵で私の部屋に踏み込んだ。

そこから後のことをあまりよく覚えていないのだが、呆れ顔の医師から「栄養失調ですね。何をしていたの」と聞かれたのは覚えている。ちなみに運ばれたのは、その1週間前に風邪で受診した大月の病院だった。

そうか、1週間食べないと人は栄養失調になるのだ、と、この時身を以て知った。

誰訪うこともない、穴蔵のような部屋でひとり、徒に飲まず食わず。

周囲の方々には大変な迷惑をかけた。今で言うなら相当ヤバイ奴であろう。友達もいないわけである。いわんや彼氏をや。(發揮)

そんな自堕落を許され、心ゆくまで時を浪費し、その浪費の中で徹底的に自分と向き合っていた4年間。その日々が間違いなく現在の私の基礎工事部分となっている。

その後、私は似たような暮らしをする職業に就いた。

現在私は漫画家である。

思い出の場所

●友人知人の下宿。当時、有線を引いていないといろんなテレビが見られなかったので、有線有りの下宿に住む人の部屋に、食べ物を持って見せてもらいに行っていた。そこでレコードを借りた。本を借りた。話をした。



卒業アルバムのイラストマップ

大切な街 都留

～変わるもの・変わらないもの～

1990年初等教育学科卒業

都留市立谷村第二小学校 校長 奥脇(旧姓 宗實) 美穂



私は生まれも育ちも兵庫県の片田舎なのですが、都留文科大学とはご縁がありました。というのは、まず、実家の向かいに住んでいる方が文大を卒業されているのです。さらに、小学校6年生の担任が文大出身でした。授業の合間に大学時代の思い出をお話してくださっていて、興味深く聞いていました。

昔から「小学校の先生になりたい」という夢を持っていた私は、大学受験の時に、担任の先生から都留文科大学を勧められ大阪会場で受験をしました。合格通知をもらった時は、大学の案内を見て、まだ行ったことのない都留の街での生活を思い描いていました。

下宿は、セピアフジという建ったばかりのワンルームのアパートでした。初めての一人暮らしにワクワクする反面、不安や寂しさを感じることもありました。でも、同じ下宿の住人は同じ学年の人ばかりですぐに仲良くなりました。部屋を行き来して、一緒にご飯を食べたりテレビを見たり。長期休業の後には、それぞれの地元の名産品を囲んでおしゃべりをしました。楽しい学生生活でした。

部活は氷上部でした。入学前にパンフレットの部活動紹介で「氷上部ってフィギュアスケートなのかな？」とチェックしていたので、新入生勧誘オルグで部屋を訪ねてこられた時はうれしかったのですが…フィギュアではなくスピードスケートでした。少し迷いましたが、優しく楽しい先輩方や同じ下宿の友達も一緒だったので入部しました。夏は陸上でトレーニングを積み、冬になると富士急ハイランドのリンクで練習を行いました。開園する前の早朝に練習を行ったあと授業に出るという大変ハードな毎日でした。400メートルリンクを何周も滑るのは

とても辛かったのですが、不思議なもので慣れてくると腰の痛みがなくなり、長距離も滑れるようになっていました。試合では、1500mと3000mに出場していました。今考えると、よく頑張っていたなと自分のことながら感心してしまいます。スピードスケートを部活として経験ができたのも、都留文科大学であったからだと思うと、本当に貴重な時間を過ごすことができた4年間でした。

卒業後、山梨県で小学校教諭として働くことになりました。これまで谷村第一小学校を皮切りに都留市内5校、道志村1校、富士吉田市1校、上野原市1校の合計8校で仕事をし、現在、谷村第二小学校で校長をしています。都留市は、大学との連携も盛んで、SAT活動等で学生との接点も多く、卒業後も大学を身近に感じながら過ごしています。

最近では、同窓会の役員として大学に行く機会が増え、学食前の植え込みや1号棟から見えるグラウンドなどを見て、ふと、学生時代の楽しかった思い出がよみがえることもあります。大学に向かう坂道やオレンジロード、友達と一緒にいったボウリング場、八朔祭り、4年間住んだ下宿など当時と変わらない景色は、私の心を大学時代へタイムスリップさせてくれることがあります。

しかし、都留文科大学駅(富士急行)ができ、大きなスーパーや薬局等ができました。また、下宿も大きなマンションが増えています。変化しているのは街並みだけではなく、学部編成や講義を受けるための講義棟も変化しています。昔の合同庁舎は6号館(THMC)として改修されて、様々な人が集い学ぶ場として利用されています。また、私が学生生活の

ほとんどを過ごした1号棟は令和7年度に改修工事に入ります。寂しさもありますが、都留文科大学が魅力ある大学としてどんどん進化していく姿を間近でみられることはうれしくも思います。

これからも少しずつ景色が変わっていくのかもしれませんが、変わるもの・変わらないもの、どちらも大切に、楽しみながらここで生活をしていきたいと思っています。



思い出の場所

●3年生から社会科基礎論ゼミ(後藤道夫教授)に入り、毎週ゼミのあとに、「たぬき」という居酒屋さんでお酒を飲みながら語り合ったことがとても懐かしく思い出されます。今は、なくなってしまったお店ですが、後藤先生のお話をじっくり聞くことがとても楽しみでした。

都留文科大学70周年に寄せて

1992年社会学科卒業

浜田市世界こども美術館 学芸員 高野 訓子

大家さんと(右が筆者)



入学試験で出題された問題は今でも記憶している。そして合格通知を待つ高校生の自分の姿も鮮明に思い出すことができる。

島根県の田舎町に住んでいた私が都留文科大学を選んだのは37年前。“東京の近く、富士山の麓の公立大学”、というキーワードに魅かれた。高校3年生の卒業式の日、担任教諭から「浜田より田舎の町に行く人は恐らくいないだろう…」と送り出されたものの、都留市は浜田より小さな町だった。

都留での生活は、いろんな意味で距離が近かった。買い物をする場所、大学までの距離、アルバイトの場所、友人たちとの距離…。田舎町で育った私にとって、近い距離の中での生活は心地よいものだったと思う。月に一回、家賃を支払いに大家さんの家に行

くと、手作りカレーや中華の出前を取って歓迎してくれた。風邪を引いて熱が出たときにも差し入れをしてくれたり、かわいがってもらったことを思い出す。友人の家でご飯を一緒に食べたり、夜遅くまでおしゃべりに花を咲かせたり、泊まり歩いたり…。反対に近い距離から離れたくなる時は、東京に買い物やコンサートに出かけてリフレッシュしていた。

都留文科大学での4年間でなければ、今の私の生活はない。博物館学担当教授が、「学芸員の資格があると将来ギャラリーや美術館をつくれるよ。絶対面白いと思うなあ」と勧めてくれ、学芸員資格を取得した。この資格があったからこそ、現在の学芸員としての自分がある。

私は地元の島根県浜田市にある「浜田市世界こど

も美術館」で学芸員として勤務している。1996年の開館当時から現在まで、展覧会の企画や教育普及活動、海外との連携業務等に従事している。学芸員資格だけでなく、大学で取得した教員資格も学校との連携を進める上では大変役立っている。

またひょんなことから出会った美術教育の専門家(大学講師)の方は都留文科大学の卒業生(年齢は私よりずいぶん下)で、彼が勤務する大学にお招きいただき講演やワークショップを実施させていただくなど交流が広がっている。

そして一生の友となる友人たちとの出会いも忘れることはできない。全国に散らばっている友とはなかなか会うことは叶わないが、SNS等でつながり、近況報告をしあっている。この原稿を書くきっかけになったのも都留市役所に勤務する友の存在があったからだ。2024年2月には、何十年振りかの都留を訪問した。大学の周りの景色は随分変わっていたが、よく通った「バンカム」に山梨で教員をしている友

人と主人と一緒に訪問することができた。「バンカム」のドリアが大好きだった私は、家でも作っていることをマスターに伝え、懐かしい日々を追想した。

都留文科大学70周年の歴史には、卒業生の思い出と歴史が積み重なっているだろう。卒業生、在校生、教職員の皆さんには、それぞれ色とりどりの未来が待ち受けている。それぞれの力を未来の力につなげられるように皆さんの活躍を祈念している。私も負けないように微力ながら、美術教育の世界で力を尽くしていきたい。

📍 思い出の場所 ● 文章内に記載



ドリアとコーヒーゼリー

都留に息づく余白

2005年 初等教育学科卒業

明治座舞台株式会社 営業部 正代 俊明



“何もしない時間”というのは、だいたい何かしてる。

でも、都留では、ほんとうに何もしないことが、許されていた(のか?)。

図工専攻という名の自由の切符を手にした私は、2年から4年まで、ほぼ毎日、図工棟に通っていた。いや、通っていたというより、棲んでいた。図工棟は、

私にとってアトリエであり、秘密基地であり、時に避難所でもあった。

雨が降ろうが、風が吹こうが、雪が舞おうが——そこには、素地があり、道具があり、仲間がいて、酒があった。

3年からは彫塑ゼミに入り、卒業制作では木彫りの鶏をつくった。鶏である。

なぜ鶏なのかと問われれば、酉年だったし、鶏冠や肉髯が、なんだかかっこよかったから。

先輩の運転する車で買いに行った木材を貼り合わせて、プレスにかけ、W600mm×D900mm×H1200mmほどの塊にした木を、チェーンソーで荒く形を取り、のみで輪郭を探り、彫刻刀で細部を整える。

削っても削っても、思うようにはいかない。

だが、少しずつ形が見えてくる。見えてくると、楽しくなる。楽しくなると、また削る。

削るほどに、自分の中にも何かが見えてくるような気がしていた。気がしていたのだ。

そして時折、図工棟で飲み会が始まる。

先生が鍛金技法でつくった巨大な鍋で炊いたパエリアを囲み、お酒を持ち寄り、専攻の仲間たちと語り合う。

(今は棟内では飲み会などできないらしいが。)

部活は吹奏楽部で、楽器はトランペット。文化祭では友人とバンドを組み、最終的には吹奏楽部の仲間も巻き込んでステージに立った。ジャンルも編成もごちゃ混ぜ。

完成度よりも、「一緒に鳴らす」ことが楽しかった。音を通してつながる感じが、ただただ心地よかった。

そして時折、どこかで飲み会が始まる。

打ち上げ、歓迎会、送別会、花見。理由は何でもいい。集まって語り合う時間が、ただただ楽しかった。

笑いながら、自分の輪郭が少しずつ見えてきた気がする。見失うこともあった気もする。

今は、明治座舞台株式会社で大道具営業として働いている。

舞台セットの設計や製作に関わりながら、図工専攻で培った「かたちをつくる力」と「人と場をつなぐ感覚」が、日々の仕事に生きている。

都留で過ごした時間は、技術や知識だけでなく、「人と何かをつくる楽しさ」や「何もしないようで、何かがある時間の尊さ」を教えてくれた。

何もしていないようで、心の奥では、何か芽吹いていた。

そういう時間が、確かにあった。うん、確かに。

願わくば、100周年の記念誌にもまた、こんなふうに言葉を届けられたらいいと思う。

これからも、自分らしく、手を動かし、場を育てながら、日々を楽しんでいきたい。

70周年のこの節目に、久しぶりに都留に思いを馳せて、懐かしさと新しい気持ちが入り混じる時間を過ごせたことに、心からの感謝の意を。

70周年、誠におめでとうございます。

📍 思い出の場所

● レンタルビデオ「オリオン」:

当時VHSからDVDに移行し始め、てんやわんやだった。計算式がわからないがバイト歴7~8年の文大生の先輩がいた。



都留がすき ～仕事を辞めて戻ってきました

2006年社会学科卒業

里山ライフ代表 羽野 幸



学生時代に都留が大すきになり、暮らしたいと思いました。新卒で2～3年働いたら辞めて、都留に戻れることを決意した4年生の秋。奨学金を完済し、会社員になって3年目に仕事を辞めて戻ってきました。

2～4年生の時、図書館横と5号館の下にある「ピオトープ」の手入れなどを行っていました。生き物や植物にふれる機会を通して卒業後、土のある暮らしをしたいと思うようになりました。

現在は、野菜やお米に加えて、手作り加工品を楽しむために大豆や小麦の栽培も楽しんでいます。農業の他にオンラインでの仕事をしています。

一生かけてやりたい田んぼや畑と、場所を問わずにできるオンラインでのお仕事の組み合わせによって、すきな場所で暮らすことを実現できています。

米づくりを2010年に開始し、初期から友人や学生時代の後輩、先輩、同期などが、今では家族と一緒に参加します。学生たちが多様な業種に携わる大人たちと交流できる機会になっています。

環境ESDプログラムの実習生の受け入れや社会創造基礎の授業での講演を通して、大学や学生たちとつながっています。

キャリアの授業なので、人生設計や仕事のこともお話ししますが、裏テーマは都留の魅力を伝える！と決めています。

■印象に残っている講義・恩師・友人とのエピソード

・講義

小中高の第一種免許を取得した際に受けた、教育系の授業が楽しかったです。

地域社会論ゼミで茅野市にフィールドワークに行って、実際に事例を見聞きできたことです。

・恩師

今泉吉晴先生：ムササビの研究者で授業にムササビの赤ちゃんを連れてきてくれました。

「仕事は自分でつくることができます」と初回のゼミでお話ししてくださって衝撃を受けました。限られた働き方しか知らなかった私の人生の選択肢が一つ増えました。教科書からだけでなく、自分で経験して感じたことや学んだことの大切さも学びました。

藤田玄播先生・塩谷晋平先生：吹奏楽部の音楽監督として本気で音楽や人生と向き合ってくださいました。最期まで使命に向き合われた生き様が、心に焼きついています。

佐藤洋さん：宝の山ふれあいの里の学芸員。動物や植物だけでなく、人との付き合い方をたくさん教えてくださいました。

大学の近くに大半が暮らしていたので、友人たちとよくご飯を一緒に作って食べたり、誰かの家で飲んだりしていました。他の大学に通っていた友人たちに話をすると、あまりない環境のようで驚かれました。

大学時代の思い出=吹奏楽部というくらい、濃密な時間を仲間と共に過ごしました。同じ楽器のメンバーや全体で練習をしたこと、コンクールに向けてみんなで取り組んだこと、演奏会をつくりあげたこと、地域で訪問演奏したこと、つるこどもまつりや文化祭で演奏したことが印象に残っています。悩んだり、大変なこともたくさんありましたが、ずっと色褪せない大切な思い出です。

インターンシップ(宝の山ふれあいの里)で子どもたちの自然体験活動の受け入れをしました。子どもたちだけでなく、地域のおじいちゃんやおばあちゃんと交流する機会に恵まれました。野生のモグラを観察したり、小学校の授業での観察プログラムをお手伝いしたりしたことが思い出です。おじいちゃんが竹から器用に食器をつくったり、おばあちゃんたちが食べられる草をたくさん知っていたり、生きる知恵と力が豊富で憧れました。自分も生きる力を身につけたいと強く思いました。

・アルバイト

山中湖にあった保養所で4年間お世話になりました。シェフがつくる美味しいご飯と、奥さんの人柄が大好きでした。ご夫婦はすでに引退していますが、年に数回訪れていて、いつもあたたかく迎えてくださいます。

📍 思い出の場所

- アトリエ:今はなくなりましたが、1号館と学生ホールの間にあったプレハブ小屋の1階。楽器置き場で、仲間と遅くまでたくさん時間を過ごしました。
- カフェ「hotori」と「都留小屋」:同じ学科の友人たちがwaku-work都留というサークル活動の中で、立ち上げたカフェとリノベーションしたアパート。学生でもいろんなことに挑戦して、実現させていく姿にたくさん刺激をもらいました。※他にもたくさん挙げていただきました。p.110～「都留市内思い出マップ」をご覧ください。



大学4年 炭焼き体験



図書館と5号館の間にあったビオトープ

結婚式の披露宴会場:「結婚」という人生の大切なイベントに関わることができて楽しかったです。1日12時間くらい働くことができたので、部活との両立がしやすく、すてきなメンバーにも恵まれて卒業まで続けました。

・その他

炭焼き体験:地域のおじいちゃんと一緒に、炭焼き窯を作るところから体験しました。

■ 今後の展望・大学の未来

これからも学生達と関わり続けながら、学生時代に大人たちからいただいたものを恩送りし続けていきたいです。

学生、大学で働く人たち、地域の方から愛され続ける大学であってほしいです。

「人生は、判断、決断、実行の繰り返し。

一度きりの人生 悔いのないように」

卒業時に、恩師からいただいた言葉を贈ります。

都留で過ごす4年間は、すてきな出会いや経験であふれますように。

都留での学びが支える今

2008年比較文化学科卒業

国立陽明交通大学言語教育研究センター 非常勤講師

台湾半導体研究センター 契約日本語講師 等 永富 菜穂美



現在の私が活動している台湾・新竹市は、世界的な半導体関連の企業が多く集まる地域です。そうした環境の中で働くエンジニアやその家族、また、新竹市にある大学の学部生を対象に日本語を教えています。日本語教育に携わっている私の仕事や価値観の土台には、都留文科大学で過ごした4年間のさまざまな経験が深く関わっています。

在籍していた比較文化学科では、1年次から基礎講読の授業などで世界各国の文化や歴史について学び、自文化との比較を通して、自分の中にあつた世界観や視野を再認識しました。その過程で、物事を相対的に捉える視点を培うことができました。

印象に残っているのは、伊香俊哉先生のもとで学んだゼミ演習です。近現代史を専門とするこのゼミには、戦争や紛争に関心をもつ学生が集まっています。ゼミでは台湾、中国、アフリカ、ヨーロッパといった世界各地に目を向け議論を交わし、現代社会の諸問題の根源が歴史にあることを学びました。毎週の討論で自分の研究の地域だけではなく、多様な地域を知れたことで、多角的な視野を養うことができました。今、台湾で生活していますが、現代の社会問題の様相を、歴史的観点を踏まえて奥行きある観察ができているのは、このゼミで学んだ成果だと思っています。また、このゼミで台湾の歴史を日本語教育政策の観点から研究したことは、現在、地域に残る日本統治時代の名残を台湾の日本語学習者との交流の中で感じ、理解する際に、大きな助けとなっています。

3年次の夏休みに参加した日本語教育実習も思い出深いものです。UCLAからの交換留学生を対象と

した1か月間のプログラムに参加し、授業見学や教材分析、指導案の作成、模擬授業を行いました。

特に、模擬授業で「～つもりで」という文法項目を教えた経験は忘れられません。「清水の舞台から飛び降りるつもりで～する」という表現を紹介するために何時間も準備を重ねました。実際に日本語学習者の前に立って授業をした緊張感と、彼らに伝わった瞬間の喜びを、今でも覚えています。この1か月間のプログラムを通して、外国語としての日本語がどのように学ばれているのかを初めて体感しました。そして、留学生や他の実習生と協働する時間は非常に刺激的なものでした。この実習が、私にとって日本語教師になるために踏み出した第一歩であり、教育実習の指導教官だった先生方は、今も私の心の中の「師匠」です。

生活面で忘れがたいのは、体育館裏にある希望ヶ丘荘での暮らしです。残念ながら、もう取り壊されてしまいましたが、当時でも珍しかった風呂トイレ共同の女子学生専用アパートに住んでいました。管理人の方の部屋に住人が集まるとは、先輩後輩分け隔てなく、お茶菓子とともに語り合い、親睦を深めていました。このアパートでは、掃除当番や入浴時間のルールがあったことで、節度ある学生生活を送ることができました。何より、郷里を離れた地での一人暮らしの中にあつても、住人同士が家族のように感じられて、温かく心強いものでした。学科の垣根を越えて出会った仲間とは今も交流が続いており、一生の友人を得た場所となりました。

私は卒業後、台湾で社会人一年目をスタートさせました。在籍当時、学科の先生方のもとで中国、北

京、フィリピン、ポーランドのフィールドワークツアーに参加しました。単なる観光旅行ではなく、現地に赴いて歴史を学び、異なる文化や社会を垣間見た経験があったからこそ、清水の舞台から飛び降りるつもりで、海外で生活、就職するという決意ができたのだと思います。

最後になりますが、都留文科大学で先生方が私たち学生一人ひとりに向き合ってくださいましたように、私も教師、支援者として日本語学習者と真摯に向き合い、地域に根差した日本語教育をこれからも実践していきたいと思っています。日台の良好な友好関係がこれからも続いていくことを願いつつ、異文化理解の架け橋として、地道に努力を重ねていくつもりです。

こうして改めて振り返ってみても、都留での4年間の学びは今の私の原点だと感じます。先生方、そして共に学んだ仲間から心から感謝しています。

📍 思い出の場所 ● 文章内に記載



伊香ゼミ合宿 伊香保温泉にて

「夢」「現実」「目標」

2010年初等教育学科卒業
合同会社MOVEMENT PRODUCTION代表
株式会社J.Collection代表取締役 前迫 潤哉



この度は創立70周年、心よりお祝い申し上げます。記念すべき節目に執筆の機会をいただきましたこと、大変光栄に存じます。

現在、私は作詞作曲家・音楽プロデューサーとして活動し、音楽作家事務所の代表を務めております。果たして自分の経験が皆さまのお役に立つのかという不安もありますが、大学時代の思い出とともに綴らせていただきます。

都留文科大学は、教育者を志す人々にとって全国的に高い評価を得ており、地方であっても「都留文科大学なら」と信頼を寄せられるほど、その知名度と先輩方の活躍は際立っていたように思います。私

自身、少年時代から人に伝え、理解してもらうことに喜びを感じてきました。その経験から「教師」という職業が自分に適していると考え、都留文科大学への進学を決めました。

振り返れば、高校卒業前の進路選択は、若者にとって非常に大きな決断です。「夢」と「現実」を天秤にかけ、多くの人が「現実」を「目標」として歩み出すのではないのでしょうか。社会を知らぬまま進路を選ぶことは時に危うさも伴います。私の「夢」は歌手になることでしたが、全力で挑むことはできず、「現実」として教職を志しました。結果的に教師にはなりませんでしたが、今もなお、教師は素晴らし

い職業であると考えております。

大学生活の中で特に印象深いのは、学園祭の「カラオケ大会」です。当時、三日間の学園祭を彩る名物企画となっており、私は二年生から三年連続で優勝の機会をいただきました。駅近くの「TENTO」で練習していたことも懐かしい思い出です。四年生の時には、「もしこの大会で優勝できなければ歌手の夢は諦めよう」と覚悟を持って臨みました。周囲が教員採用試験に向けて勉強している中で、私は歌手の夢を胸に挑んでいたことを思うと、今となっては少し恥ずかしくもあります。

卒業後は歌手を志して上京し、さまざまなご縁をいただきながら現在に至ります。その中で、母校で培った教育者としてのマインドは、今のプロデューサー業にも大きく活かされています。たとえば、アーティストのレコーディングではディレクション、すなわち歌唱指導のような役割を担いますが、理解を得るためのアプローチは人によって異なります。その「引き出し」の多さこそが成果を左右するのです。

これはまさに、多くの生徒に学びを届ける教師の姿勢に通じるものだと感じております。

最後に、これからの文大生への願いとして「多様な職業に触れる機会を持ってほしい」と申し上げたいです。教師は生徒に向き合うだけでなく、その背後にある家庭や保護者とも向き合います。多様な職種への理解は、生徒の家庭環境を理解する手助けとなり、彼らの目標に寄り添う上でも大いに役立つはずです。大学においても、そのような学びの機会を積極的に提供していただければ、未来に向けての大きな力になると思います。

いつか母校で直接お話しできる日を心待ちにしております。

📍 思い出の場所

- 「石井のうどん」に通い詰めていましたね。そこから吉田うどんにハマり、バイクでスタンプラリーのように巡ったことを覚えています。
- アルバイトはモスバーガーと、近隣ホテルのスターランドで受付をしてました。



都留で紡いだ学びと出会い、 色とりどりのミライへ

2019年英文学科卒業

全日本空輸株式会社 客室センター客室乗務部 伊藤 英理



都留文科大学創立70周年、心よりお祝い申し上げます。卒業生としてお祝いの言葉を寄せる機会をいただき、うれしく思います。

私は2019年に都留文科大学を卒業しました。在学中は、少人数教育という恵まれた環境のもと、先生方の温かいご指導を受けながら学問に励むとともに、アルバイトや留学、サークル活動などにも積極的に取り組みました。忙しくも充実した日々を通して、多くの出会いや学びに恵まれたことは今も大切な思い出です。在学時の経験の中でも、特に印象に残っているのは「アルバイト」と「海外経験」の二つです。

■アルバイトについて

長期留学の実現を目指し、私はアルバイトを二つ掛け持ちしておりました。焼肉店では店主や仲間に支えられ、復学後も含めて約5年間勤め上げ、継続することの大切さを学びました。二つ目の勤務先である河口湖駅のコンシェルジュデスクでは、富士山という素晴らしい観光地の近くで世界中から訪れる観光客の方々と接する機会に恵まれました。多様な文化や価値観に触れる中で、相手を理解し尊重する姿勢が自然と身についたと感じます。

■海外経験について

大学3年生を終えた後、私は1年間の休学を決意しました。きっかけは、所属ゼミの教授から勧めていただいた「日本語教師アシスタントとしてのインドネシア派遣事業」です。当時は、休学することが就職活動に不利になるのではないかと不安もあ

りましたが、先生方、仲間の言葉に背中を押されました。挑戦できる環境があることへの感謝、そして失敗も糧になるという言葉に勇気をもらい、一歩を踏み出しました。

インドネシアでは約半年間、現地の高校や大学で日本語教育に携わり、文化の違いと向き合う貴重な経験を積みました。残り半年はアメリカ・ボストンでインターンシップに挑戦し、異なる価値観や働き方に触れ、視野を広げることができました。この1年間の海外での学びは自分にとって大きな糧となり、復学後の教育実習や就職活動にもつながりました。

■現在の活動と今後の展望

大学卒業後は全日本空輸株式会社に入社し、客室乗務員として7年目を迎えました。これまでに国内線の責任者資格を取得、そして国際線ビジネスクラスの責任者も務めています。日々の業務を通じて、安全を堅持する責任の重みを実感するとともに、機内という特別な空間でお客様一人ひとりに寄り添い、その時々で求められる付加価値を、限られた時間の中でチームと共に形にしていくことにやりがいを感じています。また、学生の方への職業紹介やボランティア活動等の社外活動にも参加し、経験を還元する機会を大切にしております。

今後は国際線の責任者資格取得を目指すとともに、後輩育成の面でも、より質の高い双方向型のコミュニケーション力を磨いていきたいと考えています。

日々を重ねる中で、母校での5年間で培った「多様性を受け入れ、互いを尊重する心」の大切さを改めて実感しています。大学での学びや経験は、今も

なお私の原点であり、大きな支えとなっています。

これからの時代を担う在学生の皆さんには、自分の可能性を信じ、都留文科大学での学びを通して世界を広げてほしいと思います。多くのことに挑戦し、たくさんの人と出会い言葉を交わす中で、自分の視野を広げていってください。皆さん一人ひとりが自分らしい色で未来を描き、色とりどりのミライへと歩みを進めていかれることを心より願っております。

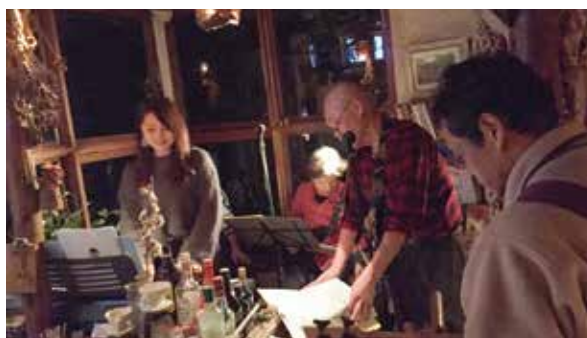
母校が今後も地域に根ざしながら、世界へとつながる学びと出会いの場として発展し続けることを祈念しております。

📍 思い出の場所

- はむ屋FOODS:都留市のハム屋さん。店主はバンド演奏でギター&ボーカルを担当。手作りのソーセージやハムはどれも絶品です。
- Cafe Natural Rhythm:都留市のカフェ。木の香りや自然に癒されます。色々なご縁があり、こちらのカフェで当時定期開催していたバンド演奏にも参加させていただきました。そのご縁はありがたいことに今も続いています。(右下写真)



インドネシアでお世話になった方々と



Cafe Natural Rhythm

遊び、学び尽くした4年間

2021年比較文化学科卒業
読売新聞大阪本社 記者 北條 七彩



大学に入学してすぐ、自由に使える時間の多さに戸惑った。高校時代に比べて少ない授業数、自宅から歩いて3分ほどでついてしまう大学。4年間どうやって時間を使えばいいのだろう。戸惑いが続いたのは、つかの間だった。入学後1か月もたてば授業にサークル、アルバイトと1日が24時間で終わることを悔やんだ。

一番楽しかったのはサークル活動だった。バドミントンサークルに入って、週3回ほど練習した。練

習がある日はジャージ姿で授業を受け、サークルの同期が入ったLINEのグループで「今日学食?」とサークル友達を誘っては学食で昼ご飯を食べた。授業が終わればまたサークルで顔を合わせ、「民体(都留市民体育館)」でバドミントンに汗を流した。60人ほどが入っている大規模なサークルで、同期も約20人いた。学年問わず仲が良くて、卒業後はそれぞれ全国各地にちりぢりになった今でも定期的に会っている。

学びも存分に得た。授業時間は高校に比べて長い
が、都留文科大学は担当教員と学生の距離が近く、
講義後に質問もしやすかった。そんな中でも、「もっ
と知りたいな」と思えることが授業を通して見つ
かった。比較文化学科で教鞭をとられている佐藤裕
先生の「国際開発論」という授業がきっかけだ。も
ともと世界史や外国での事象について関心はあった
ものの、佐藤先生が実際に研究対象とされ、現地で
調査をされていたインドのスラムに生きる人々の
話、写真はリアルに私の頭に残った。話のリアルさ
と、発展途上とされる国が、他国ひいては世界のシ
ステムのなかにどのように位置づけられているの
か、1時間半の毎回の授業を夢中になって聞いてい
た。自分の足で現場を訪れて調べ、大きな枠組みに
落とし込んで解釈を得ようとされる姿にあこがれ
た。触発された私は、佐藤先生のすすめもあり、ア
フリカ諸国に関心を持った。2年次の終わりに1か月
ほどケニアに滞在し、より関心を強めた。

その後、3年次から選べるゼミで、佐藤先生のゼ
ミを選んだ。国際開発学にかかわる分厚い文献や、
英語でかかれた論文を輪読した。ゼミ生はみんな勉
強熱心で、互いに拙いながらに議論しあい、佐藤先
生に助言をいただく時間を重ねた。

卒業論文では、ケニアで出会った子どもたちや支
援組織を事例に、約5万字を書いた。こんなもの
を書くことになるとは入学時には思っていなかった。
入学時にぼんやりとしていた私の関心は、授業を通
して明確なものになった。熱心に卒業論文の相談や

添削をしていただいた佐藤先生には感謝している。

大学卒業後は、アフリカ、ケニアへの関心が捨て
きれず、より専門的に学べる大学院に進学した。予
想外の進路だった。

修了後の2023年4月から新聞社の記者として働い
ている。問題と感ずること、自分の関心があること
について、実際に事象が起きている現場を訪れる。
2年次に感じた「あこがれ」を実現できる職に就き、
充実した日々を送っている。

大学は自分で自由に使える時間が多かった。サー
クルの友人とバカ騒ぎをして楽しかった時間も、な
かなか思うようにレポートや卒業論文が書けなくて
図書館にこもった時間も、どれも都留文科大学でし
かできなかった経験で、出会えなかった人たちだ。

大学創立70周年を迎えるにあたり、大学には学
ぶ意欲のある学生を最大限サポートしてほしいと思
います。在学生や今後入学される学生のみなさんは、
大規模な大学では感じられない教育環境や、友人と
の距離の近さを満喫してください。卒業後でも「ま
た来たい」と思える場所ができることは、自分の心
を温かくしてくれ、その後の人生の宝になると思
います。

📍 思い出の場所

●私は「A地区」に住んでいました。「オレロ(オレ
ンジロード)」を通るたびに友人と顔を合わせ
ました。

●オギノ: アルバイトでレジ打ちを2年しまし
た。友人がわざわざ私のレジに並んでくれる
ことがうれしかったです。

※他にもたくさん挙げていただきました。p.110
～「都留市内思い出マップ」をご覧ください。



サークルの先輩方の卒業旅行で沖縄に行きました(2018年2月)



ケニアで出会った子どもたちと(2019年2月)

母から、都留から、学びをつなぐ

2021年国際教育学科卒業

仙台育英学園 DPコーディネーター補佐・教諭 猿渡 涼香



都留文科大学は母の母校でもあります。母の勧めで受験を決意し、初めて都留を訪れた日、母と町を歩きながら学生時代の思い出を聞きました。「この下宿に親友が住んでいたな」、「当時は都留文科大学前駅がなく、谷村町駅から歩いたのよ」——そんな話を聞きながら、母がこの町で過ごした時間と、これから自分が過ごす日々が重なるような感覚を覚えました。入学後もふとした瞬間に母の言葉を思い出し、遠い過去と今がつながっているような温かい気持ちになったのを覚えています。都留は私にとって、家族の記憶と自分の成長が交わる特別な場所です。

国際教育学科の一期生として学び始めた当初、すべてが新しく、手探りの日々でした。IB教育と出会い、教科書の枠にとらわれない学びに触れたとき、高校時代に感じていた息苦しさが一気に解けるような感覚を覚えました。教授の方々も、多様な考えを尊重し、学生の意見を積極的に取り入れて授業の内容を作り上げてくださいました。まだ制度が整っていない中で、授業の方針やイベントの企画を学生の声から形づくっていく経験は、まさに「創りながら学ぶ」時間でした。仲間や先生方と教育や社会問題について授業後も熱く議論した日々は、私にとって「問い続ける姿勢」を育んだ時間だったと思います。

その姿勢を大きく支えてくれたのが、就職活動の時期に学科事務室で交わした会話でした。教員になるかどうか迷っていた私に、当時学科事務を担当されていた櫻場さんは「すべての生徒にとって良い先生はいない。いろんな先生がいるからこそ、誰かにとっての“良い先生”が生まれるんだ」と言ってくださりました。その言葉を聞いたとき、私は自分が“全

員にとって良い先生でありたい”と無意識に考えていたことに気がつきました。思い返せば、私にとっての恩師たちも、それぞれの個性や方法で私を支えてくれた方々でした。そこから私は、「自分の個性も、生徒の誰かにとって意味のあるものになるかもしれない」と思えるようになりました。この気づきが、私の教育観の出発点になりました。

現在はIB教員として高校で歴史とTOK（知の理論）を担当し、教育の在り方を模索しています。多様な背景を持つ生徒たちと向き合う中で、都留で学んだ「問い続ける姿勢」や「他者の考えを尊重する対話」が、日々の教育の基盤となっています。あの頃、母から受け継いだ“都留とのつながり”、一期生として挑戦した“創造する学び”、そして“多様性を認め合う教育観”——それらすべてが今、教員としての私の中で生きています。

これからも生徒たちとともに考え、学び、問い続ける教師でありたい。そして、私自身がそうであったように、都留文科大学がこれからも時代を越えて“学びの心”をつなぎ、問い続ける人を育む場であってほしいと思います。

📍 思い出の場所

●うぐいすホール：友人と何度も夜に星を見に行った思い出の場所。人生であれ以上の流れ星を見たことはない！

●うどん石井、じゅーり：都留グルメの中でもダントツで忘れられない味。いまだに思い出します。

※他にもたくさん挙げていただきました。p.110～「都留市内思い出マップ」をご覧ください。

都留文科大学での思い出

2022年学校教育学科卒業

長野市立松代中学校 数学科教諭 石澤 里菜



教師歴も気付けば4年となりました。あっという間です。現在は、初めての進路指導や生徒会顧問、部活動の地域以降に伴う引き継ぎなど、さまざまな経験をさせていただいています。まだまだわからないことだらけですが、多くの先生方に支えられながら日々を過ごしています。

大学での思い出ですが、やはり一番は部活かな、と思います。大学では弓道部に所属していました。弓道の楽しさに気づかせてくれた先輩方や同代には感謝しかありません。授業のない時間は弓道場で弓をひいたり、的貼りをしたりしていました。用事もなく足を運ぶこともありました。部活終わりに同代や先輩、後輩と雅龍やツイステ、三つ星にご飯を食べに行ったのも良い思い出です。居酒屋に袴で行っていたのは、今になって考えるととてもクレイジーだったなあと思います。が、これからもきっと弓道部員が袴でご飯を食べにいくと思うので、その時は優しく見守ってください。都留には美味しいご飯屋さんが多いので、たくさん食べて袴のきつさと格闘しています…。

大学3年生になった頃、コロナの流行が始まり、大会がどんどんなくなってしまい、気づいたら引退していました。もう一度、あの張り詰めた試合をやりたいと思い、社会人になってからも、社会人クラブで少し弓道を続けていました。しかし、男子バレーボール部の顧問になってからは、バレーボールの魅力に囚われ、週末は基本的にバレーボールの審判をしたり、試合を見たりしています。自分ではバレーボールはやりません。スパイクが怖くて。いくら中学生のスパイクでも私の腕はもげるか骨が折れ

ます。高校生、社会人のスパイクは弾丸だと思っています。

他にも、学校教育学科の授業は子どもに戻れたような気分になる授業が多く、とてもワクワクできました。子供を楽しませるにはまず教師から、という今の私の授業の根幹を支えていると思います。

話は変わりましたが、今年の夏は、久々に都留文科大学を訪れました。モニュメントで写真も撮りました。なんだか大学生に戻った気分でした。また、教育方法論ゼミでお世話になった鶴田先生にもお会いして、近況報告をしました。お変わりなく、元気な姿を見てとても安心しました。来年も都留に足を運べたらと思っています。

数学でお世話になった新井先生にも、研究会等で定期的にお会いしています。大学生のときは、ゼミ生じゃないのに、ゼミ室に遊びに行ってお野暮なトークをしていました。本当にお邪魔しました。

そんな自由奔放に大学生活をしていた私の受け持つ生徒も、卒業に向けてカウントダウンを始めています。3年間、すぐそばで共に過ごしてきた生徒が卒業していく、と考えると今からでも涙が出そうです。もちろんいいことばかりだけでなく、いろんなことがありました。自分の時間やお金を削って、生徒にかけてきたものも多いです。基本的にポジティブに生活している私でも「やめてしまおうかな」と思ったことも、ちょっとあります。しかし、元気がない私を助けてくれたのは、自分のクラスの生徒たちでした。よく、先輩教師の方々に「嫌なことがたくさんあっても、卒業式で、今まで先生をしてよかった。また頑張ろうってなって、結局先生を続けてし

もう卒業式マジックがある。」と言われます。きっと3月には私もそう思っているのかもしれませんが。そして、新しいクラスで、またたくさんの思い出を創っていくのだと思います。

文字数も限界まで来てしまいました。卒業論文で「書きすぎ」と言われた私ただけにあるかもしれません。言葉をまとめるのが下手くそとも言えます。最後に、これからも都留文科大学が大きく発展していくことを願っています。



📍 思い出の場所 ● 文章内に記載

「きっかけ」という宝物が落ちている場所

2023年地域社会学科卒業

石川県庁(文化観光スポーツ部スポーツ振興課) 岩本 昂己



新元号が「令和」と発表された2019年4月1日、都留での生活が始まった。入学直後は、「平成最後の日」という話題ばかりであった。そして、石川県金沢市出身の私からすれば、「都留」は何もない場所。それでも、私が都留を選んだのは、自然豊かな静かな場所で、4年間勉学に励みたかったからである。

1年時、とにかく大学の学びについていくことに必死だった。その中でも、教養科目であった「ジェンダー研究」は、私のこれまでの考え方やこの先の興味・関心に大きな影響を与えた。当時は、現在のようにジェンダーにとっても関心がある世の中ではなかったと記憶している。それでも、「ジェンダー」という言葉、「らしさ」ということに私自身興味があったことから受講を決意し、最終的には、ジェンダー研究プログラムを修了するほど、主体的に学ぶ

ことができていた。

もう一つ、地域社会学科は1年前期に必修科目である「アカデミック・スキルズ」も、とても印象に残っている。この授業では、興味・関心があることについて、自分でテーマを設定し、発表・レポート



作成を行うものであった。当時、自分でテーマを設定し、レポートを書くという事はなかった。それでも、自分が学びを深めたいことは何だろうと考えた時に、「育児」について書いてみたい、と思った。このテーマ設定は、都留での学びのテーマにもなったのである。そして当時、1年前期にもかかわらず、設定したテーマについて、5000字程度のレポートを作成しなさいと言われた時は衝撃だった。それでも、とにかくやる、という強い気持ちで取り組んだことは今でも鮮明に覚えている。最終的には、6000字を書き、S評価だったことは大学生活でとても自信になったし、今でもいい思い出である。

しかし、順調だと思っていた都留での生活は、2020年に発生した新型コロナウイルスにより一変した。学校に行けない、人に会えない、授業も毎回レポートだけ。何のために都留に来たのか分からなかった。そんな中、自分を支えてくれたのは、4年間アルバイトをしていた、モスバーガー都留文大前店の存在である。コロナ禍で人と会えない状況の中、主に週末にアルバイトに励み、優しい先輩と頼りになる後輩にとっても助けられた。今振り返っても、かけがえのない時間であったし、みなさんとの出会いは一生忘れたくない。そして、都留に来て本当によかったと思わせてくれるとても大事な場所になった。

たくさんの人に支えられながら、3年時からゼミが始まった。ゼミ選びはとても悩んだ。それでも、学びの集大成で何をしたいのか、と考えた時に、1年時興味を持ったジェンダーの視点から育児に関する事について卒業論文を執筆したい、という結論に至った。そこで、恩師でもある富永先生のゼミに入った。ゼミでは、メンバーにも恵まれ、自分が持っていない知見や視点を獲得することができた。上手くいかないこともたくさんあり、苦しいことの方が多かった。それでも、投げ出すことなく、自分が納得できる卒業論文を執筆することができたことは、今でも大きな自信と財産になっている。そして何より、富永先生には、2年間、拘りが強い私に対して、いつ

も愛のあるご指導をいただきとても感謝している。

卒業後は、地元に戻り、石川県スポーツ振興課の職員として働いている。現在は、経理担当として、課内の事業が執行できるよう、日々コミュニケーションを取りながら業務に携わっている。また、1年目に発生した能登半島地震では、日本で初めて設置された1.5次避難所の運営に施設所管課として携わった。都留での学生生活で得た、どんな状況でも投げ出さない姿勢は、現在の仕事においても大きくつながっていると日々感じている。今後の人生においても、主体的に学び続け、地域に貢献できる人間になっていきたい。

都留という場所には「きっかけ」という宝物がたくさん落ちている。学生達には、4年間で自分の人生を変える「きっかけ」を探してほしい。そして、都留から羽ばたくとき、それをカタチにしてほしい。そんな場所であり続けることをこれからも願っている。

📍 思い出の場所

●モスバーガー都留文大前店: 4年間アルバイトをした思い出の場所。接客の難しさや楽しさを教えてくれました。また、色んな地域から来た、先輩・後輩と楽しく働くことができました。新商品が発売される時は先に試食できたり、お昼には賄いで自分の好きなハンバーガーを作ることができたことがいい思い出! 今でもモスバーガー作れます!(トマトが嫌いなので、トマト抜きですが…)

※他にもたくさん挙げていただきました。p.110 ~「都留市内思い出マップ」をご覧ください。



VI. 地域とともに

市内飲食店 Interview インタビュー

長年文大生を見守り、支えてくださった地域のお店の方々に、
お店の歴史、学生との思い出、アルバイト学生についてなど、様々なお話を聞きました。
在校生も卒業生もぜひまた訪れてみてください。

バンカムツル

■住所:山梨県都留市上谷1571-4
■電話番号:0554-45-2260
■営業時間:火~土 11:00~18:00
(テイクアウトは19時まで)
■定休日:日・月曜日



Q お店を始めたきっかけを教えてください。

A コーヒーの焙煎は難しいと言われたが、ものづくりが好きだったので難しいものこそやるしかないと思い挑戦しました。日本で一番美味しいコーヒーを作れば生き残れると思って、全国の名店を巡って学びました。出身地が都留で、市内中を探してこの場所がよいのではないかと考えたので今の場所に開店しました。

Q 長年お店を続ける中で変化はありましたか。

A うちの店のテーマは「より良いコーヒーを求めて」で変わらないです。時代の変化に合わせるのではなく、逆にお客さんに店の考え方についてきてもらっているという感覚です。

Q お店を続ける上で大切にしていることは何ですか。

A 「志を高く持つこと」。限りなく高く険しい志がないと生き残れないと思います。

Q インタビューの中で学びや勉強という言葉がたくさんお聞きしましたが、なぜ学び続けることが大切なのでしょう。

A 学ぶことは絶対に役に立つからです。勉強は知らないことを知るのだから本来すごい楽しいことのはずです。一見役に立たなさそうなものでも、それを変換するという考え方が大事で、いろいろな見方や考え方を身に着けていると様々



な角度から物事を見られるので、自分を助けることになります。

Q 人気メニューであ

るチョコレートケーキについてお伺いしたいです。

A コーヒーに合うケーキを目指し、配合から試行錯誤して2年かかりました。修行ではなく、長い間やっていくと少しずつ原因が見えてきて、何が大事なのかわかってきます。

Q 学生にどのような印象を持たれていますか。

A 今も昔も学生は「わがまま」という印象ですが、自分はこうであると自己主張することは大事だと思います。

Q 学生の性格や服装などの変化を感じることはありますか。

A 昔は同じ服でよかったですが、生活が豊かになったからそれぞれ違う服を着るようになったという印象です。

Q 卒業生がお店に訪れることはありますか。

A たくさん来ます。30年前の卒業生などはうちに置いてある卒業アルバムを見て盛り上がっています。

Q 最後に卒業生や在学生へのメッセージをお願いします。

A 皆さんのおかげで生き残っています。まだ精進しますので、よろしく願いいたします。

学生インタビューの感想

英文学科 金谷 美寿

インタビューをしていることをつい忘れてしまうほど、中村さんのお話に引き込まれました。より良いコーヒーを追い求め、真摯に学び続ける中村さんの姿が印象的で、文大のすぐ近くにこのような素敵な場所があることを嬉しく思いました。

地域社会学科 塩島 桜音

マスターの口から発される言葉一つ一つに重みがありました。ケーキやコーヒーをより美味しくするために沢山の場所で多くの人に学び、長年かけて研究してきたことに、生涯を通して人間が学ぶことの意義を感じました。いただいたコーヒーは今までのコーヒーの概念を覆すほど美味しかったです。

川 藤

- 住所:山梨県都留市上谷1569-6
- 電話番号:0554-43-1675
- 営業時間:月～土
【昼】11:30～13:30 【夜】17:30～20:30
※L.O.20:00
- 定休日:日曜日



Q この場所でお店を始められたきっかけを教えてください。

A 最初は違う場所でお店を借りて5年ほど営業していましたが、ちょうどこの土地が空いていたので購入し、1974年に現在の場所で開業しました。夫の地元が東桂だったこともあり、ここで開業しました。

Q 開業当初の周辺環境はどのようでしたか。

A 都留文科大学前駅側は田んぼが多かったです。今のようなアパートが増えてきたのは最近で、オレンジロード側は昔からありました。こちら側も学生向けの住居が増え、大学の建物も増えていった印象です。

Q 学生との思い出について教えてください。

A 昔は学生バイトを多く雇っていて、まかない料理を出したり、子供と遊んでもらったり、家族のような関係でした。今でも卒業生が訪れてくれることがあります。顔を覚えていないこともあります(笑)。もう退職して、畑をしながら野菜を送ってくれる子もいますよ。最近はアルバイトもないし、年も離れてしまったのであまりお話しする機会はありませんが、お母さんの手作りのバッグなどを素敵だと思った時なんか話しかけています。

Q お店を続ける上で大切にしていることはなんですか。

A 美味しい料理を出すことです。私は調理はしません。夫が担当しています。学生さんが多いので、価格もできるだけ手頃にしています。う



なぎもありますが、学生向けの定食が中心です。

Q 学生に人気のメニューはありますか。

A 最近は「チキンチーズ」が学生に人気です。昔はチーズを使う発想がなかったのですが、今はチキンチーズですね。肉ナスは昔から根強い人気があります。

Q 地域とのつながりはどうですか。

A 昔は葬儀や法事の際に店を使って料理を提供するなど、地域の行事に深く関わっていました。今はそうした機会も減り、町内の飲み会も規模が縮小しています。それでも地域の方々とのつながりは大切にしています。

Q 卒業生がお店に訪れることはありますか。

A はい、時々来てくれます。バイトしていた方が家族を連れて来ることもあります。大学の70周年記念で訪れる方もいるようで、そうした再会は嬉しいものです。

Q 最後に、卒業生や在校生へのメッセージをお願いします。

A 特別なことはありませんが、またご飯を食べに来てくれたら嬉しいです。昔のようにゆっくり話す時間は少ないですが、ここでの思い出を振り返ってもらえたらと思います。

学生インタビューの感想

地域社会学科 赤津 裕太

お店を50年以上続けられているということで都留文科大学周辺の今はなくなってしまったお店などを聞くことができ勉強になりました。また川藤さん自体も元は別の場所で作られていたということでとても貴重な話を聞きました。

学校教育学科 竹井 明日香

川藤さんでは、お店が出来た当時の大学の周りの状況や昔の行事の話などを聞くことができ、今とはだいぶ違う当時の都留を知ることが出来て本当に良い学びになりました。お店についても50年以上の歴史の中で変化したことなどを沢山聞くことができとても面白かったです。

Trattoria PIPS

住所:山梨県都留市上谷6-10-14
電話番号:0554-45-1143
営業時間:火~日
【昼】11:30~L.O.14:30
【夜】17:30~L.O.20:30
定休日:月曜日



Q 今の場所でお店を始めたきっかけを教えてください。

A もともと主人の家だった場所で、料理の専門学校を出て東京で修行を積んだ後、「自分のお店を持つ」という目的でオープンしました。

Q 開店した当時の周辺の様子について今と違うところがありましたか。

A 全く違うと思いますね。創業が約46年前なのですがコンビニなど何もなく、文大生も学部が少なく、当時はほとんどの学生が教職を目指している印象が強かったです。

Q 長年の経営でどんな変化がありましたか。

A バブル、震災、山梨の大雪、コロナなどほぼ経験しています。内装は数回リニューアルしましたが、外観はほぼ変わっていません。アルバイト学生も世代を重ね、オープン当初は学生の方が私より年上でしたが、今では孫のような存在になっています。

Q お店をやっていてよかったこと、大変だったことについてお聞きしたいです。

A お店をやっていて良かったことは、やはりいろいろな人と出会えることです。全く知らない方でも常連さんになって話すようになっていくなつながりもできます。その都度いろいろなことに営業は影響されますのでそこは大変です。

Q 学生との思い出はありますか。

A 毎年、アルバイトの学生と東京まで一緒に出かけています。4年間アルバイトを続ける学生が多く、とても助かっています。アルバイトの学



生の卒業から数年後に結婚式に招かれることもあります。

Q 学生の性格や服装などの変化を感じることはありますか。

A 学生の時にしかできないこともあるので、ファッションは変化が大きいと思います。最近の学生は家族や先生以外との大人と会話していない子が多い印象ですが、アルバイトでお客様との会話を通じて大人との会話に慣れていっていると思います。

Q 学生に人気のメニューはなんですか。

A 特定の人気メニューはありませんが、最近誕生日など特別な日に友人同士でセットメニューを楽しむ学生が増えています。

Q どのようなお客さんが多いですか。

A 一般の方が中心ですが、学生も多く訪れます。お子さんを連れて訪れる卒業生など時々顔を見せに来る子たちもいます。

Q 卒業生や在校生への思いはありますか。

A 最初、都留に来た時は心細かったという学生もいると思うのですが、卒業する時にはここに来てよかったと聞くので安心できる環境です。一人暮らしの学生がほとんどで、周りに同じ条件の学生が多いということで安心感は大きいと思います。卒業生もみなさん真面目に仕事をしている印象です。

学生インタビューの感想

地域社会学科 塩島 桜音

40年間、営業を続けてきた中で様々な困難を体験してきたからこそ、学生やお客様に寄り添う温かい店になれたのだろうと感じました。文大生をとっても大切にしているオーナーの話を聞いて、これからも大学生・地域の人に愛されるお店であり続けてほしいと思いました。

学校教育学科 竹井 明日香

PIPSさんでは、お店の歴史や学生についての話を沢山聞くことができ楽しかったです。長い歴史の中でバブルや震災、大雪にコロナなどを経験してきたという話もとても興味深く、今回インタビューができてとても嬉しかったです。

松 鶴

- 住所:山梨県都留市中央1-2-17
- 電話番号:0554-43-6008
- 営業時間:火~土
- 【昼】11:00~14:00(L.O13:30)
- 【夜】17:00~21:00(L.O20:30)
- ※日曜日は20:00まで(L.O19:30)
- 定休日:月曜日(その他不定期に有り)



Q お店を始めたきっかけを教えてください。

A 私は先代がいるので、その後を継いだという感じですが、お店を始めようとしたというより、継ぐべきして継いだという形で今は2代目です。

Q 「松鶴」という店名の由来をお聞きたいです。

A 母の旧姓が小松だったのですが、小松の松を取って都留市の都留を鶴に変えて「松鶴」にしたと聞きました。

Q お店の歴史の中で印象に残っている出来事はありますか。

A 2代目になる時に、外装はそのままですが、店内を少しリニューアルしたことが記憶によく残っています。

Q リニューアル以外で印象に残っていることはありますか。

A 2代目として継ぐことに不安がありました。メニューもほぼ変えましたが、人気の「朝鮮焼き」は残しました。先代から続く大ヒット商品だったので、これは残さないと経営していけないと思ったからです。

Q お店を経営する上で大切にしていることはなんですか。

A お客さんが「お腹いっぱい、美味しかった」と言ってくれる、その言葉を聞くためだけにやっているようなものです。家族でやっている店なので家族の温かい雰囲気を出したいと心がけています。

Q 時代によってよく出るメニューに変化はありますか。

A 今も昔も「朝鮮焼き」がダントツです。2代目になってからは唐揚げ系の定食を追加して、これもよく出ます。



Q 学生との思い出について教えてください。

A 20年くらい前から都留文科大学の学生をアルバイトとして受け入れてきているのですが、彼らには本当に助けられていて、思い入れがあります。初代のアルバイトの子が今は家庭を持って子供もいたりします。

Q 卒業後も連絡を取ることはありますか。

A 特に連絡は取っていませんが、たまに食べに来てくれた時に話したりします。

Q アルバイトにかかわらず、卒業生がお店に来てくれることはありますか。

A あります。ゴールデンウィークなどには全国から来てくれます。

Q 学生の変化を感じることはありますか。

A ほぼ同じ年代の子が入り替わるので大きな違いは感じませんが変化という点、最近初めて女の子をアルバイトに採用しました。新しいお客様を呼び込む力になると思ってやってもらうことにしました。

Q 最後に卒業生や在校生へのメッセージをお願いします。

A 体力が続く限り頑張りますので、これからも温かくお越しいただけたら幸いです。

学生インタビューの感想

地域社会学科 赤津 裕太

松鶴というお店の名前の由来についてはとても勉強になりました。アルバイト生や食べに来た学生とのエピソードをお聞きして都留文科大学のことや学生のことを大切に思ってくださることがとてもよく伝わってきました。

英文学科 金谷 美寿

文大生に向けた温かい言葉を繰り返す小川さんの姿が印象的でした。おもてなしを「家族の雰囲気」と結びつける小川さん。一人暮らしの学生が多いからこそ、松鶴さんが文大生にとって心安らぐ場であり続けているのだと感じました。

都留市内

思い出マップ

都留文科大学前駅～十日市場駅



2025年4月20日(日)のホームカミングデーへ来場された方や、記念誌にご寄稿いただいたOBの方々より、思い出の下宿やアパート、行きつけだったお店をお教えいただきました。また、現役学生団体の皆さんがよく行く場所も記載しています。

- ・コメントについて、愛が溢れた長文や愛情の裏返し(?)の毒舌は、編集部会により若干編集させていただきますことをご了承ください。
- ・コメントがない場合は、お店の名前のみ掲載しています。
- ・移転したお店は、ご記載いただいた方の在校時の所在を記載しています。



1 hotori

ご寄稿いただいた羽野様(2006年卒)の思い出の場所

2 レンタルビデオ オリオン

当時VHSからDVDに移行し始め、てんやわんやだった。
2005年初等教育学科卒(正代様)

3 じゅーり

都留グルメの中でもダントツで忘れられない味。いまだに思い出します。
2021年国際教育学科卒(猿渡様)

4 レストラン鎌倉

5 みもぎ荘

電話は大家さんが放送して取り次ぐ。まかない有、お風呂の時間。
1993年国文学科卒

生ギョーザ、水カレー。
1986年国文学科卒

楽しみはチキンカツ! どなたかの書いてある呼出telで入学早々階段(外)ふみはずし骨折しました。
1986年初等教育学科卒

6 おかじま

店舗名の遍歴
1982年~ 岡島ファリミコ都留タウン
1995年~ 岡島パワーセンター
2002年~ フレッシュパワーおかじま
おかじま都留食品館
2022年~ おかじま都留店

7 八宝

8 パンの松花軒

9 くぼた

都留の居酒屋さんの中で一番好きで、部活で恩師の先生と一緒に飲みに行った思い出のお店です。
2006年社会学科卒(羽野様)

10-1F デイリーストア新都留店

大学から1番近いコンビニだった。バイトをしていてソフトクリームの8段まきとかつくってました。
1999年社会学科卒

10-2F GIBSON HOUSE

都留市のライブハウスといったらギブソンハウス!! ライブをしたり、ダーツを楽しんだり、お酒を飲んで語ったり...楽しかった思い出ばかりです。
2014年国文学科卒

11 ミツ星マート

サークル終わりや、後業終わりによくいかせていただきました。「のみの場所」と言えば、ミツ星です。
2019年比較文化学科卒

ご寄稿いただいた北條様(2021年卒)、石澤様(2022年卒)からも思い出のお店として挙げられました。

12 マハラジャ

お店に行くことも多かったが、ナンロールが大学で売られていてよく食べた記憶があります。けっこうおなかいっぱいになりました。
2019年英文学科卒

13 オギノ

アルバイトでレジ打ちを2年しました。友人がわざわざ私のレジに並んでくれることがうれしかったです。
2021年比較文化学科卒(北條様)

14 らくしょう

吹奏楽部メンバーのよく行く店。

15 MARY'S

お昼休みにランチに行き、友人とデザートを注文。小さなパンケーキを想像していたのですが、思いのほか大きくて、3限開始に間に合わない!と自分至上最速のスピードで食べました。おいしかったです。
2022年英文学科卒

16 カラオケ TENT

学生時代、カラオケばかり行ってました。受付すると、ウエスタンな服装の店員さんがピストルを鳴らすのが特徴的でした。
2014年国文学科卒

17 Bisweet

18 コートドール

^{おおかど} 恩師大門正克先生がお昼を食べのがしたとき、決まって買いに行くのは焼きそばパンでした。
1999年比較文化学科卒

19-1 あやの

ゼミ呑みの定番。オリジナルでお酒作ってもらいました。
2018年国文学科卒

サークルの飲み会などでたくさんお世話になりました。どの席も文大生、アルバイトも文大生でした。
2021年比較文化学科卒(北條様)

つる子どもまつり事務局・吹奏楽部メンバーがよく行く店。

19-2 村さ来

19-3 ツイステッドホイール

19-4 手打ちうどん 石井

ご寄稿いただいた前迫様(2010年卒)、猿渡様(2021年卒)、北條様(2021年卒)から思い出のお店として挙げられました「通い詰めていました」「3限がない日は並んで食べました。」

陸上競技部・吹奏楽部メンバーのよく行く店。

20 飲食店〈名前不明〉

昭和62年~平成元年くらい2年ほどしか営業していなかった、ハンバーガーお好み焼き付きの店。
1992年社会学科卒

21 都留どうぶつ病院

4年間バイトさせていただき、大変お世話になりました。教員ともう一つの夢であった獣医のお仕事に関わらせていただき、勉強になり、幸せでした!
2021年国際教育学科卒(猿渡様)

22 川藤

先日、十数年ぶりに川藤に行って唐揚げ定食を食べました。あー、こんな味だったなあ。美味しく、懐かしくいただいた一方、こんなに量多かったっけ?と自分の老いと川藤のお得さを感じました。
2012年社会学科卒

児童文化研究会メンバーのよく行く店。

23 文化飯店

部活のあとみんなでよく行ったお店。文化飯店さんのラーメン定食、文化ランチ、練習後の空腹もすぐに満たされました。

1995年英文学科卒

24 バンカム

ドリアとコーヒーが忘れられません。大切な思い出です!!

1995年英文学科卒

世界一おいしいコーヒーです!カウンターに何時間も居座ってマスターのお話を聞くのが好きでした。ミックスドリアとスペシャルチョコレートケーキが思い出の味です。

2005年国文学科卒

おいしいコーヒー、濃厚なチョコレートケーキ…深夜までお芝居の打ちあわせでお世話になりました。

2000年比較文化卒

ご寄稿いただいた高野様(1992年卒)、羽野様(2006年卒)、北條様(2021年卒)からも思い出のお店として挙げられました。

25 ラーメン福多

とてもやさしい店長だった。「都留を忘れても友達を忘れるな!!」そのお言葉、今も守ってますよ!!また会いたいです…

1986年英文学科卒

26-1 あづま

コンパは「あづま」か「吉広」でした。

1986年国文学科卒

体育会の追いコンのメッカ。先輩方を送るたびに自分の学生生活をカウントダウンしました。

1986年英文学科卒

26-2 輩**27 たぬき**

ご寄稿いただいた奥脇様(1990年卒)、羽野様(2006年卒)思い出のお店。

28 黒部荘

まさに同じ釜の飯を食べた友人達、先輩のみな様、お元気にお過ごしでしょうか…?

1986年英文学科卒

29 環七ラーメン

いつ行っても売り切れていた環七井。ラーメンの他に色々出してくれた。(シベリアとか)

2004年比較文化学科卒

パチンコに負けると22時開店するポップな店。ラーメン500円、トライアングル1500円の明朗会計。

1999年比較文化学科卒

トウフに、紅しょうがとラー油。

1999年社会学科卒

30 マルシンストアー

バイトしてました。職員割引で買ったのしました。パンのみみタグでもらいました。

1992年初等教育学科卒

岡パよりマルシン派でした。

2006年社会学科卒(羽野様)

31 モスバーガー都留文大前店

ご寄稿いただいた前迫様(2010年卒)、岩本様(2023年卒)の思い出(アルバイト先)のお店。

32 かっちゃんうどん

初めて食べた吉田のうどんに圧倒された。いつもつけ山菜(大)を食べてました。6日連続で食べて、7日目はお店が休みだった。

2004年比較文化学科卒

33 地球屋K

からあげばかり食べてた。チリソースがめっちゃうまい。

2014年英文学科卒

34 両国

いつもわんちゃんがありました。わりばしで当たりが出たら割引!店主さんのキャラが好きでした。

2012年社会学科卒

35 雅龍

桂川祭実行委員会・女子バレーボール部・陸上競技部メンバーがよく行く店。

36 むささび荘

佐伯橋のたもつで月3,000円という伝説がありました。

1992年社会学科卒

37 堀口アパート第1/第2

大家さんがガソリンスタンドに灯油を毎回買いに行ってた!

38 サンライフ荻原

野犬がたくさんいた時期で、夜帰り道、アパートまであと50mの所で野犬の群れと遭遇。おもいっきり「ワン」とほえておい払った。

2004年比較文化学科卒

39 サニーハイツ**40 蔵の下宿「桂荘」**

テレビで文大生の生活シーンで紹介され、世を驚かせた伝説の下宿。

1991年社会学科卒

41 十日市場駅

春のおだやかな陽だまりの中、電車がくるのを待ちながらホトトギスの鳴き声を聞くのが大好きでした。

1986年英文学科卒

42 やまびこ競技場

陸上部に所属していたため通いました。坂道を自転車で上るのが辛かった思い出もあります…。

2021年国際教育学科卒(猿渡様)

ワンダーフォーゲル部メンバーのよく行く場所。

十日市場

生まれて初めてホテルを見ました。

2006年社会学科卒(羽野様)

都留市駅～ 谷村町駅

1 cafe Naturalrythm

アルバイト終わりの深夜に仲間と夢を語り合ったなあ。コーヒーとなどの菓子がうまかった。 2014年英文学科卒

ご寄稿いただいた伊藤様(2019年卒)からも思い出のお店として挙げられました。

2 スーパーうすい

アルバイトしてました！LINE、コード決済などハイテクな創業70年？のお店(第1・3日曜休み 多分)。

2024年学校教育卒



3-1 谷村映画劇場(若松館)

3-2 大手映画劇場

インタビューを受けてくださった淡野様と濱欠様(1965年卒)思い出の場所。(映画館)

4 麗峰荘

映研の撮影をした。「すげえな、昔の下宿は」とおどろいた記憶あります。
1990年卒

5 魚藤

淡野様(1965年卒)のお店。

6 松鶴

下宿でトランプの大貧民(今は大富豪)をして負けた人は松鶴で餃子を買ってくる、というゲームもしました。
1986年初等教育学科卒

7 ニコラス

8 山本書店

編集部会員寺門名誉教授(1984年卒)の思い出のお店。

9 桂川祭での仮装パレード
(谷村第一小グラウンド)

各県人会が工夫を凝らし、長崎の蛇踊り、鹿児島西郷隆盛と薩摩兵、沖縄の民族舞踊、四国地区のよさこい阿波踊り、山形の花笠音頭、福井のイッショライ節踊り、東京音頭など、全国から集う都留大らしいものだった。
1967年英文学科卒(早川様)

10 都留市役所

「車で行けない都留マップ」の助成金をいただきました。
1999年社会学科卒

11 吉広

市民会館で定期演奏会(合唱団)をしたあと、また新歓、卒コン、などでお世話になりました。何人も泊まる人がいました…。
1986年初等教育学科卒

吹奏楽部メンバーのよく行く店。

12 文化会館(YLO会館)

部室が使えないとき、市役所に申請して、文化会館の1室を使いました。
2019年社会学科卒

13 焼き鳥 キング

居酒屋ではなくラーメン屋かな?谷村町駅のま前にありました。合唱団のたまり場で2階のお座敷で大勢で集まり飲んで、歌っていました。
1986年英文学科卒

体育の野球でチーム初勝利で行きました。
1999年初等教育学科卒

先輩に連れていってもらった思い出の場所です。
2006年社会学科卒(羽野様)

14 スナックニュー ^{うか} 雨花

昭58.4~昭62.3の4年間アルバイトをしていました。谷村駅前不動さんの隣です。坂場千代子ママは今も現役です。
1987年初等教育学科卒

15 城見屋

夕食をいつも食べに行っていました。サラダと、肉と、カレーなどにみそ汁とどんぶりご飯。おばちゃんが名前も覚えてくれていて、母のようでした。お屋も。
1976年初等教育卒

16 梅の湯

大学1年のころ、下宿の仲間と通ってました。夏は番台のおばちゃんが「おにちゃん背中に天花粉(ベビーパウダー)ぬってやる」と言って、よくパタパタしていただきました。冬は髪を洗ったあと、下宿に着くと息で耳の横の髪が真っ白に凍ってました。
1976年初等教育学科卒

17 つる小屋

ご寄稿いただいた羽野様(2006年卒)の思い出の場所。

18 松花軒

19 大和

ビールを注文したときに出てきたきゅうりのピリ辛が忘れられません。ラーメンもおいしかったです。
1999年国文学科卒

20 下宿先(甲斐絹八反織をされていた鈴木さん宅)

部屋は4畳で隣も文大生(国文)だった。お祖母様がおやつ時間に「お新香食べに来な」と声をかけてくださった。
1967年英文学科卒(早川様)

21 焼肉センター 杏林軒

学生でも気軽に行ける格安焼肉。味噌汁はインスタントでした。
2004年社会学科卒

22 ひさご

大学時代バイトをしていました。定食や鍋焼きうどんがおいしかったです。まかないがと〜っても楽しみでした!!
1995年初等教育学科卒

23 ボーリング場横の山小屋(居酒屋)

ボーリング場の社長が思いつきのよう始めたお店。
1990年社会学科卒

24 またぎや

吹奏楽部メンバーのよく行く店。

25 LUMBER ROOM COFFEE

大学時代入り浸ってました♡居心地が最高で今でも忘れられません。大切な思い出の場所です!
2022年学校教育学科卒

26 PIPS

パスタ食べに行くならピップス!種類が多くて毎回悩んだ。ケーキも美味しかった。
2014年比較文化学科卒

27 トレゾール

サークルの飲み会など、パスタがめで2種類でくる!
2012年国文学科卒

大学が施設されたあと、遅くまで、開いているお店でした。裏メニューのカレーが美味!!(旧)あさひ食堂の場所に昔はあった。
2004年社会学科卒

28 ラーメンガキ大将 都留店

飲み会の後のシメでよく利用させてもらいました。(今も!!)
2010年社会学科卒

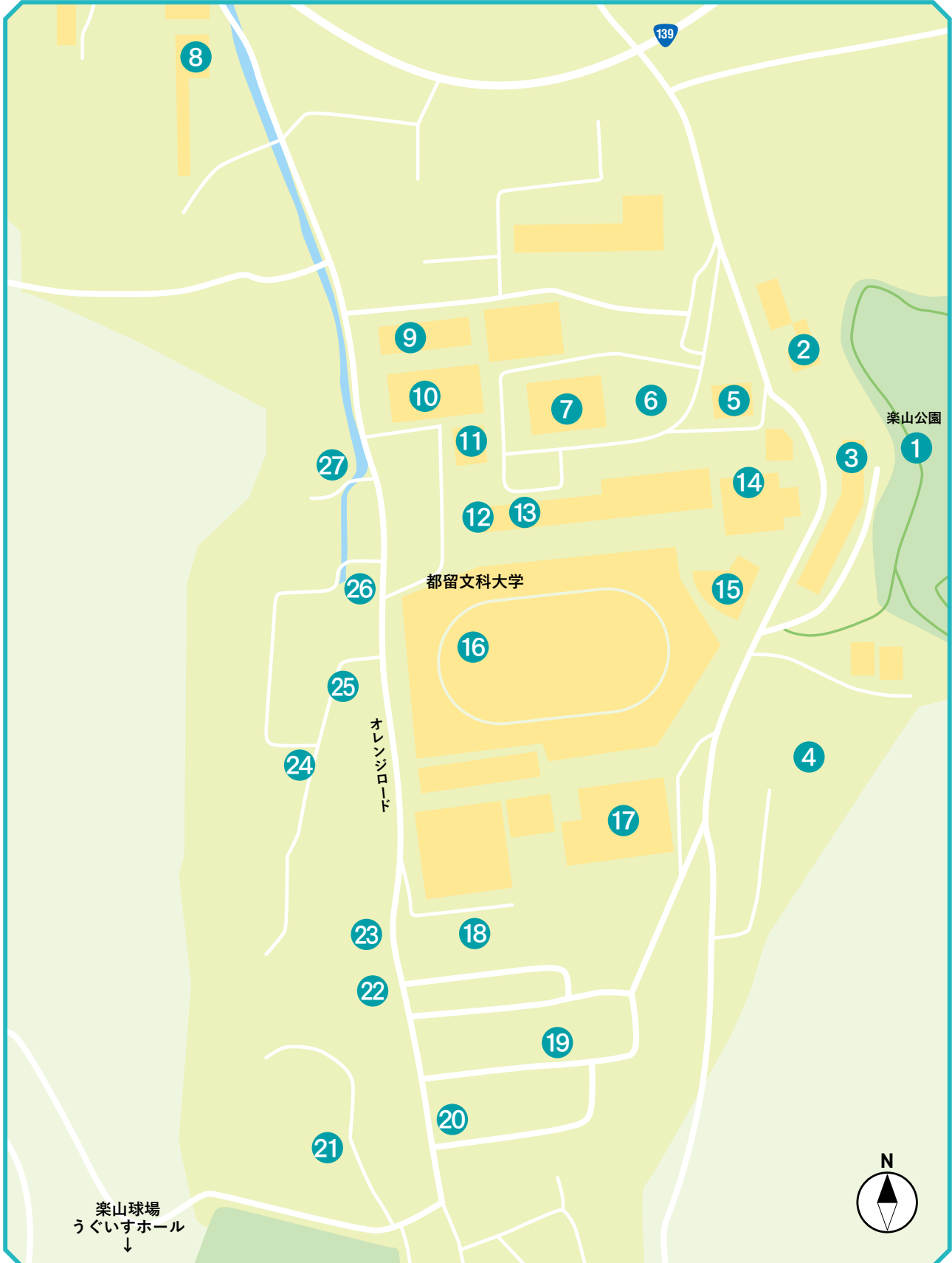
29 セピア・フジ

ご寄稿いただいた奥脇様(1990年卒)の思い出の場所。

30 城山(勝山城跡)

入学後すぐにクラスの顔合わせで登った。
1967年英文学科卒(早川様)

都留文科大学構内・大学付近



1 楽山公園

空手部の新歓コンパでビールケースを持って上りました。帰りは空になったびんは軽かったもののよっぱらっていてケースは重かった。

1986年英文学科卒

授業や友人と話したりするときによく行っていました。一番上まで登れば都留市内が一望できる絶景スポット。

2023年地域社会学科卒(岩本様)

ワンダーフォーゲル部メンバーのよく行く場所。

2 自然科学棟

ゼミ室もあり、よく行った。いろんな思い出があります。

2020年初等教育学科卒

ゼミ室がありました。講義室の冷凍庫に保管されているモグラで剥製づくりの練習をしました。

2006年社会学科卒(羽野様)

3 美術研究棟

毎日通っていた、というより棲んでいた。

2005年初等教育学科卒(正代様)

4 ムササビの森

ムササビを観察して初めて滑空を見ました。

2006年社会学科卒(羽野様)

5 コミュニケーションホール

よく学内講演会の打ち上げに使った。今日(ホームカミングデー)伺って厨房の店長さんが変わっていなかったのが嬉しい!

1999年比較文化学科卒

合奏でお世話になりました。

2006年社会学科卒(羽野様)

演劇同好会で、2Fのシアターで何度も公演させていただきました。照明も音響もコンパクトに揃っていて本当に助かりました。Thanks!

卒業年・学科不明

6 本部棟前広場/**3号館の下/4号館の前**

春になると学内の至るところで新歓コンパやお花見が行われていました。新学期の風物詩で、お花見が楽しかったです。また、友人が企画したもちつき会に参加しました。紅白幕をはって、杵とうすでお餅をついてふるまった記憶です。

2006年社会学科卒(羽野様)

ワンダーフォーゲル部メンバーのよくいる場所。

7-1 学生サポート室(本部棟)

色んなことに悩んだ時や、何もない時でもよく通っていました。当時いらっしやった、西野先生、羽田先生、箭本先生にはとても支えていただきました。

2023年地域社会学科卒(岩本様)

7-2 学食

カレーが安くてうまくてボリュームあって最高だった。

1986年英文学科卒

学食の朝定食は、ごはん・生卵・納豆・味噌汁・冷奴で、180円(確か)という破格でお腹を満たしてくれました。おばちゃんも親切でほっとできる空間でした!

1995年英文学科卒

色付きプラスチックの楕円形の食券。A定はお肉系、B定はフライ系が多かった。

1993年国文学科卒

8 音楽研究棟

部活で練習室は毎日のように、演奏会ではホールにお世話になりました。

2006年社会学科卒(羽野様)

9 5号館

完成したばかりのピカピカの建物で多くの時間を過ごしました。授業以外の時間も課題をしたり、友達と話をしに行った思い出があります。いつでも先生や友達がいる、落ちつく居場所でした。

2021年国際教育学科卒

いわずもがな、国際教育学科の学生と濃い時間を過ごした場所。行けば誰かいて、一緒に課題や雑談をしていました。

2021年国際教育学科卒(猿渡様)

10 図書館

卒業論文の執筆や公務員試験の勉強でお世話になりました。特に卒業論文執筆時は、朝早く行き、コンセントのある場所を確保するために必死だったのがいい思い出です。

2023年地域社会学科卒(岩本様)

11-1 学生ホール

桂川祭実行委員会に所属していたため、特に文化祭前は遅くまで友人と準備に追われていました。責任をもって安全に運営管理をする能力が身に着いた時間でした。

2021年国際教育学科卒(猿渡様)

BBQを楽しみました。(学生ホール横)

2006年社会学科卒(羽野様)

11-2 体育会室

体育会メンバーのよくいる場所。

12 アトリエ

ご寄稿いただいた羽野様(2006年卒)思い出の場所。

13 1号館

部活で毎日のようにお世話になった場所。

2006年社会学科卒(羽野様)

14 キャリア支援センター(4号館)

公務員試験の相談でよく通っていました。公務員担当の梅澤先生、谷内先生には、たくさん励ましていただき、今の自分を作ってくれた大切な場所です。

2023年地域社会学科卒(岩本様)

15 2号館

社会学科といえばここ。6階の廊下と壁がピンク色だったことが衝撃でした。

2006年社会学科卒(羽野様)

16-1 運動場

前期の試験が終わった後に友人たちと花火を楽しみました。

2006年社会学科卒(羽野様)

16-2 グラウンドのベンチ

悩んだ時や疲れた時によく一人で座っていました。時には写真を撮ったりして、自分の気持ちを落ち着かせていました。

2023年地域社会学科卒(岩本様)

17 体育館

体育館の上の方にカップ麺などの自販機があった。

1993年国文学科卒

18 希望ヶ丘荘

ご寄稿いただいた永富様(2008年卒)の思い出の場所。

19 昭島コーポ**20 アセントコートオサノ****21 弓道場**

ご寄稿いただいた石澤様(2022年卒)の思い出の場所。

22 白百合荘(しらゆりハイツ)

23 ツルビューハイツ

24 永和荘

教室から干した布団が見えました。
1989年国文学科卒(西様)

25 楽山自治会館

サークルの会合で度々お世話になりました。夏にはスイカ割りなどをして盛り上がりました。
2012年社会学科卒

26 パナハイツ井上

27 セントパル望月

うぐいすホール

星が見たくなった時によく行っていました。都留は星がきれいですが、ここから見る星が一番きれいでした。(肉眼で見たい)
2023年地域社会学科卒(岩本様)

合唱部・吹奏楽部メンバーのよく行く場所。

ご寄稿いただいた羽野様(2006年卒)、猿渡様(2021年卒)、北條様(2021年卒)からも思い出の場所として挙げられました。

楽山球場

準硬式野球部メンバーのよく行く場所

共同下宿

家賃4万円のアパートができた、と話題になったところです。でも、まだ共同下宿があって、電話当番とか、トイレそうじ当番とかありました。
1997年国文学科卒

オレンジロード

「A地区」に住んでいました。「オレロ」を通るたびに友人と顔を合わせました。
2021年比較文化学科卒(北條様)

その他の場所

はむ屋FOODS(井倉)

ご寄稿いただいた伊藤様(2019年卒)の思い出の場所。

うすいスタジオ

いろいろ練習でお邪魔しました。
1999年社会学科卒

スターらんど(下谷)

ご寄稿いただいた前迫様(2010年卒)の思い出(アルバイト先)のお店。

味平(法能)

車がないと行けないトンネル先のおいしい店。
卒業年・学科不明

ファッションセンターしまむら(夏狩)

全部ここで買ってました。
2018年国文学科卒

東桂中学校(桂町)

SATで2年間お世話になっていました。毎回徒歩で行っていたため田原の滝の風景を楽しんでいました。生徒さんと一緒に絵を描き合い、即興で物語を創ったことが思い出です。
2014年初等教育学科卒

ユナイト(スーパー)+アパート(下谷)

昭和63年～平成3年頃、某不動産にだまされてユナイトの3Fに住みました。大学まで徒歩1時間…。
1992年社会学科卒

富士ビューホテル(河口湖)

ご寄稿いただいた安藤様(1973年卒)の思い出(アルバイト先)の場所

Q-STATION(富士吉田)

入学から院修了までの6年間、おもちゃ売り場でアルバイトをしていました。ベイブレードやポケモンカードなどのおもちゃのイベントをしたり、吉田の火祭りに出店したり…たくさんの思い出があります。
2014年初等教育学科卒

ミュージアム都留での展示

地域の中の大学

— 都留文科大学の歴史とこれから —

令和7年11月8日(土)から令和8年2月1日(日)までの69日間、ミュージアム都留の第2展示室において本学の歴史を振り返る企画展『地域の中の大学—都留文科大学の歴史とこれから—』が開催され、開催期間中に1,254人の地元の方々を含め多くの方にご覧いただきました。

また、エントランスホール展として、12月6日(土)から『「山梨の生活史」と俳優・品川隆二』も併せて開催されました。この展示は、本学比較文化学科の山本芳美教授が研究活動の中で偶然、都留市宝地域出身の俳優 品川隆二氏に巡り合い、地域資源活用成果として、紹介することができました。

そのほか、関連イベントとして、山本芳美教授による「山梨の生活史と品川隆二」と題した市民公開講座が開催され、42名に参加いただきました。また、1月25日(日)に本学の卒業生でもある寺門日出男名誉教授による講演会「都留市民と大学」を開催し、30名の方にお越しいただきました。

地域の中の大学

— 都留文科大学の歴史とこれから —

2025.11.8 (土) - 2026.2.1 (日)

開館時間 9:00-16:30
入館料：無料 / 休館日：月曜日（祝日の場合その翌日）・第3火曜日

MST ミュージアム都留
主催：都留市・都留市教育委員会/山梨大学法人 都留文科大学

地域の中の大学

『山梨の生活史』と俳優・品川隆二

開催期間：2025.11.8-2026.2.1

開催場所：ミュージアム都留 第2展示室

開館時間：9:00-16:30

入館料：無料

休館日：月曜日（祝日の場合その翌日）・第3火曜日

アクセス：〒370-0192 山梨県都留市都留1-1-1

「山梨の生活史」と俳優・品川隆二

2025.12.6 (土) - 2026.2.1 (日)

ミュージアム都留の企画展『地域の中の大学—都留文科大学の歴史とこれから—』

都留市民と大学

2026.1.25 (日) 13:30~15:00

会場：ミュージアム都留 研修室

定員：30名（事前予約制）
参加費：無料
問合せ先：0554-45-8008
MAIL: tsuhaku@city.tsuru.lg.jp

講師 寺門日出男 先生
都留文科大学名誉教授（漢文字）

展示の様子





都留文科大学と ミュージアム都留 — 都留市と大学の 歴史を踏まえて —

ミュージアム都留 館長 高部 剛



都留文科大学が創立70周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。また、この記念すべき年に当館において、企画展「地域の中の大学—都留文科大学の歴史とこれから—」を開催できたことを光栄に存じます。

さて、当館と大学との関係は、平成7年7月に発足した(仮称)都留市郷土資料館構想検討委員会に、当時社会学科教授であった松本四郎先生を委員としてお迎えしたことに始まります。当時、本市では八朔祭をはじめとする歴史文化を保存・継承し、広く発信することを目的に「郷土博物館」建設の機運が高まり、構想検討委員会が設置されました。その協

議をもとに(仮称)都留市郷土博物館開設準備委員会が立ち上げられ、展示計画等が策定されました。そして平成11年4月28日に当館は開館し、以来、約四半世紀にわたり博物館としての歴史を積み重ねてまいりました。

開館以降、当館の諮問機関である都留市博物館協議会の会長には大学の歴代学長にご就任いただき、博物館運営に対する助言や方向性をご示唆いただいております。また、開館以来、大学の博物館学芸員資格取得のための実習先として毎年多くの学生を受け入れており、当館職員にも大学卒業生がおります。こうした関係から、大学と当館のつながりは年々強

まっていると実感しております。

今回の企画展では、創立70周年を祝い、大学設置者である「都留市」の視点から「地域の中の大学」をテーマとした展示を行いました。構成は、第1章を「大学のこれまで」、第2章を「大学のこれから」とし、「過去」「現在」、そして「未来」へ羽ばたく大学の姿を来館者の皆様に想像していただくことを意図しました。資料調査を進める中で、本市と大学の関係がいかに緊密で、絶妙なバランスの上に成り立っているかを改めて認識するとともに、市民と教員・学生との密接な交流が長年にわたり続いていることを再確認することができました。さらに、大学の発展が当館のみならず本市の発展と深く結びついていることも明らかになりました。

本市と大学の歴史を紐解くと、その誕生はほぼ同時期であり、いわば「分身」のような存在とも言えます。終戦から9年、社会の混乱が残る昭和29年4月29日に1町4カ村が合併して「都留市」が誕生しました。その翌年には都留市立都留短期大学が開学し、5年後には四年制の都留文科大学としてさらなる飛躍を遂げました。市民の多くが「学」よりも「食」を求めざるを得なかった厳しい時代に、「文教都市」という理想を掲げた首長と、それを支えた市民は、どのような思いを抱き、この事業を推進したのでしょうか。今日の大学の姿を、もしかするとすでに思い描いていたのかもしれません。

当時の大学は、教員の献身的な努力に支えられ、手作りの温かさに満ちた運営がなされていました。財政問題や入試制度等に精通した教員も現れ、研究者でありながら多様な業務を器用にこなす姿には深い敬意を表します。また、若い教員が多かったこともあり、学生への丁寧な対応に努め、卒業後もその絆を大切にする教員が多かったことが、大学の将来につながったのではないのでしょうか。

本市ならではの光景として、多くの若者が街を闊歩する姿が挙げられます。学生とアパートの大家との距離が近いのも特徴で、その関係が卒業後も続く

例も多いと聞いています。また、学生はアルバイトを通して社会とのつながりを得て、さまざまな経験を積む中で市民との親交を深め、卒業後も良好な関係を維持している者もいます。

市民にとって「文大生」は身近でありながら、どこか敷居の高い存在でもあります。近くて遠い「大学」として親しまれる一方、市民が学生を大切にす姿勢は一時的な「風潮」ではなく、長年培われてきた「風土」であり、その根底には「共に大学を育ててきた」という思いがあるのかもしれません。

少子・高齢化が進み、大学を取り巻く環境が大きく変化する中、大学では国際バカロレアを導入した国際教育学科の増設や、文学部に加え教養学部を新設するなど、柔軟性を高める取り組みを進めています。これからの10年で18歳人口は大幅に減少し、大学は開設以来最大の危機を迎えるとも言われています。次の80周年に向け、「市」(設立団体)と「大学」(法人)が叡智を結集し、さらなる発展を遂げていくことを願ってやみません。

最後に、本市初代市長・故小林治郎氏が抱負として語った言葉を紹介し、本稿を締めくくります。

「静かな中間都市としての特徴を生かし、学芸中心の文化度の高い住宅都市としたい。」



博物館実習生による展示準備



地域交流研究センターとコラボした展示の図録

VII. 資料編

公立大学法人都留文科大学 定款

(平成19年9月28日議決)

改正 平成20年12月19日議決 平成24年9月28日議決 平成30年3月23日議決
令和3年3月23日議決 令和4年6月17日議決 令和6年12月20日議決

目次

第1章	総則(第1条－第7条)
第2章	組織
第1節	役員(第8条－第13条)
第2節	理事会(第14条－第17条)
第3章	審議機関
第1節	経営審議会(第18条－第22条)
第2節	教育研究審議会(第23条－第27条)
第4章	業務の範囲及びその執行(第28条・第29条)
第5章	資本金等(第30条・第31条)
第6章	委任(第32条)
附則	

第1章 総則

(目的)

第1条 この公立大学法人は、自主的・自律的な大学運営を基盤として、豊かな人間性と幅広い知識及び高い専門性を有する人材を育成するとともに、優れた研究を発信することにより、地域社会はもとより、我が国の高等教育及び学術研究の向上に寄与することを旨とする大学を設置し、及び管理することを目的とする。

(名称)

第2条 この公立大学法人の名称は、公立大学法人都留文科大学(以下「法人」という。)とする。

(大学の設置)

第3条 法人は、第1条の目的を達成するため、都留文科大学(以下「大学」という。)を都留市に設置する。

(設立団体)

第4条 法人の設立団体は、都留市とする。

(事務所の所在地)

第5条 法人は、事務所を都留市田原三丁目8番1号に置く。

(法人の種別)

第6条 法人は、特定地方独立行政法人以外の地方独立行政法人とする。

(公告)

第7条 法人の公告は、都留市役所前掲示場及び法人の事務所の掲示場に掲示して行う。

第2章 組織

第1節 役員

(定数)

第8条 法人に、役員として、理事長1人、副理事長1人、理事5人以内及び監事2人を置く。

(職務及び権限)

第9条 理事長は、法人を代表し、その業務を総理する。

2 理事長は、第17条各号に掲げる事項について決定しようとするときは、第14条第1項に規定する理事会の議を経るものとする。

3 副理事長は、法人を代表し、理事長の定めるところにより、理事長を補佐して法人の業務を掌理する。

4 副理事長は、理事長に事故があるときはその職務を代理し、理事長が欠けたときはその職務を行う。

5 理事は、理事長の定めるところにより、理事長及び副理事長を補佐して法人の業務を掌理する。

6 理事は、理事長があらかじめ定めた順序

により、理事長及び副理事長に事故があるときはその職務を代理し、理事長及び副理事長が欠けたときはその職務を行う。

- 7 監事は、法人の業務を監査する。この場合において、監事は、都留市長(以下「市長」という。)が規則で定めるところにより、監査報告書を作成しなければならない。
- 8 監事は、いつでも、役員(監事を除く。)及び職員に対して事務及び事業の報告を求め、又は法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。
- 9 監事は、法人が次に掲げる書類を市長に提出しようとするときは、当該書類を調査しなければならない。

(1)地方独立行政法人法(平成15年法律第118号。以下「法」という。)の規定による認可、承認及び届出に係る書類並びに報告書その他の総務省令で定める書類

(2)その他市長が規則で定める書類

- 10 監事は、監査の結果に基づき、必要があると認めるときは、理事長又は市長に意見を提出することができる。

(理事長の任命)

第10条 理事長は、市長が任命する。

(学長の任命)

第11条 大学の学長(以下「学長」という。)は、理事長とは別に任命するものとする。

- 2 学長の選考を行うため、学長選考会議(以下「選考会議」という。)を置く。
- 3 学長は、選考会議の選考に基づき、理事長が任命する。
- 4 前項の規定により任命された学長は、副理事長となるものとする。
- 5 選考会議は、次に掲げる者をもって構成する。

(1)第18条第2項の経営審議会を構成する者(副理事長を除く。)の中から当該経営審議会において選出された者 3人

(2)第23条第2項の教育研究審議会を構成

する者(学長を除く。)の中から当該教育研究審議会において選出された者 3人

- 6 選考会議に議長を置き、委員の互選によってこれを定める。
- 7 議長は、選考会議を主宰する。

(理事及び監事の任命)

第12条 理事は、理事長が任命する。

- 2 監事は、市長が任命する。
- 3 理事長は、理事を任命するに当たっては、その任命の際現に法人の役員又は職員でない者が含まれるようにしなければならない。

(役員任期)

第13条 理事長の任期は、4年とし、再任されることのできる。ただし、再任された場合の任期は2年とし、引き続き6年を超えることはできない。

- 2 副理事長の任期は、法人の規程により定められる学長の任期によるものとする。
- 3 理事の任期は、2年とし、再任されることのできる。ただし、理事の任期の末日は、当該理事を任命する理事長の任期の末日を超えることはできない。
- 4 前項ただし書の規定にかかわらず、理事長が欠員となった場合理事の任期は、後任の理事長が就任する日の前日までの間とする。
- 5 監事の任期は、その任命後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものについての法第34条第1項に規定する財務諸表承認日までとし、再任を妨げない。
- 6 役員が欠けた場合における補欠の役員(副理事長を除く。)の任期は、前任者の残任期間とする。
- 7 理事が再任される場合において、当該理事がその最初の任命の際現に法人の役員又は職員でなかった場合の第12条第3項の規定の適用については、その再任の際現に法人の役員又は職員でない者とみなす。

第2節 理事会

(設置及び構成)

第14条 法人の運営に関する重要事項を審議するため、法人に理事会を置く。

- 2 理事会は、理事長、副理事長及び理事をもって構成する。

(招集)

第15条 理事会は、理事長が招集する。

- 2 理事長は、理事会の構成員(理事長を除く。)の3分の1以上又は監事が会議の目的たる事項を記載した書面を理事長に提出して理事会の招集を請求したときは、理事会を招集しなければならない。

(議事)

第16条 理事会に議長を置き、理事長をもって充てる。

- 2 議長は、理事会を主宰する。
- 3 理事会は、理事会の構成員の過半数が出席しなければ開くことができない。
- 4 理事会の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 5 監事は、必要があると認めるときは、理事会に出席し、意見を述べることができる。

(理事会の議を必要とする事項)

第17条 次に掲げる事項は、理事会の議を経なければならない。

- (1) 中期目標について市長に述べる意見(法人が法第78条第3項の規定する意見をいう。以下同じ。)及び年度計画(法第27条第1項の規定する年度計画をいう。以下同じ。)に関する事項
- (2) 法により市長の認可又は承認を受けなければならない事項
- (3) 予算の作成及び執行並びに決算に関する事項
- (4) 大学、学部、学科その他の重要な組織の設置又は廃止に関する事項
- (5) 職員の人事及び評価に関する事項
- (6) その他理事会が定める重要事項

第3章 審議機関

第1節 経営審議会

(設置及び構成)

第18条 法人の経営に関する重要事項を審議するため、経営審議会を置く。

- 2 経営審議会は、次に掲げる委員(以下この節において「委員」という。)で構成する。

- (1) 理事長
- (2) 副理事長
- (3) 理事長が指名する理事
- (4) 法人の役員又は職員以外の者で大学に関し広くかつ高い識見を有するものうちから、理事長が委嘱する者
- (5) 理事長が指名する職員

(委員の任期)

第19条 委員の任期は、2年とする。ただし、前条第2項第1号から第3号までに掲げる委員の任期は、当該職にある期間とする。

- 2 補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 委員は、再任されることができる。ただし、前条第2項第4号に掲げる委員の任期は、引き続き4年を超えることはできない。

(招集)

第20条 経営審議会は、理事長が招集する。

- 2 理事長は、委員(理事長を除く。)の3分の1以上から会議の目的たる事項を記載した書面を付して会議の招集の請求があったときは、経営審議会を招集しなければならない。

(議事)

第21条 経営審議会の会議(以下この条において「会議」という。)に議長を置き、理事長をもって充てる。

- 2 議長は、会議を主宰する。
- 3 会議は、委員の過半数が出席しなければ、開くことができない。
- 4 会議の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(審議事項)

第22条 経営審議会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 中期目標について市長に述べる意見及び年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関する事項
- (2) 法により市長の認可又は承認を受けなければならない事項のうち、法人の経営に関する事項
- (3) 重要な規程の制定及び改廃に関する事項のうち、法人の経営に関する事項
- (4) 予算の作成及び執行並びに決算に関する事項
- (5) 大学、学部、学科その他の重要な組織の設置又は廃止に関する事項
- (6) 職員の人事及び評価の方針に関する事項
- (7) 組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価に関する事項
- (8) その他法人の経営に関する重要事項

- 2 経営審議会は、前項各号の審議にあつては、大学における教育研究の特性に常に配慮するものとする。

第2節 教育研究審議会

(設置及び構成)

第23条 大学の教育研究に関する重要事項を審議するため、教育研究審議会を置く。

- 2 教育研究審議会は、次に掲げる委員(以下この節において「委員」という。)で構成する。

- (1) 学長
- (2) 学長が指名する理事
- (3) 法人の規程で定める教育研究上重要な組織の長
- (4) 学長が指名する職員

(委員の任期)

第24条 委員の任期は、2年とする。ただし、前条第2項第1号から第3号までに掲げる委員の任期は、当該職にある期間とする。

- 2 補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

- 3 委員は、再任されることができる。

(招集)

第25条 教育研究審議会は、学長が招集する。

- 2 学長は、委員(学長を除く。)の3分の1以上から会議の目的たる事項を記載した書面を付して会議の招集の請求があったときは、教育研究審議会を招集しなければならない。

(議事)

第26条 教育研究審議会の会議(以下この条において「会議」という。)に議長を置き、学長をもって充てる。

- 2 議長は、会議を主宰する。
- 3 会議は、委員の過半数が出席しなければ、開くことができない。
- 4 会議の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(審議事項)

第27条 教育研究審議会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 中期目標について市長に述べる意見及び年度計画に関する事項のうち、教育研究に関する事項
- (2) 法により市長の認可又は承認を受けなければならない事項のうち、教育研究に関する事項
- (3) 重要な規程の制定及び改廃に関する事項のうち、教育研究に関する事項
- (4) 教育課程の編成に関する事項
- (5) 学生の円滑な修学、進路選択等に必要な助言、指導その他の支援に関する事項
- (6) 学生の入学、卒業又は課程の修了その他学生の在籍に関する方針及び学位に係る方針に関する事項
- (7) 教員の人事及び評価に関する事項(第22条第1項第6号に係るものを除く。)
- (8) 教育及び研究の状況について自ら行う点検及び評価に関する事項
- (9) その他大学の教育研究に関する重要事項

第4章 業務の範囲及びその執行

(業務の範囲)

第28条 法人は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 大学を設置し、これを運営すること。
- (2) 学生に対し、修学、進路選択及び心身の健康等に関する相談その他の援助を行うこと。
- (3) 法人以外の者からの委託を受け、又はこれと共同して行う研究の実施その他の法人以外の者との連携による教育研究活動を行うこと。
- (4) 公開講座の開設その他の学生以外の者に対する学習の機会を提供すること。
- (5) 大学における教育研究成果を普及し、その活用を促進すること。
- (6) 前各号の業務に附帯する業務を行うこと。

(業務方法書)

第29条 法人の業務の執行に関し必要な事項は、この定款に定めるもののほか、業務方法書の定めるところによる。

第5章 資本金等

(資本金)

第30条 法人の資本金の額は、都留市が出資する別表に掲げる資産について、出資の日現在における時価を基準として、学識経験者の意見を聴いて都留市が評価した価額の合計額とする。

(解散に伴う残余財産の帰属)

第31条 法人が解散した場合において、その債務を弁済してなお残余財産があるときは、これを都留市に帰属させる。

第6章 委任

(委任)

第32条 法人の運営に関して必要な事項は、この定款及び業務方法書に定めるもののほか、理事長が定める。

附 則

(施行期日)

1 この定款は、法人の成立の日から施行する。

(学長の任命に関する特例)

- 2 大学の設置後最初の学長の任命は、第11条第3項の規定にかかわらず、選考会議の選考に基づくことを要しないものとし、理事長が行う。
- 3 前項の規定により任命された学長は、副理事長となるものとする。
- 4 前項に規定する副理事長の任期は、第13条第2項の規定にかかわらず、3年とする。

附 則(平成20年12月19日議決)

変更後の定款は、法人の成立の日から施行する。

附 則(平成24年9月28日議決)

変更後の定款は、山梨県知事の認可を受けた日から施行する。

附 則(平成30年3月23日議決)

(施行期日)

1 この定款は、平成30年4月1日から施行する。

(経過措置)

- 2 この定款の施行の際現に監事である者の任期については、改正後の第13条第5項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則(令和3年3月23日議決)

変更後の定款は、山梨県知事の認可を受けた日から施行する。

附 則(令和4年6月17日議決)

変更後の定款は、山梨県知事の認可を受けた日から施行する。

別表(第30条関係)

1. 土地

所在地	地目	面積 (㎡)
都留市田原一丁目507-1	宅地	1,666.03
都留市田原三丁目1575-1	学校用地	20,170.83
都留市田原三丁目1575-3	学校用地	1,326.06
都留市田原三丁目1575-8	学校用地	18,485.00
都留市田原三丁目1575-12	学校用地	63.00
都留市田原三丁目1575-14	学校用地	4,090.00
都留市田原三丁目1575-15	学校用地	860.00
都留市田原三丁目1575-16	学校用地	6.47
都留市田原三丁目1581-1	学校用地	28.00
都留市田原三丁目1595-1	学校用地	750.00
都留市田原三丁目1660-6	学校用地	297.00

所在地	地目	面積 (㎡)
都留市田原三丁目1660-7	学校用地	337.00
都留市田原三丁目1660-8	学校用地	449.00
都留市田原三丁目1660-9	学校用地	446.00
都留市田原三丁目1669-3	学校用地	4,789.00
都留市田原四丁目927-5	学校用地	2,367.00
都留市田原四丁目927-9	雑種地	661.00
都留市上谷喜和多久保1572-1	学校用地	10,699.00
都留市上谷山ノ神1862-2	学校用地	8,479.00
都留市上谷山ノ神1862-3	学校用地	6,153.00
都留市田原三丁目978-3	宅地	10,070.05
都留市田原四丁目905-11	宅地	2,021.00

2. 建物

名称	所在地	構造	延床面積 (㎡)
本部棟	都留市田原三丁目1575-1	鉄筋コンクリート造陸屋根5階建	4,329.15
1号館	都留市田原三丁目1575-1	鉄筋コンクリート造陸屋根4階建	5,986.19
2号館	都留市田原三丁目1575-8	鉄骨鉄筋コンクリート造ステンレス銅板ぶき6階建	2,424.23
3号館	都留市田原三丁目1575-1	鉄筋コンクリート造ステンレス銅板ぶき陸屋根5階建	2,970.57
4号館	都留市田原三丁目1575-1	鉄筋コンクリート造陸屋根2階建	1,871.75
コミュニケーションホール	都留市田原三丁目1575-1	鉄筋コンクリート造ステンレス銅板ぶき3階建	1,033.41
学生ホール	都留市田原三丁目1575-1	鉄筋コンクリート造陸屋根2階建	244.06
学生ホール屋外便所	都留市田原三丁目1575-1	コンクリートブロック造陸屋根平家建	5.20
購買棟	都留市田原三丁目1575-1	鉄骨造陸屋根平家建	211.00
守衛室	都留市田原三丁目1575-1	鉄骨造陸屋根平家建	15.51
第2クラブ棟	都留市上谷喜和多久保1572-1	木造スレートぶき平家建	149.63
第3クラブ棟	都留市上谷喜和多久保1572-1	木造スレートぶき平家建	149.05
美術研究棟	都留市上谷喜和多久保1572-1	鉄骨鉄筋コンクリート造陸屋根2階建	1,491.48
自然科学棟	都留市上谷喜和多久保1572-1	鉄筋コンクリート造陸屋根6階建	1,770.48
窯芸室	都留市上谷喜和多久保1572-1	コンクリートブロック造亜鉛メッキ銅板ぶき平家建	52.65
体育館	都留市田原三丁目1575-14	鉄骨造亜鉛メッキ銅板ぶき平家建	1,738.56
体育館更衣室	都留市田原三丁目1575-14	鉄骨造亜鉛メッキ銅板ぶき平家建	262.45
附属図書館	都留市田原三丁目1669-3	鉄骨鉄筋コンクリート造ステンレス銅板ぶき4階建	4,539.87
弓道場	都留市上谷山ノ神1862-2	鉄骨造亜鉛メッキ銅板ぶき平家建	105.99
屋外便所	都留市上谷山ノ神1862-2	鉄筋コンクリート造亜鉛メッキ銅板ぶき平家建	21.90
大学会館	都留市田原一丁目507	鉄筋コンクリート造陸屋根4階建	1,407.98
音楽研究棟	都留市田原四丁目927-5	鉄筋コンクリート造亜鉛メッキ銅板ぶき地下1階付3階建	2,112.20
旧南都留合同庁舎事務所	都留市田原三丁目978-3	鉄筋コンクリートブロック造陸屋根4階建	3,452.00
旧南都留合同庁舎倉庫	都留市田原三丁目978-3	軽量鉄骨造亜鉛メッキ銅板ぶき平家建	447.14
旧南都留合同庁舎物置	都留市田原三丁目978-3	鉄筋コンクリートブロック造陸屋根平家建	32.56

都留文科大学 歴代役職者名 (平成27年-令和7年)

		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
理事長		大谷 哲夫 横内 正明(H28.2～)	横内 正明	横内 正明	横内 正明
副理事長(学長)		福田 誠治	福田 誠治	福田 誠治	福田 誠治
理事(事務局長)	総務・経営企画担当	高部 剛	谷内 治彦	谷内 治彦	谷内 治彦
理事(副学長)	学生・教育担当	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳
理事(副学長)	学術・研究担当	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司
非常勤理事		渡辺 利夫 大谷 哲夫(H28.2～)	大谷 哲夫	大谷 哲夫	大谷 哲夫
非常勤理事		酒井 利光	酒井 利光	酒井 利光	酒井 利光 小林 重雄(H30.10～)

監 事

非常勤監事		信田 恵三 鶴田 和雄(H27.8～)	鶴田 和雄	鶴田 和雄	鶴田 和雄
非常勤監事		青山 伸一	青山 伸一	宮本 和之	宮本 和之

経営審議会

理事長		大谷 哲夫 横内 正明(H28.2～)	横内 正明	横内 正明	横内 正明
副理事長(学長)		福田 誠治	福田 誠治	福田 誠治	福田 誠治
理事(事務局長)	総務・経営企画担当	高部 剛	谷内 治彦	谷内 治彦	谷内 治彦
理事(副学長)	学生・教育担当	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳
理事(副学長)	学術・研究担当	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司
非常勤理事		渡辺 利夫 大谷 哲夫(H28.2～)	大谷 哲夫	大谷 哲夫	大谷 哲夫
同窓会代表		桐井 幸雄	桐井 幸雄	桐井 幸雄	桐井 幸雄 加藤 一雄(H30.8～)
経営精通者		金巻 裕	金巻 裕	金巻 裕	金巻 裕
総務課長		谷内 治彦	矢嶋 亘	矢嶋 亘	矢嶋 亘
経営企画課長		齊藤 浩稔	齊藤 浩稔	齊藤 浩稔	小宮 文彦

教育研究審議会

副理事長(学長)		福田 誠治	福田 誠治	福田 誠治	福田 誠治
理事(副学長)	学生・教育担当	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳
理事(副学長)	学術・研究担当	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司
理事(事務局長)	総務・経営企画担当	高部 剛	谷内 治彦	谷内 治彦	谷内 治彦
非常勤理事		酒井 利光	酒井 利光	酒井 利光	酒井 利光 小林 重雄(H30.10～)

令和元(平成31)年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
横内 正明	福田誠治	山下 誠	山下 誠	山下 誠	山下 誠	山下 誠
福田 誠治	藤田 英典	藤田 英典	藤田 英典	加藤 敦子	加藤 敦子	加藤 敦子
深澤 祥邦	深澤 祥邦	齊藤 浩稔	田中 正樹	田中 正樹	田中 正樹	小宮 文彦
阿毛 久芳	杉本 光司	杉本 光司	加藤 敦子	佐藤 明浩	佐藤 明浩	佐藤 明浩
新保 祐司	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	春日 由香	春日 由香
大谷 哲夫	大谷 哲夫	山中 伸一	山中 伸一	山中 伸一	山中 伸一	山中 伸一
小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄

渡辺 和廣	渡辺 和廣	渡辺 和廣	渡辺 和廣	渡辺 和廣 田邊 護(R5.8~)	田邊 護	田邊 護
宮本 和之	宮本 和之	宮本 和之	宮本 和之	宮本 和之	宮本 和之	宮本 和之

横内 正明	福田 誠治	山下 誠	山下 誠	山下 誠	山下 誠	山下 誠
福田 誠治	藤田 英典	藤田 英典	藤田 英典	加藤 敦子	加藤 敦子	加藤 敦子
深澤 祥邦	深澤 祥邦	齊藤 浩稔	田中 正樹	田中 正樹	田中 正樹	小宮 文彦
阿毛 久芳	杉本 光司	杉本 光司	加藤 敦子	佐藤 明浩	佐藤 明浩	佐藤 明浩
新保 祐司	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	春日 由香	春日 由香
大谷 哲夫	大谷 哲夫	山中 伸一	山中 伸一	山中 伸一	山中 伸一	山中 伸一
加藤 一雄	加藤 一雄	加藤 一雄 河端 雄一(R3.8~)	河端 雄一	河端 雄一	河端 雄一	笹本 忠彦
堀内 敏男	堀内 敏男	堀内 敏男	堀内 敏男	志村 武寛	志村 武寛	志村 武寛
矢嶋 亘	矢嶋 亘	宮下 洋一	横瀬 晴紀	横瀬 晴紀	程原 由和	程原 由和
石川 和広	石川 和広	小澤 初美	小澤 初美	小澤 初美	小俣 昌寛	小俣 昌寛

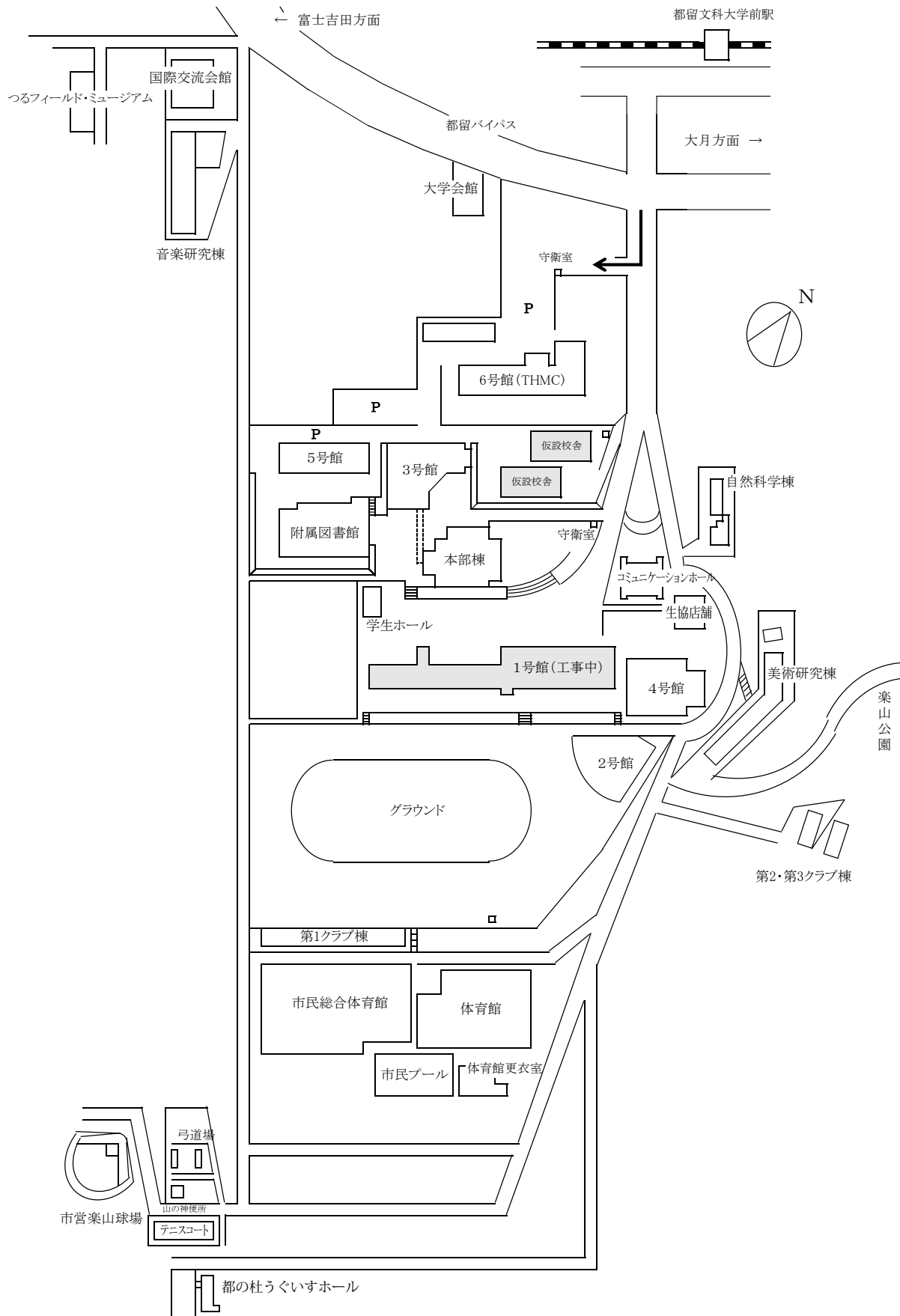
福田 誠治	藤田 英典	藤田 英典	藤田 英典	加藤 敦子	加藤 敦子	加藤 敦子
阿毛 久芳	杉本 光司	杉本 光司	加藤 敦子	佐藤 明浩	佐藤 明浩	佐藤 明浩
新保 祐司	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	春日 由香	春日 由香
深澤 祥邦	深澤 祥邦	齊藤 浩稔	田中 正樹	田中 正樹	田中 正樹	小宮 文彦
小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄	小林 重雄

教育研究審議会

		平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
学長補佐	企画広報部門統括 (R5まで総務担当)	-	-	樋口 雄人	樋口 雄人
学長補佐	教務部門統括 (R5まで教務担当)	中井 均	中井 均	中井 均	西尾 理
学長補佐	学生部門統括 (R5まで学生担当)	大平 栄子	大平 栄子	大平 栄子	加藤 めぐみ
学長補佐	評価・学術研究部門 統括(R5まで評価担当)	平野 耕一	平野 耕一	平野 耕一	平野 耕一
大学院研究科委員長		中地 幸	中地 幸	竹島 達也	竹島 達也
国文学科長		古川 裕佳	古川 裕佳	加藤 敦子	加藤 敦子
英文学科長		鷺 直仁	鷺 直仁	中地 幸	中地 幸
初等教育学科長 (H29まで)		寺川 宏之	寺川 宏之	寺川 宏之	-
学校教育学科長 (H30～)		-	-	-	寺川 宏之
社会学科長 (H29まで)		横田 力	前田 昭彦	前田 昭彦	-
地域社会学科長 (H30～)		-	-	-	高田 研
比較文化学科長		伊香 俊哉	伊香 俊哉	山本 芳美	山本 芳美
国際教育学科長 (H29～)		-	-	新保 祐司	新保 祐司
図書館長		今井 隆	今井 隆	今井 隆	野中 潤
情報センター長		今井 隆	今井 隆	今井 隆	野中 潤
入学センター長		-	-	柳 宏	市原 学
教職支援センター長		田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥 廣田 健(H30.10～)
地域交流研究 センター長		鳥原 正敏	鳥原 正敏	竹下 勝雄	竹下 勝雄
国際交流センター長		大辻 千恵子	大辻 千恵子	大辻 千恵子	大辻 千恵子
語学教育センター長		-	-	茂木 秀昭	豊嶋 朗子
共通教育センター長 (R2～)		-	-	-	-
保健センター長		阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳	阿毛 久芳
キャリア支援 センター長		新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司	新保 祐司
総務課長		谷内 治彦	矢嶋 亘	矢嶋 亘	矢嶋 亘
経営企画課長		齊藤 浩稔	齊藤 浩稔	齊藤 浩稔	小宮 文彦
学生課長(R4まで)		菊地 保	菊地 保	澄川 宏	澄川 宏
教務課長(R5～)		-	-	-	-
学生支援課長(R5～)		-	-	-	-

令和元(平成31)年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
樋口 雄人	樋口 雄人 (~ R2.9)	-	-	-	-	別宮 有紀子
西尾 理	佐藤 明浩	佐藤 明浩	佐藤 明浩	樋口 雄人	樋口 雄人	樋口 雄人
加藤 めぐみ	加藤 めぐみ	加藤 めぐみ	加藤 めぐみ	北垣 憲仁	北垣 憲仁	加藤 めぐみ
平野 耕一	樋口 雄人 (総務と兼務)(~ R2.9)	春日 由香	春日 由香	春日 由香	日向 良和	日向 良和
竹島 達也	竹島 達也	竹島 達也	竹島 達也	古川 裕佳	古川 裕佳	古川 裕佳
加藤 敦子	野中 潤	野中 潤	野中 潤	長瀬 由美	長瀬 由美	野口 哲也
Howel Evans	Howel Evans	三浦 幸子	三浦 幸子	儀部 直樹	儀部 直樹	三浦 幸子
-	-	-	-	-	-	-
鳥原 正敏	鳥原 正敏	鳥原 正敏	鳥原 正敏	別宮 有紀子	別宮 有紀子	水口 潔
-	-	-	-	-	-	-
春日 尚雄	春日 尚雄	春日 尚雄	高橋 洋	西尾 理	西尾 理	田中 里美
山本 芳美	山本 芳美	佐藤 裕	佐藤 裕	菊池 信輝	菊池 信輝	菊池 信輝
原 和久	原 和久	原 和久	原 和久	山辺 恵理子	青山 郁子	青山 郁子
野中 潤	佐藤 明浩	加藤 敦子	佐藤 明浩	春日 由香	春日 由香	春日 由香
野中 潤	杉本 光司	日向 良和	日向 良和	日向 良和	佐藤 裕	佐藤 裕
市原 学	新井 仁	新井 仁	新井 仁	新井 仁	新井 仁	両角 政彦
廣田 健	廣田 健	廣田 健	廣田 健	鳥原 正敏	鳥原 正敏	野中 潤
竹下 勝雄	北垣 憲仁	北垣 憲仁	北垣 憲仁	鈴木 健大	鈴木 健大	鈴木 健大
茂木 秀昭	茂木 秀昭	茂木 秀昭	茂木 秀昭	竹島 達也	加藤 めぐみ	茂木 秀昭
豊嶋 朗子	田中 昌弥	加藤 敦子	加藤 敦子	野中 潤	野中 潤	上原 明子
-	杉本 光司	日向 良和	日向 良和	日向 良和	日向 良和	日向 良和
阿毛 久芳	加藤 めぐみ	加藤 めぐみ	加藤 めぐみ	北垣 憲仁	北垣 憲仁	加藤 めぐみ
新保 祐司	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	田中 昌弥	山本 芳美	山本 芳美
矢嶋 亘	矢嶋 亘	宮下 洋一	横瀬 晴紀	横瀬 晴紀	程原 由和	程原 由和
石川 和広	石川 和広	小澤 初美	小澤 初美	小澤 初美	小俣 昌寛	小俣 昌寛
藤江 隆	中村 さき子	久保田 昌宏	久保田 昌宏	-	-	-
-	-	-	-	上野 剛	上野 剛	上野 剛
-	-	-	-	久保田 昌宏	相川 薫	依田 博江

都留文科大学 施設案内図 (令和7年10月1日現在)



都留文科大学 施設関係(令和7年10月1日現在)

主要建物

名称	完成年月
1号館	昭和41年8月
体育館	昭和47年8月
美術研究棟	昭和49年2月
4号館	昭和52年7月 平成16年9月改修 平成28年1月改修
旧学生会館(令和7年3月まで)	昭和53年10月
生活協同組合	昭和56年3月
本部棟	昭和56年5月
弓道場	昭和56年11月
学生ホール	昭和56年12月
自然科学棟	昭和57年12月
音楽研究棟	昭和60年8月
2号館	平成元年8月
第2クラブ棟	平成2年9月
第3クラブ棟	平成4年12月
コミュニケーションホール	平成4年7月
3号館	平成7年9月
附属図書館	平成15年12月
第1クラブ棟	平成24年12月
国際交流会館	平成28年3月
5号館	平成29年9月
Tsuru Humanities Center (THMC)	令和5年3月
つるフィールド・ミュージアム	令和7年3月

屋外施設

名称	完成年月
グラウンド	昭和41年8月 平成8年11月改修
テニスコート	昭和48年10月 平成18年9月改修

周辺の市営施設

名称	完成年月
都留市民総合体育館	
メイン・サブアリーナ	昭和59年3月 平成27年3月改修
武道場	平成23年2月
都留市民プール	昭和59年3月
楽山球場	昭和61年10月
都の杜うぐいすホール	平成8年8月
やまびこ競技場	平成12年8月
多目的広場	平成18年8月
田原交流センター (nicot)	令和5年3月
つるビーパーク・いこっと	令和7年3月

都留短期大学 学科別卒業生数

(単位:人)

卒業年度	初等教育学科	商経科	年度合計	累計
昭和30年度卒	17	-	17	17
昭和31年度卒	91	36	127	144
昭和32年度卒	182	43	225	369
昭和33年度卒	130	38	168	537
昭和34年度卒	133	22	155	692
昭和35年度卒	141	25	166	858
学科累計	694	164		

都留文科大学 学科別卒業生数

※前期卒業者を含む

(単位:人)

卒業年度	初等教育学科	国文学科	英文学科	社会学科	比較文化学科	国際教育学科	学校教育学科	地域社会学科	年度合計	累計
昭和36年度卒	37	-	-	-	-	-	-	-	37	37
昭和37年度卒	34	-	-	-	-	-	-	-	34	71
昭和38年度卒	85	39	-	-	-	-	-	-	124	195
昭和39年度卒	143	95	-	-	-	-	-	-	238	433
昭和40年度卒	147	70	33	-	-	-	-	-	250	683
昭和41年度卒	190	80	87	-	-	-	-	-	357	1,040
昭和42年度卒	164	82	56	-	-	-	-	-	302	1,342
昭和43年度卒	264	117	110	-	-	-	-	-	491	1,833
昭和44年度卒	217	85	86	-	-	-	-	-	388	2,221
昭和45年度卒	288	133	127	-	-	-	-	-	548	2,769
昭和46年度卒	265	144	129	-	-	-	-	-	538	3,307
昭和47年度卒	267	135	126	-	-	-	-	-	528	3,835
昭和48年度卒	242	122	123	-	-	-	-	-	487	4,322
昭和49年度卒	273	133	131	-	-	-	-	-	537	4,859
昭和50年度卒	303	159	123	-	-	-	-	-	585	5,444
昭和51年度卒	274	134	108	-	-	-	-	-	516	5,960
昭和52年度卒	275	131	149	-	-	-	-	-	555	6,515
昭和53年度卒	301	131	124	-	-	-	-	-	556	7,071
昭和54年度卒	226	134	112	-	-	-	-	-	472	7,543
昭和55年度卒	305	131	136	-	-	-	-	-	572	8,115
昭和56年度卒	291	131	127	-	-	-	-	-	549	8,664
昭和57年度卒	303	142	136	-	-	-	-	-	581	9,245
昭和58年度卒	286	129	126	-	-	-	-	-	541	9,786
昭和59年度卒	220	115	119	-	-	-	-	-	454	10,240
昭和60年度卒	269	120	115	-	-	-	-	-	504	10,744
昭和61年度卒	269	136	130	-	-	-	-	-	535	11,279

卒業年度	初等教育 学科	国文学科	英文学科	社会学科	比較文化 学科	国際教育 学科	学校教育 学科	地域社会 学科	年度合計	累 計
昭和62年度卒	257	138	122	-	-	-	-	-	517	11,796
昭和63年度卒	323	141	125	-	-	-	-	-	589	12,385
平成元年度卒	276	130	130	-	-	-	-	-	536	12,921
平成 2年度卒	257	137	126	76	-	-	-	-	596	13,517
平成 3年度卒	228	119	124	73	-	-	-	-	544	14,061
平成 4年度卒	231	125	116	78	-	-	-	-	550	14,611
平成 5年度卒	226	127	130	87	-	-	-	-	570	15,181
平成 6年度卒	241	127	128	67	-	-	-	-	563	15,744
平成 7年度卒	219	139	124	108	-	-	-	-	590	16,334
平成 8年度卒	177	132	134	105	74	-	-	-	622	16,956
平成 9年度卒	176	124	116	115	84	-	-	-	615	17,571
平成10年度卒	203	138	143	93	79	-	-	-	656	18,227
平成11年度卒	207	132	125	109	81	-	-	-	654	18,881
平成12年度卒	212	158	112	99	91	-	-	-	672	19,553
平成13年度卒	171	138	141	125	92	-	-	-	667	20,220
平成14年度卒	204	145	152	126	119	-	-	-	746	20,966
平成15年度卒	174	120	133	105	112	-	-	-	644	21,610
平成16年度卒	181	154	138	131	109	-	-	-	713	22,323
平成17年度卒	183	110	123	116	97	-	-	-	629	22,952
平成18年度卒	189	130	142	115	99	-	-	-	675	23,627
平成19年度卒	168	118	108	125	123	-	-	-	642	24,269
平成20年度卒	204	124	122	115	118	-	-	-	683	24,952
平成21年度卒	207	99	116	137	108	-	-	-	667	25,619
平成22年度卒	213	124	128	134	118	-	-	-	717	26,336
平成23年度卒	213	139	132	149	128	-	-	-	761	27,097
平成24年度卒	206	131	138	145	115	-	-	-	735	27,832
平成25年度卒	201	129	146	167	114	-	-	-	757	28,589
平成26年度卒	223	134	131	169	112	-	-	-	769	29,358
平成27年度卒	201	129	136	165	113	-	-	-	744	30,102
平成28年度卒	200	128	121	153	124	-	-	-	726	30,828
平成29年度卒	200	131	119	152	125	-	-	-	727	31,555
平成30年度卒	199	143	143	169	129	-	-	-	783	32,338
令和 元年度卒	214	141	127	171	141	-	-	-	794	33,132
令和 2年度卒	193	124	139	170	137	45	-	-	808	33,940
令和 3年度卒	14	124	130	11	119	37	191	148	774	34,714
令和 4年度卒	7	121	130	3	130	44	200	160	795	35,509
令和 5年度卒	0	135	130	2	139	46	195	172	819	36,328
令和 6年度卒	0	125	121	0	136	39	202	159	782	37,110
学科累計	13,136	7,791	7,414	3,865	3,266	211	788	639		

都留文科大学 大学院修了者数

平成7年4月大学院・大学研究科開設(国文学専攻・社会学地域社会研究専攻)

(単位:人)

専攻別 修了年度	臨床 教育実践 学専攻	国文学 専攻	英語 米学専 攻	社会 地社会 学専攻	比較 文化専 攻	専攻 合計	
平成 8年度	平成 15年 4月設 置	5	平成 10年 4月設 置	4	平成 12年 4月設 置	9	
平成 9年度		4		6		10	
平成10年度		4		4		8	
平成11年度		8		2		5	15
平成12年度		1	5	5		11	
平成13年度		5	7	8	4	24	
平成14年度		5	4	6	6	21	
平成15年度		6	5	1	6	18	
平成16年度		6	6	3	4	3	22
平成17年度		5	5	4	7	5	26
平成18年度	10	5	5	8	5	33	
平成19年度	6	3	1	3	2	15	
平成20年度	4	3	1	2	3	13	
平成21年度	3	3	3	1	6	16	
平成22年度	6	3	4	3	4	20	
平成23年度	5	3	3	3	4	18	
平成24年度	5	4	2	2	4	17	
平成25年度	1	2	4	3	3	13	
平成26年度	0	1	6	1	3	11	
平成27年度	1	3	4	8	3	19	
平成28年度	1	4	3	1	2	11	
平成29年度	0	4	4	0	0	8	
平成30年度	1	4	1	3	0	9	
令和元年度	1	1	3	1	0	6	
令和 2年度	2	2	3	2	0	9	
令和 3年度	1	1	5	1	1	9	
令和 4年度	5	2	5	2	0	14	
令和 5年度	8	2	7	1	2	20	
令和 6年度	3	5	1	2	1	12	
累計	74	104	95	97	67	437	

都留文科大学 文学専攻科修了者数

(単位:人)

専攻別 修了年度	教育学 専攻	国文学 専攻	英文学 専攻	専攻 合計	
平成 3年度	7	5	2	14	
平成 4年度	8	1	3	12	
平成 5年度	7	5	1	13	
平成 6年度	12	5	5	22	
平成 7年度	14	1	0	15	
平成 8年度	10	平成 8年 3月31 日廢止	1	11	
平成 9年度	10		1	11	
平成10年度	10		平成 10年 3月31 日廢止		10
平成11年度	8				8
平成12年度	10				10
平成13年度	10				10
平成14年度	7				7
平成15年度	6				6
平成16年度	10				10
平成17年度	8				8
平成18年度	5			5	
平成19年度	12			12	
平成20年度	10		10		
平成21年度	8		8		
平成22年度	8		8		
平成23年度	9		9		
平成24年度	10		10		
平成25年度	5		5		
平成26年度	5		5		
平成27年度	4		4		
平成28年度	5		5		
平成29年度	3		3		
平成30年度	2		2		
令和元年度	2		2		
令和2年度	0		0		
令和3年度	1		1		
令和4年度	3		3		
令和5年度	1		1		
累計	230	17	13	260	

※令和6年3月31日廢止

都留文科大学 卒業生就職状況 (令和7年3月卒業生)

令和7年5月1日 現在 (単位:人)

学 科 項 目	初等教育 学科		国文学科		英文学科		社会学科		比較文化 学科		国際教育 学科		学校教育 学科		地域社会 学科		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
卒 業 生	0	0	17	108	42	79	0	0	28	108	7	32	74	128	88	71	256	526
	0		125		121		0		136		39		202		159		782	
就職希望者	0	0	12	91	37	72	0	0	20	91	6	28	67	117	79	67	221	466
	0		103		109		0		111		34		184		146		687	
小 学 校	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	49	89	0	1	49	92
	0		0		1		0		0		1		138		1		141	
中 学 校	0	0	2	5	2	4	0	0	0	0	0	1	6	2	6	2	16	14
	0		7		6		0		0		1		8		8		30	
高等 学 校	0	0	0	9	2	5	0	0	0	0	1	0	2	0	2	2	7	16
	0		9		7		0		0		1		2		4		23	
特 別 支 援 学 校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	1	0	1	5
	0		0		0		0		0		0		5		1		6	
私 学	0	0	1	4	1	0	0	0	0	0	1	6	1	3	1	0	5	13
	0		5		1		0		0		7		4		1		18	
小 計	0	0	3	18	5	10	0	0	0	0	2	8	58	99	10	5	78	140
	0		21		15		0		0		10		157		15		218	
公 務 員	0	0	0	14	4	9	0	0	2	13	0	3	2	7	25	23	33	69
	0		14		13		0		15		3		9		48		102	
企 業	0	0	9	53	27	52	0	0	18	75	4	17	6	11	43	38	107	246
	0		62		79		0		93		21		17		81		353	
自 営 業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1
	0		0		0		0		0		0		1		1		2	
就 職 者 計	0	0	12	85	36	71	0	0	20	88	6	28	67	117	78	67	219	456
	0		97		107		0		108		34		184		145		675	
進 学	0	0	3	10	3	3	0	0	4	12	1	3	3	10	4	2	18	40
	0		13		6		0		16		4		13		6		58	
受 験 準 備	0	0	1	2	1	2	0	0	0	1	0	0	2	0	3	0	7	5
	0		3		3		0		1		0		2		3		12	
就 職 し な い 者	0	0	1	5	1	2	0	0	4	4	0	1	2	1	2	2	10	15
	0		6		3		0		8		1		3		4		25	
未 定	0	0	0	6	1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	2	10
	0		6		2		0		3		0		0		1		12	
未 提 出	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0		0		0		0		0		0		0		0		0	

卒業生の教員就職者数の推移 (昭和41年3月以降)

(単位:人)

卒業年月	初等教育 学科	国文学科	英文学科	社会学科	比較文化 学科	国際教育 学科	学校教育 学科	地域社会 学科	合計	累計
昭和41年3月卒	121	51	17	-	-	-	-	-	189	189
昭和42年3月卒	158	54	52	-	-	-	-	-	264	453
昭和43年3月卒	130	47	34	-	-	-	-	-	211	664
昭和44年3月卒	178	71	55	-	-	-	-	-	304	968
昭和45年3月卒	163	46	31	-	-	-	-	-	240	1,208
昭和46年3月卒	245	84	62	-	-	-	-	-	391	1,599
昭和47年3月卒	241	106	63	-	-	-	-	-	410	2,009
昭和48年3月卒	244	100	85	-	-	-	-	-	429	2,438
昭和49年3月卒	205	90	71	-	-	-	-	-	366	2,804
昭和50年3月卒	246	95	66	-	-	-	-	-	407	3,211
昭和51年3月卒	223	108	66	-	-	-	-	-	397	3,608
昭和52年3月卒	217	93	59	-	-	-	-	-	369	3,977
昭和53年3月卒	211	75	65	-	-	-	-	-	351	4,328
昭和54年3月卒	225	90	56	-	-	-	-	-	371	4,699
昭和55年3月卒	185	95	62	-	-	-	-	-	342	5,041
昭和56年3月卒	228	93	68	-	-	-	-	-	389	5,430
昭和57年3月卒	199	76	66	-	-	-	-	-	341	5,771
昭和58年3月卒	220	77	68	-	-	-	-	-	365	6,136
昭和59年3月卒	180	71	57	-	-	-	-	-	308	6,444
昭和60年3月卒	137	69	59	-	-	-	-	-	265	6,709
昭和61年3月卒	140	57	49	-	-	-	-	-	246	6,955
昭和62年3月卒	140	59	49	-	-	-	-	-	248	7,203
昭和63年3月卒	103	57	38	-	-	-	-	-	198	7,401
平成元年3月卒	172	51	38	-	-	-	-	-	261	7,662
平成 2年3月卒	151	43	44	-	-	-	-	-	238	7,900
平成 3年3月卒	130	45	41	9	-	-	-	-	225	8,125
平成 4年3月卒	119	37	30	8	-	-	-	-	194	8,319
平成 5年3月卒	136	38	31	5	-	-	-	-	210	8,529
平成 6年3月卒	93	21	21	3	-	-	-	-	138	8,667
平成 7年3月卒	80	16	32	3	-	-	-	-	131	8,798
平成 8年3月卒	47	15	24	7	-	-	-	-	93	8,891
平成 9年3月卒	36	21	20	2	-	-	-	-	79	8,970
平成10年3月卒	40	9	15	6	-	-	-	-	70	9,040
平成11年3月卒	25	7	10	3	-	-	-	-	45	9,085
平成12年3月卒	35	14	10	5	-	-	-	-	64	9,149
平成13年3月卒	58	14	8	4	-	-	-	-	84	9,233
平成14年3月卒	61	16	12	3	-	-	-	-	92	9,325
平成15年3月卒	84	24	15	9	-	-	-	-	132	9,457
平成16年3月卒	76	13	11	1	-	-	-	-	101	9,558

卒業年月	初等教育 学科	国文学科	英文学科	社会学科	比較文化 学科	国際教育 学科	学校教育 学科	地域社会 学科	合計	累計
平成17年3月卒	99	25	14	13	-	-	-	-	151	9,709
平成18年3月卒	101	9	18	9	-	-	-	-	137	9,846
平成19年3月卒	96	14	17	9	-	-	-	-	136	9,982
平成20年3月卒	91	16	20	11	-	-	-	-	138	10,120
平成21年3月卒	110	21	13	9	-	-	-	-	153	10,273
平成22年3月卒	118	22	17	12	-	-	-	-	169	10,442
平成23年3月卒	111	19	31	15	-	-	-	-	176	10,618
平成24年3月卒	122	23	26	22	-	-	-	-	193	10,811
平成25年3月卒	115	22	28	13	-	-	-	-	178	10,989
平成26年3月卒	111	27	30	22	-	-	-	-	190	11,179
平成27年3月卒	142	26	22	16	1	-	-	-	207	11,386
平成28年3月卒	121	25	27	27	1	-	-	-	201	11,587
平成29年3月卒	118	23	17	19	0	-	-	-	177	11,764
平成30年3月卒	113	23	16	23	3	-	-	-	178	11,942
平成31年3月卒	134	23	17	16	0	-	-	-	190	12,132
令和 2年3月卒	127	24	20	19	0	-	-	-	190	12,322
令和 3年3月卒	118	15	17	16	0	13	-	-	179	12,501
令和 4年3月卒	7	16	17	0	1	5	122	14	182	12,683
令和 5年3月卒	3	13	12	0	0	6	138	22	194	12,877
令和 6年3月卒	0	18	15	0	0	10	121	17	181	13,058
令和 7年3月卒	0	21	15	0	0	10	157	15	218	13,276
学科累計	7,639	2,573	2,069	339	6	44	538	68		

過去十年間の就職率の推移 (平成27年度～令和6年度)

(単位:人)

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成30年 令和元年	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年
卒業者数A	754	726	727	783	794	808	774	795	819	782
就職希望者数B	631	619	609	683	704	681	684	689	701	687
就職決定者数C	605	600	601	654	688	671	657	671	689	675
大学院等進学者数D	40	36	35	28	28	38	44	43	51	47
就職率 C/B×100	95.9%	96.9%	98.7%	95.8%	97.7%	98.5%	96.1%	97.4%	98.3%	98.3%
就職決定率 (C+D)/A×100	85.5%	87.6%	87.5%	87.1%	90.2%	87.7%	90.6%	89.8%	90.4%	92.3%
C 内 訳	企業就職者数	344	345	339	385	397	381	373	367	355
	教員就職者数	201	177	178	190	190	179	182	181	218
	公務員就職者数	60	78	84	79	101	111	102	141	102

都留文科大学 在学生数(令和7年度)

令和7年5月1日現在

学部

(単位:人)

学科名		1年次			2年次			3年次			4年次			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
文学部	国文学科	26	108	134	36	121	157	43	104	147	31	117	148	136	450	586
	英文学科	49	86	135	49	100	149	49	89	138	54	89	143	201	364	565
	比較文化学科	-	1	1	3	4	7	42	85	127	36	99	135	81	189	270
	国際教育学科	-	-	0	1	4	5	9	33	42	13	40	53	23	77	100
教養学部	学校教育学科	64	143	207	88	134	222	67	120	187	83	129	212	302	526	828
	地域社会学科	80	94	174	85	101	186	97	69	166	93	79	172	355	343	698
	比較文化学科	39	99	138	54	98	152	-	-	0	-	-	0	93	197	290
	国際教育学科	14	34	48	14	33	47	-	-	0	-	-	0	28	67	95
合計		272	565	837	330	595	925	307	500	807	310	553	863	1,219	2,213	3,432

大学院

(単位:人)

専攻名	1年次			2年次			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
国文学専攻	1	5	6	2	2	4	3	7	10
社会学地域社会研究専攻	2	1	3	1	3	4	3	4	7
英語英米文学専攻	2	1	3	4	5	9	6	6	12
比較文化専攻	0	2	2	5	2	7	5	4	9
臨床教育実践学専攻	2	3	5	3	4	7	5	7	12
合計	7	12	19	15	16	31	22	28	50

その他

(単位:人)

	男	女	計
科目等履修生	1	1	2
聴講生	8	4	12
研究生	2	0	2
交換留学生	10	22	32
大学院研究生	2	1	3
大学院特別研究生	0	0	0
大学院聴講生	0	0	0
大学院科目等履修生	0	0	0

※T-SAP含む

都留文科大学 学科別入学試験志願者一覽

(単位:人)

年度	国文学科			英文学科			学校教育学科 (初等教育学科)			地域社会学科 (社会学科)			比較文化学科			国際教育学科		
	募集	志願者	倍率	募集	志願者	倍率	募集	志願者	倍率	募集	志願者	倍率	募集	志願者	倍率	募集	志願者	倍率
平成16年度	100	1,219	12.2	100	1,136	11.4	150	1,516	10.1	100	743	7.4	90	624	6.9	-	-	-
平成17年度	100	1,091	10.9	100	1,013	10.1	150	1,161	7.7	100	721	7.2	100	1,021	10.2	-	-	-
平成18年度	120	1,365	11.4	120	1,345	11.2	180	1,716	9.5	120	632	5.3	120	1,056	8.8	-	-	-
平成19年度 ^{*1}	120	890	7.4	120	823	6.9	180	1,313	7.3	150	870	5.8	120	797	6.6	-	-	-
平成20年度	120	1,100	9.2	120	827	6.9	180	1,188	6.6	150	676	4.5	120	632	5.3	-	-	-
平成21年度	120	1,057	8.8	120	915	7.6	180	1,193	6.6	150	731	4.9	120	702	5.9	-	-	-
平成22年度	120	1,123	9.4	120	934	7.8	180	1,396	7.8	150	1,016	6.8	120	1,003	8.4	-	-	-
平成23年度 ^{*2}	120	1,031	8.6	120	789	6.6	180	1,274	7.1	150	887	5.9	120	782	6.5	-	-	-
平成24年度	120	1,007	8.4	120	636	5.3	180	1,286	7.1	150	795	5.3	120	619	5.2	-	-	-
平成25年度	120	1,052	8.8	120	841	7.0	180	873	4.9	150	719	4.8	120	671	5.6	-	-	-
平成26年度	120	858	7.2	120	701	5.8	180	865	4.8	150	624	4.2	120	806	6.7	-	-	-
平成27年度	120	1,149	9.6	120	914	7.6	180	799	4.4	150	592	3.9	120	591	4.9	-	-	-
平成28年度	120	1,094	9.1	120	912	7.6	180	890	4.9	150	896	6.0	120	789	6.6	-	-	-
平成29年度 ^{*3}	120	924	7.7	120	818	6.8	180	2,105	11.7	150	898	6.0	120	807	6.7	40	213	5.3
平成30年度 ^{*4}	120	875	7.3	120	565	4.7	180	995	5.5	150	1,130	7.5	120	884	7.4	40	183	4.6
令和元年度	120	897	7.5	120	1,254	10.5	180	832	4.6	150	804	5.4	120	503	4.2	40	223	5.6
令和2年度	120	868	7.2	120	586	4.9	180	1,107	6.2	150	670	4.5	120	836	7.0	40	250	6.3
令和3年度 ^{*5}	120	790	6.6	120	391	3.3	180	883	4.9	150	890	5.9	120	603	5.0	40	202	5.1
令和4年度	120	849	7.1	120	593	4.9	180	918	5.1	150	690	4.6	120	663	5.5	40	152	3.8
令和5年度	120	652	5.4	120	572	4.8	180	958	5.3	150	603	4.0	120	521	4.3	40	124	3.1
令和6年度 ^{*6}	120	799	6.7	120	548	4.6	180	974	5.4	150	794	5.3	120	548	4.6	40	211	5.3
令和7年度	120	1,029	8.6	120	688	5.7	180	1,251	7.0	150	921	6.1	120	752	6.3	40	195	4.9

※1 AO入試開始 ※2 センター利用推薦開始 ※3 国際教育学科開設

※4 教養学部開設(初等→学教、現社+環コミ→地社) ※5 共通テスト開始、AO→総合型・推薦→学校推薦型・一般入試→一般選抜

※6 学部改編

都留文科大学 年度別授業料等諸納金一覧

年度	授業料	入学金	入学検定料
平成16年度	520,800円		<ul style="list-style-type: none"> ・ 18,000円(前期・中期) ・ 25,000円(推薦)
平成17年度			
平成18年度			
平成19年度			
平成20年度			
平成21年度			
平成22年度			
平成23年度			<ul style="list-style-type: none"> ・ 18,000円 (前期・中期/ センター利用推薦) ・ 25,000 (推薦)
平成24年度			
平成25年度			
平成26年度			
平成27年度			
平成28年度			
平成29年度			
平成30年度	535,800円		<ul style="list-style-type: none"> ・ 18,000円 (前期・中期/ センター利用推薦/AO) ・ 25,000円(推薦)
令和元年度			
令和 2年度			
令和 3年度			
令和 4年度			
令和 5年度			
令和 6年度			
令和 7年度			

都留文科大学 名誉教授称号授与者

称号番号	氏名	称号辞令年月日
1	大田 堯	昭和59年10月24日
2	上田 薫	平成2年7月11日
3	中山 義典	平成2年7月11日
4	丸山 康雄	平成4年6月10日
5	小熊 均	平成5年1月13日
6	大島 真	平成5年1月13日
7	大久保廣行	平成6年4月1日
8	三上 泰永	平成7年4月1日
9	久保木哲夫	平成7年4月1日
10	白尾 恒吉	平成8年4月1日
11	近藤 幹雄	平成8年4月1日
12	和田 明子	平成8年4月1日
13	一木 昭男	平成9年4月1日
14	有村 裕輔	平成10年4月1日
15	古家 久子	平成10年4月1日
16	中野 猛	平成10年4月1日
17	松本 四郎	平成10年4月1日
18	森江 晃三	平成11年4月1日
19	佐藤 哲哉	平成12年4月1日
20	長 鐵翁	平成13年4月1日
21	関口 安義	平成13年4月1日
22	宗内 敦	平成13年4月1日
23	中村 一夫	平成13年4月1日
24	河西 万文	平成14年4月1日
25	鷲 只雄	平成14年4月1日
26	嶋田 鋭二	平成15年4月1日
27	上杉 陽	平成18年4月1日
28	安宅 正路	平成18年4月1日
29	今泉 吉晴	平成18年4月1日
30	依藤 道夫	平成19年4月1日
31	金子 博	平成20年4月1日
32	小林 重章	平成20年4月1日
33	川上 則道	平成21年4月1日
34	箱石 泰和	平成21年4月1日
35	林 信義	平成21年4月1日
36	平野 英一	平成21年4月1日
37	渡邊十九司	平成22年4月1日

称号番号	氏名	称号辞令年月日
38	山本 安夫	平成23年4月1日
39	加藤 静子	平成23年4月1日
40	吉住 典子	平成23年4月1日
41	高橋 宏幸	平成24年4月1日
42	窪田 憲子	平成24年4月1日
43	田中 実	平成24年4月1日
44	楠元 六男	平成25年4月1日
45	後藤 道夫	平成25年4月1日
46	千葉 立也	平成25年4月1日
47	畑 潤	平成26年4月1日
48	森 博俊	平成26年4月1日
49	稲垣 孝博	平成26年4月1日
50	加藤 祐三	平成27年4月1日
51	高田 理孝	平成27年4月1日
52	相守 光恵	平成27年4月1日
53	阿毛 久芳	平成27年4月1日
54	牛山 恵	平成27年4月1日
55	鳥居 明雄	平成27年4月1日
56	野畑真理子	平成29年4月1日
57	柳 宏	平成30年4月1日
58	今井 隆	平成30年4月1日
59	大平 栄子	平成30年4月1日
60	新保 祐司	平成31年4月1日
61	分田 順子	令和2年4月1日
62	福田 誠治	令和2年4月1日
63	福島佐江子	令和3年4月1日
64	大辻千恵子	令和3年4月1日
65	鶴田 清司	令和3年4月1日
66	杉本 光司	令和4年4月1日
67	鈴木 武晴	令和5年4月1日
68	佐藤 隆	令和5年4月1日
69	藤田 英典	令和5年4月1日
70	寺門日出男	令和6年4月1日
71	清水 雅彦	令和6年4月1日
72	伊香 俊哉	令和7年4月1日
73	筒井 潤子	令和7年4月1日

歴代学長 就任のあいさつ

就任のあいさつ

金子 博

もはや体重10kg減

個人的な心情としては、いちばん避けて通りたかった道ですが、思いがけず学長職を引き受けることになりました。私のような者に学長が務まるのか、大きな不安と重圧を感じています。まだ何をしたというわけでもないのに、体重は10kgほど減りました。いささか付焼刃の感がありますが、「大学はどこへ行く」という類の本や論文を(正直、今までは本屋での購入も二の次でした)読んだりしています。

就任インタビューで

大学が今、難しい局面を迎えていることは皆さんもよくご承知かと思います。すべては少子化に起因することのようにも見えますが、本質的にはやはり今までのツケを払わされる、あるいは払わなければならないという事態なのだと思います。

辞令の交付以来、本学の学生新聞や、また、新聞各社のインタビューを受けました。新学長としての抱負を語らねばならない場面ですが、あまり捗々しい答えは出来ませんでした。「これまでの本学の伝統、財産を活かす」とか、「力のある学生をきちんと育てることこそが唯一、大学が生き残れる改革への道」とか、そんな一般的な答えにとどまりました。先に「付焼刃」と書きましたが、読んだどの本にもそのことが書いてありました。いわば「教育」重視の視点

ですが、キメの細かいよい教育ならば本学の伝統であり得意分野だ、とも思いました。

今教授会で議論されている本学のアイデンティティーのキーワードは、教員養成、地域性、国際性です。これらについては、具体的にかなり進展しているものもありますが、独法化問題、統合問題、学科の再編問題など、いずれも白紙の状態だと言っているかと思います。

逆にチャンスある

ある新聞社の記者は、「国立大学の教員養成学部の統合が動き出している今、この大学には逆にチャンスがあるのでは?」と聞いてきましたので、思わず「いろいろすき間ができるという認識はある」と答えました。むろん、それだけで本学の未来が保証されるわけでもありません。

ともあれ、本学の発展のために、何とかその道筋なりとも見い出すべく、懸命に仕事をしたと思っています。皆さんのご協力、ご支援を切にお願い申し上げて、就任のご挨拶といたします。

(『都留文科大学報』 第84号)

新学長就任のあいさつ

今谷 明

私は横浜市大に18年間勤務しており、その間に都留文大の噂も聞いていました。松本四郎氏は横市大出身で、文大の日本史の教員になられた方です。またかねてより、人口3万余の小都市が大学を直営されている由を承り、畏敬の念を抱くと共に、不思議でたまらなかったこともたしかです。

また本学は、初代学長がかの『大漢和辞典』で有名な諸橋轍次先生、何代目かに日本史の和歌森太郎先生がいらっしゃいます。私は学生時代、修験道のレポートを書いたことがあって、和歌森先生のお名前は早くに知っていました。当時山伏の文献といえば、和歌森先生の『修験道史研究』以外は何もありませんでした。その和歌森先生逝去の報に接したのは私の助手時代で、先輩の横井清氏が知らせて呉れました。和歌森先生の逝去は私達の間では大事件でした。

以上のような大先生の後塵を拝することは嗚呼がましい気がしましたが、「私のような者でもお役に立てるなら」とつい引受けさせられてしまったのは、毎々のことながら私の迂闊なところでした。

立候補を承けてしまった以上、止むを得ません。法人化の件については、前々任地の横浜市大で経験があり、前任地の日文研(国際日本文化研究センター)では、法人化直後の4年間を経験しました。また、加藤祐三・西川幸治の両先生(横市大・滋賀県立大の前学長)を日文研の客員にお招きしていた関係で、公立大学の法人化の問題についてはあらかじめ多少の予備知識がありました。また日文研在任の後半2年間は、日本学術振興会の専門調査員を兼務していまし

て、文科省のお歴々や若手官僚から、種々の情報を得ることが出来ました。しかし基本的には、本学の法人化は前学長時代にルールが敷かれていたことでありまして、私の干与出来ることは限られております。ただ教員の待遇につきましては、不利益にならぬよう、身を張ってでも努力する所存であります。

しかし、問題は法人化などよりも、少子化全入時代の到来で、他大学と激しい競争にさらされていることでありまして、その中で優秀な学生をいかに確保するかということの方が、余程の喫緊事でございます。全学教職員にこの危機感を共有していただくことが何より肝要と考えております。とくにその点は入試関係の先生方にお任せするとして、当面私の出来ることは、大学の知名度を上げることであります。2月に本学学生のインタビューを受けた折も、女子学生から、就活の場で大学の知名度のなさ(会社の幹部に大学名をよく知られていないこと)には情けなくなった、と口説かれた次第です。また私へ祝辞を下すった学者のうち幾人かも「都留文化大学」と書いておられました。

しかし幸い、新聞各紙では好意的に取上げられています。当分の間、私は自分の研究は廃して、大学の宣伝にこれ努める覚悟でありますので、どうか宜しく御支援をお願いしたく存じます。

(『都留文科大学報』 第107号)

学長就任にあたって

加藤 祐三

2010年7月1日、本学学長に就任しました。心が引き締まる思いで、覚悟を新たにしています。

横浜市立大学長を2002年4月に退任した私は、公立大学協会相談役として公立大学の発展のために微力を注いできました。本学の学長を拝命するとは夢にも思わず、まだ学内事情に通じていません。見当違いの面もあると思いますが、いま考えていることの一部を述べたいと思います。

大学とは

4年前の平成18（2006）年12月、じつに60年ぶりに改正された教育基本法の第7条で、大学に関する定めが初めて明記されました。

大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。

前者（第1項）が大学の果たす教育・研究・社会（地域）貢献の3つの「役割」を意味します。私はこれを図示し、「知の三角形」と名づけています。そのうちの教育面では、「高い教養」と「専門的能力」が併記され、両者の比重は各大学が自主的に定めます。

後者（第2項）は憲法の「学問の自由」「大学の自治」に基づく大学の自主・自律性の尊重、と

くに「教育及び研究の特性」の尊重を意味します。

「大学における教育及び研究の特性」を尊重するのは誰でしょうか。「主語」は国家や設置自治体はもとより、大学を構成する教職員・学生、学生の保護者、地域住民、国民です。とりわけ教育研究の直接の担い手である教員こそ、「大学の特性」を自覚的に尊重しなければなりません。

近未来の大学設計

大学進学率の向上、少子高齢化、低成長・成熟期の到来、グローバル化等々、時代は急速に動いています。大学教員は、この時代の変化をいち早く理解する先頭に立つべきでしょう。

法人化した現在、6年間の中期目的・目標・計画を実行するとともに、次期の中期目標・計画を立案する必要があります。先行き不透明な問題を解き明かすには、学内の談論風発が不可欠です。そこには異分野間の刺激的な学術交流も、また多彩な個性の発見もあるはずです。本学教職員の豊かな思考と経験を存分に発揮していただきたい。

全国から多様な地域特性を持って本学に集まった学生は、本学で新たな文化を創造し、やがて社会人として巣立っていきます。受験勉強を終え、大学でも「受信」が必要ではありますが、学生諸君が自らの課題を発見し、それを「発信」していけるよう教育することが重要です。

文科大学と文学部

大学名には大学の個性・特性が込められています。都留文科大学は、大学名に「文科」が入る公立大学で唯一の大学であり、文学部1つの単科大学も本学だけです(文学部を持つ公立大学は全部で7校)。

文科大学といえば、まず想起されるのが、明治19(1886)年の帝国大学令により開設された6種の「分科大学」の1つ、文科大学です。明治期に模範とした西洋の学制のうち、ドイツ(プロシア)の影響が強く、科学を文化科学(文科)と自然科学(理科)に2分、この2種が大学を構成し、法科、医科、工科、農科の4種は専門職養成機関として区別されました。

ところが明治日本の帝国大学は官僚養成が目的であり、「専門的能力」の養成に大学の大きな役割を求めたため、法・医・工を先に、「基礎」的な「高い教養」の基盤である文と理を後ろに並べました。

文科大学は、主に哲・史・文(哲学・史学・文学)で構成されます。普遍妥当な価値とされる「真善美」にそれぞれ対応する学問領域で、すべての学問の基盤となる分野です。

後に生まれる旧制高校は文科と理科の構成で、もっぱら「高い教養」を教えました。一方、英語でいうliberal artsはアメリカでは一般教養教育を、中世欧州では学芸、文芸、人文科学を意味しました。文科はこれにも近いと言えますでしょう。

大正8(1919)年、帝国大学が総合大学になると、文科大学は帝国大学文学部となり、ここで文科が文学部とほぼ同義になりました。また哲・史・文に加えて、心理学、社会学、教育学等を徐々に包摂し、戦後にはアメリカ流の文化人類学等を広く含んで人文科学と総称され、社

会科学(法学・経済・経営等)と区別されます。進学率の上昇に伴い、応用的要素の強い「専門的能力」、つまり文系では社会科学が、理系では工学・農学等が増えました。文学部は軽視されがちですが、理系の理学(物理・化学・生物・数学)と並び、機軸の学問領域であると私は考えます。

本学の特長を伸ばす

本学では長い伝統のなかで卒業論文を必修とする制度が定着しています。卒論作成は、学生が身につける「高い教養」と「専門的能力」の証明書のようなものです。これは本学の誇るべき大きな教育財産です。その一方で、社会人としての大部分の作業過程は「話し言葉」を通じて行われます。コミュニケーション能力は主に「話し言葉」による発信行動です。この技術訓練を入学直後の早期から実施できないものかと考えます。多様な方言を持つ学生諸君が方言の価値を再認識するとともに、共通語との「バイリンガル性」を発揮するなかで、「話し言葉」による「伝える力」を強化させたい。30秒スピーチ、3分スピーチ等、さまざまな手法があるはずで、こうして「社会性」を獲得させ、就職活動にも役立たせたい。教職員の知恵と工夫をいただきたい。なお学生の英語力向上は確かな母国語の上に築かれるのが理想ですが、短い学習時間のなかでどう折り合いをつけるか、これも今後の課題だと考えています。

(『都留文科大学報』 第113号)

学長就任にあたって

福田 誠治

60周年を迎える大学

都留文科大学は、2015年には創立60周年を迎えます。これは短期大学設立から数えてのことですが、臨時教員養成所から数えれば62年となります。以来、本学は教員養成の大学として社会的に評価され、日本中から学生が集まってきました。

始まりの頃は大家さんの家に間借り、次は長屋形式のアパートでした。トイレと炊事場と風呂が共同で、電話に近い部屋の住人が電話番をしたり、都留方式と言って風呂を沸かした者が最初に入ってから名札順に鍵を回すとか、要するに共同生活がありました。ところが、今は、鉄の扉一つで外の世界と隔離されるワンルーム・マンションです。大家さんは市外の人で見たこともなく、不動産屋が管理しています。それでもまだ都留は、人付き合いが濃い学生町です。豊かな自然と人間関係の中で、ある種ゆったりした時間を学生たちは過ごしています。

私の研究

私は40年間、ソビエト・ロシアの教育について研究してきました。国の隅々まで分け隔てなく教育を普及させたことと、すべての教育に男女差をいち早く解消したことは、日本にいと当然のように思えますが、歴史的には注目すべきことです。しかも、たとえイスラム教徒でもベールをかぶらず、ミニスカートで歩いているというのですから、社会主義70年の歴史の存在は大きなものです。東はサハリン、ハバロフスク、北はサハ=ヤクーチア、南はウクライナ

とモルドヴァ、ウズベク、キルギス、カザフ、西はエストニアまで現地調査もしました。

留学は英国バーミンガム大学だったこともあり、英語圏とのつながりで、本学のフィールドワークには、英国の湖水地方や、カナダのプリンスエドワード島にも出かけました。

この10年は、フィンランドの教育を中心テーマにして、EUとOECDの教育政策を研究しています。写真は、フィンランドの様子で、私が撮影したものです。特急列車の中の親子は、ほほえましいので許可を得て撮らせてもらいました。フィンランドでは、こんな小さい子にまでとびっくりする年齢から、いつでもどこでも本の「読み語り(読み聞かせ)」をしています。子どもが小学生のうち、毎晩、寝る前に親が本を読んでもくれます。

冬の間、外は寒くて暗いのですが、それでも休み時間は子どもたちは校舎の外に出されます。もう一枚の写真はその様子で、3月末なので陽射しが強くなっていますが、それでも校庭には雪がたくさん残っていました。

最後の一枚は、全校生徒100人程度の小規模校の工作室です。フィンランドでは物作りとデザインが重視され、日本の図工のような授業が小学1年生からあります。小学生でもグライン



小学校の休み時間、全員外に出される

図工教室、小学生でも工具は本物



ダーを使う金属加工もします。どこの学校にも、電気の焼き釜があります。写真の学校は、小学4年生のクラスの半分が授業を受けている様子ですが、危険を顧みず本物の工具を使っています。こうして、義務教育の間に、紙、布、木、金属の加工を体験します。

北欧諸国は、1991年には教科書検定を廃止しました。教科書はあるのですがそれは一つの教材に過ぎず、教科書に書いてあることを教えずに、教科書以上のことを教えるというのです。というわけで、フィンランドでは、義務教育の間は、他人と比べるテストはありません。勉強は学校の授業のみで、学習塾はありません。夏休みは、70日あり、宿題は1日、2日でできる簡単なもののみです。

こんな場合、教師の仕事は、人生に必要な知識や技能を選択して上手に配置し、目の前にいる子どもたちに合うように最善の教材を用意し、一人ひとりの子どもたちの学びを支援することです。その専門性が「ペダゴジー(教育学)」と呼ばれています。先進国の教育は、子ども自らが学び、教師はそれを支援するという活動型に変化しているわけです。

これからの都留文科大学

10年、20年といった単位で考えれば、教師もまた国境を越えて働くようになっていると思います。その場合、国民を育てるという教育目

標は自立した個人を育てるというものに変わってでしょう。日本の学習指導要領も多様化され、教材や教科書は教師自身が選択したり作成したりすることが当たり前になり、多様な人間を育てられるだけの幅広い教養が教師には必要になってくるでしょう。日本の職場でも英語が使われ、外国人教師が公立学校にも入ってくることになり、本学の卒業生たちも、日本だけでなく諸外国に働きに出かけることでしょう。

日本人は、勤勉さとともにシステムを動かすチームワークの力が培われています。その力は、グローバルに労働者が展開する時代には貴重な能力となるでしょう。

そのためには、本学の伝統を生かし、都留という人間関係の濃密な地域で、「教員養成」と「グローバルリズム」と「地域の人材」をミックスさせ、世界的視野と教養を持ちながら、協同する力を携え、外国も含めて地域で活躍する人間が育つ、そんな大学運営をしていきたいと思います。

(『都留文科大学報』 第125号)

学長就任の挨拶

藤田 英典

この度は、ご縁をいただき、教員養成はもとより、公官庁や民間企業などにも豊かな知性と感性を備えた幾多の人材を輩出してきた伝統ある都留文科大学の学長に就任することになりましたこと、光栄に思い感謝申し上げます。

都留文科大学の特徴は、地元県出身1割、非地元県出身9割という学生の出身地別構成にあります。北は北海道から南は沖縄まで、全都道府県から概ね人口規模に対応して満遍なく集まり学んでいます。この特徴は、山紫水明の豊かな自然と城下町の面影や10基もある松尾芭蕉の句碑に象徴される豊かな歴史・伝統・文化などと相まって、豊かな教育・学びの基盤になっていると思います。また、郊外型の小規模大学という特徴は、学生同士の豊かなつながり・交流はもちろん、学生と教職員との関係も〈顔の見える関係〉として展開する基盤にもなっていると思います。学生と教員が例えば人生や教養を語り合う機会も豊かでしょう。そうした豊かな環境の下、学生さんたちには、キャンパス・ライフをエンジョイしつつ、仲間や教職員と関わり切磋琢磨し、自信と誇りを育み成長していくことを期待しております。

本学は、1960年に4年制大学に移行して以来、「菁莪育才」を学訓として、当初からの初等教育学科と国文学科に加えて、英文学科(1963年)、社会学科(1987年)、比較文化学科(1993年)の新設と定員増、大学院修士課程の新設(1995年)と専攻増設による拡充を進めてきましたが、さらに近年は、前任の福田誠治学長のリーダーシップの下、国際教育学科の新設(2017年)、初等教育学科の学校教育学科への

改組(2018年)、社会学科の地域社会学科への改組(2018年)と、国際交流会館の完成(2016年)、IB Universityに認定(2016年)や、中国・アメリカ・北欧諸国の大学との交換留学制度や語学研修プログラムの開始など、教育体制の充実が図られてきました。

また、福田学長時代に浮上し、都留市のご尽力により計画された本学に隣接する旧合同庁舎の改築と、国の「日本版CCRC: Continuing Care Retirement Community (継続的なケア付き高齢者共同体)」政策の下に都留市が進めている「生涯活躍のまち・つる」複合型居住プロジェクトの事業予定敷地内に本学の学生寮などの施設整備を予定しております。

以上のように、福田学長時代に学科の新增設や改組と建物の改築・新築が進められてきましたので、今後は、その内容面のより一層の充実と、急ピッチで進められたことに伴う教員配置のアンバランス等の解消を図っていくことが課題であろうと考えています。

その課題は必ずしも容易でない面もありますが、これまでの発展を支えてきた学訓「菁莪育才」を踏まえ、さらなる発展を期して最善を尽くしてまいる所存です。至らぬ面も少なからずあるかと思いますが、教職員をはじめ関係各位のご協力・ご支援を賜ることができるなら、この上ない幸いです。

(『都留文科大学報』第143号)

第15代学長として

加藤 敦子

この度、公立大学法人都留文科大学の学長・副理事長に就任いたしました。どうぞよろしくお願いたします。第15代の学長とのことで、本学の歴史と伝統の重みを改めて感じております。

昨年4月に副学長・理事を拝命し、この1年間、大学の様々な課題に取り組んで参りました。国内の少子化、18歳人口の減少により、日本の大学は競って志願者確保の努力を続けています。教員の働き方に対するネガティブな情報の拡散により、教員養成に実績のある本学の強みに陰りが生じています。コロナ禍における地元志向の高まりは、全国47都道府県から学生が集まる本学にとって逆風となっています。

このような厳しい状況の中で、意欲ある高校生・受験生に本学を選んでもらうには、都留で学んでよかった、都留で成長できた、と学生が実感できるような教育を推進していくしかありません。そのために、カリキュラム、授業内容、施設設備、学生支援等、あらゆる面からさらなる教育の質の向上を目指したいと考えております。

この4月には、Tsuru Humanities Center (THMC)がオープンしました。VRや3Dプリンターなど最新のデジタル機器を備えたデジタルコモンズ、より実践的な模擬授業や研究授業を可能とする小学校の現場を再現した教室、机や椅子のレイアウトを自由に変更できるPBL（課題解決型学習）やアクティブ・ラーニングに適した演習室を活用し、学生も教員も都留の新たな学びを展開していきます。

さらに、令和6年度には学部改編を予定して

います。2学部6学科体制は変わりませんが、文学部は国文学科・英文学科の2学科、教養学部は学校教育学科・地域社会学科・比較文化学科・国際教育学科の4学科とし、各学部の特色を明確に打ち出していきます。同時にカリキュラム改訂を行い、副専攻プログラムを導入します。副専攻プログラムでは学部・学科の垣根を越えた学びも可能とし、例えば「デジタルシティズンシップ」のプログラムでは、どの学部・学科に所属する学生もデータサイエンスを学ぶことができます。

4年の任期を通して、教員養成・人材育成を旨としてきた本学の伝統を守りつつ、社会の変化や要請に応じて学生たちが現代社会の課題解決に取り組む力を身につけることができるような教育環境を整える施策を進めて参ります。

関係の皆様方におかれましても、なにとぞご支援ご協力下さいますよう、また、ご意見ご叱正賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

（『都留文科大学報』第152号）

公開講座(市民講座)のあゆみ

※印の講座は、子ども公開講座(都留市教育委員会主催「放課後子ども教室事業」と連携

年度	月 日	日間数	タイトル	参加数 (延べ)
平成15年度	10/12・19・11/2・9	4日間	言葉と文化	人数不明
平成16年度	10/13・20・27・ 11/6・10	5日間	ジェンダーの意味を探る旅(1)	人数不明
平成17年度	1/11・18・25・2/1	4日間	ジェンダーの意味を探る旅(2) —ことば・空間・関係性—	59
平成18年度	12/2・9・16・ 1/13・27	5日間	英米文学からみた「土地と文学」	77
平成19年度	10/10・17・24・31	4日間	千年を生きる源氏物語 —多様な展開—	105
平成20年度	11/12・19・26・12/3	4日間	東アジアと日本 —ヒトと文化の交流の現在—	56
	11/22	1日間	イギリスの伝統歌曲とクリスマスコンサート — 英国大使館合唱団都留公演	89
平成21年度	8/1・8/2	2日間	夏休み親子で楽しい自然・科学教室	73
平成22年度	8/5	1日間	夏休み親子で楽しい自然・科学教室	27
	11/1・8・15・22	4日間	政権交代1年を向かえた民主党政権と今後の日本	65
平成23年度	8/12	1日間	Hello！英語でワクワク	18
平成24年度	8/20	1日間	小学生と英語で楽しもう！「Hello！英語でワクワク2012」	13
平成25年度	9/30・10/7・21・28・ 11/11・18・25・ 12/2・9・16	10日間	British Culture (イギリスの文化)	227
	6/30	1日間	都留は自然の博物館 ※	21
	8/1	1日間	音楽を楽しもう！ ※	23
	8/6	1日間	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう！ ※	37
	8/9	1日間	読み聞かせから読書の楽しさを(宝小学校) ※	17
	8/19	1日間	Hello！英語でワクワク ※	28
	10/3	1日間	折り紙を使った算数 ※	8
	1/6	1日間	読み聞かせから読書の楽しさを(谷二小学校) ※	13
平成26年度	8/5	1日間	かたちをつくろう ※	30
	8/6	1日間	葉脈しおりの入ったしたじきを作ろう！ ※	27
	8/11・19・20・21	4日間	読み聞かせから読書の楽しさを ※	73
	8/18	1日間	Hello！英語でワクワク ※	29
	8/18	1日間	楽しく走ろう！ Run,RUN,ラン！ ※	27
	12/7・14	2日間	ムササビに会いに行こう！ ※	30
平成27年度	8/7	1日間	Hello！英語でワクワク ※	25
	8/10	1日間	楽しく走ろう！ Run,RUN,ラン！ ※	29

年度	月 日	日間数	タイトル	参加数 (延べ)	
平成27年度	8/12	1日間	留学生と遊ぼう！ ※	34	
	8/13	1日間	富士山の中の水の旅 ※	17	
	12/5	1日間	ムササビに会いに行こう！ ※	15	
	1/5	1日間	読み聞かせから読書の楽しさを ※	30	
平成28年度	5/20	1日間	プラス思考の生徒指導への転換 ～ポジティブな行動に注目し「チーム学校」で取り組む～ (第1回地域教育相談室)	68	
	6/4・11	2日間	佐藤夢加かけっこ教室	94	
	6/9	1日間	『未来の先生』を目指す君へ 日本を変える国際バカロレア教育を知ろう！	35	
	7/30	1日間	森の動物のふしぎ ※	6	
	8/17	1日間	留学生とあそぼう！ ※	29	
	8/20	1日間	富士山の中の水の旅 ※	8	
	10/11・18・25	3日間	日本文学から世界文学へ —夏目漱石と多和田葉子の鉄道小説を読む— (第1回) 夏目漱石と多和田葉子の異郷体験	84	
	12/7・14	2日間	都留市の水環境—地下水学の基礎と東桂地区の水環境— (第1回)地下で水はどのように流れているか	24	
	2/4	1日間	構成的グループエンカウンター ～人間関係形成に活用するグループアプローチ～ (第2回地域教育相談室)	18	
	平成29年度	5/19・26・ 11/10・18	4日間	ムササビ観察会	80
		6/2	1日間	子どもが主役の学級づくり ～主体的・対話的で深い学びにつなぐ仕掛け～	85
7/5		1日間	病いの経験と学校 —小児がん経験者の「語り」を通して考える—	43	
8/9・10		2日間	佐野夢加かけっこ教室	40	
12/16		1日間	発達障害と学校教育～発達障害児のライフステージを 踏まえた支援の在り方、学校教育の役割を考える	229	
12/20		1日間	都留市東桂地区の湧水環境	12	
7/27		1日間	陶レリーフ製作 ※	29	
7/27		1日間	試験管の中に虹っぽいものや雪っぽいものを作ろう ※	27	
8/5		1日間	読書の楽しさを知る ※	15	
8/7		1日間	英語を使って遊ぼう！ ※	34	
11/11		1日間	森の木の実を集めよう！ ※	18	
平成30年度		5/26・6/8・10/27・ 11/16・17・12/1	6日間	ムササビ観察会 (10/20は猛暑のため延期、10/27はガールスカウトのみ)	96
		6/9	1日間	熊本県の地下保全の取り組み—熊本地震の経験から—	29
		7/21	1日間	木工工作教室 ※	26

年度	月 日	日間数	タイトル	参加数 (延べ)
	7/21	1日間	英語で遊ぼう！ ※	25
平成30年度	8/5	1日間	新しい読書のかたち ※	25
	8/7 (猛暑延期)・ 8 (猛暑延期)・ 12/25・26	2日間	かけっこ教室	70
	8/10	1日間	サッカー教室 ※	猛暑の ため中止
	11/11	1日間	森の木の実を集めよう！ ※	18
	12/19	1日間	暮らしのとなりにある水-東桂地区用水路の夏と冬-	12
平成31年度 令和元年度	5/25・8/31・ 11/16・30・12/4	5日間	ムササビ観察会	98
	6/8・10/6	2日間	十日市場・夏狩湧水さんぽ	27
	6/16	1日間	サッカー教室 ※	22
	7/27	1日間	英語で遊ぼう	29
	7/27	1日間	作って遊べる工作教室 ※	19
	7/28	1日間	陶芸教室 ※	18
	8/6	1日間	インターネットを使った読書の楽しみ方 ※	10
	8/7	1日間	理科実験教室 ※	18
	10/19 (台風により中止)	1日間	星空観察会	
	11/16	1日間	森の木の実を見つけてみよう！ ※	18
	12/1	1日間	かけっこ教室	30
	1/25	1日間	DIGITALずこうしつ ワークショップ	9
	3/20	1日間	化学を体験：キラキラ銀のグラスを作ろう！	新型コロナ の影響で 中止
令和2年度	1/14	1日間	星空観察会	新型コロナ の影響で 中止
	2/28	1日間	佐野夢加かけっこ教室	新型コロナ の影響で 中止
令和3年度	6/11	1日間	星空講演会	42
	7/22	1日間	ユーチューバーになろう！ ～アイパッドのむかし話しチャンネル～ ※	25
	7/23	1日間	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室 ※	19
	7/24	1日間	木を使って工作しよう！ ※	15
	7/25	1日間	陶芸にチャレンジ ※	14
	7/25	1日間	佐野夢加 かけっこ教室 (共催：都留市教育委員会オリンピック・パラリンピック ホストタウン事業)	30

※印の講座は、子ども公開講座(都留市教育委員会主催「放課後子ども教室事業」と連携

年度	月 日	日間数	タイトル	参加数 (延べ)
	7/31	1日間	ドライアイスのふしぎ ～やさしい科学実験～ ※	13
令和3年度	11/6	1日間	十日市場・夏狩湧水さんぽ	33
	11/11	1日間	星空観察会	10
	11/13	1日間	英語であそぼう！	10
	11/20	1日間	自然とのふれあい ※	9
	12/1・4	2日間	ムササビ観察会	13
令和4年度	7/9	1日間	湧水さんぽ	7
	7/23・27・10/15・22・ 11/12・19	6日間	ムササビ観察会	89
	7/17	1日間	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室 ※	18
	7/24	1日間	佐野夢加 親子かけっこ教室	19
	7/30	1日間	木工教室 ※	9
	7/31	1日間	陶芸にチャレンジ ※	15
	8/16	1日間	色の不思議 ～カラフルレインボーカラーを作ろう～ ※	12
	9/3	1日間	ユーチューバーになろう ※	18
	9/24	1日間	手作り石鹸やキャンドルを作ろう ※	29
	9/29・12/17	2日間	星空観察会(講演会)	21
	10/22	1日間	英語であそぼう！	9
	12/3	1日間	自然とのふれあい ※	16
令和5年度	7/22・29・10/21・28・ 11/18・12/2	6日間	ムササビ観察会	86
	7/2	1日間	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室 ※	11
	7/23	1日間	佐野夢加 親子かけっこ教室	30
	7/29	1日間	英語であそぼう！	15
	7/29	1日間	陶芸教室 ※	12
	8/10	1日間	人口知能(AI)を使ってポスターを作ろう ※	12
	8/16	1日間	光の不思議 万華鏡ブラック・ウォールに挑戦しよう ※	13
	10/14	1日間	手作り石鹸やキャンドルを作ろう ※	32
	10/19・11/16	2日間	星空観察会	26
	10/28	1日間	湧水さんぽ	7
	11/18	1日間	つるぶんカフェ	9
	12/9	1日間	自然とのふれあい ※	インフル エンザ 蔓延のため 中止

※印の講座は、子ども公開講座(都留市教育委員会主催「放課後子ども教室事業」と連携

年度	月 日	日間数	タイトル	参加数 (延べ)
	1/21	1日間	光の不思議	15
令和6年度	6/30	1日間	オリンピックと走ろう！佐野夢加のかけっこ教室 ※	21
	7/20・27・11/9・16・ 12/14	5日間	ムササビ観察会	87
	7/27	1日間	英語であそぼう！	8
	7/28	1日間	佐野夢加 親子かけっこ教室	35
	8/16	1日間	重さのふしぎ — 言うことを聞く金魚とスノードームに挑戦しよう— ※	12
	9/7	1日間	デザインアプリCanvaでおもしろいものを作ろう！ ※	25
	10/12	1日間	手作り石鹸やキャンドルを作ろう(午前・午後) ※	34
	11/16	1日間	湧水さんぽ	6
	11/30	1日間	VR体験・レーザーカッターでデジタル工作(午前・午後) ※	36
	12/7	1日間	星空観察会	15
	1/11	1日間	つるぶんカフェ	11
令和7年度	5/25	1日間	いきものかんさつはおもしろい！	6
	6/20	1日間	介護予防教室 転ばぬ先の杖	4
	6/22	1日間	ロンドンオリンピック選手と走ろう！ 佐野夢加のかけっこ教室 ※	17
	7/24	1日間	英語であそぼう	12
	8/19	1日間	音のふしぎ — ソーゴーパープとカスタネットに挑戦しよう— ※	9
	8/20	1日間	ゴムと空気のふしぎ — バルーンヘリコプターとパタパタ飛行機に挑戦しよう— ※	14
	9/13	1日間	Canvaでつくるワークショップ ※	25
	11/1	1日間	ポルトガル語でこんにちは！ ～ことばで世界とつながろう～ ※	7
	11/8	1日間	湧水さんぽ	6
	11/8	1日間	サバイバル・サイエンス・キャンプ	19

現職教育講座のあゆみ

年度	月 日	日間数	テーマ	参加数 (延べ)	備考
平成15年	8/1～3	3日間	今日の子どもの抱える「問題」にどう向き合うか	305人	
平成16年	7/29～31	3日間	子ども理解と教育実践	267人	
平成17年	7/27～29	3日間	困難を抱えた子どもの理解と学校	375人	
平成18年	8/2～4	3日間	教師の子ども理解と学習指導		
平成19年	8/1～3	3日間	教師の子ども理解と学習指導		
平成20年	7/30～31	2日間	教師の子ども理解と学習指導	64人	7/31・8/1は免許状更新講習予備講習を兼ねる
平成21年	7/29～31	2日間	教師の子ども理解と学習指導		
平成22年	7/28～29	2日間	教師の子ども理解と学習指導		
平成23年	7/28～29	2日間	教師の子ども理解と学習指導	43人	
平成24年	7/26～27	2日間	教師の子ども理解と学習指導	81人	
平成25年	7/25～26	2日間	教師の子ども理解と学習指導	51人	4講座
平成26年	7/24～25	2日間	教師の子ども理解と学習指導	61人	4講座
平成27年	7/27～28	2日間	教師の子ども理解と学習指導	73人	4講座
平成28年	7/25～26	2日間	教師の子ども理解と学習指導	50人	
平成29年	7/24～25	2日間	教師の子ども理解と学習指導		
平成30年	7/25	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	173人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(10年経験者研修)」の選択講座
令和 元年	7/24	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	101人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(11年経験者研修)」の選択講座
令和 2年	7/28	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	57人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(12年経験者研修)」の選択講座
令和 3年	7/26	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	80人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(13年経験者研修)」の選択講座
令和 4年	7/25	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	62人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(14年経験者研修)」の選択講座
令和 5年	7/31	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	76人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(15年経験者研修)」の選択講座
令和 6年	7/29	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	110人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(16年経験者研修)」の選択講座
令和 7年	7/28	1日	中堅教諭等資質向上研修『道徳性の涵養』『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』	110人	2講座、山梨県総合教育センター「中堅教諭等資質向上研修(17年経験者研修)」の選択講座

県民コミュニティーカレッジのあゆみ

年度	月 日	日間数	テーマ	参加数 (延べ)
平成15年	11/15・22・29・12/5・6	5日間(毎土曜)	地域・記憶・物語-地域の来し方、行方を照らし出す	不明
平成16年	11/6・13・20・12/4・11	5日間(毎土曜)	本という文化に親しむ	107人
平成17年	9/3・4・10/1・2・11/20	5日間(土・日曜)	「アート」(芸術)にふれる	不明
平成18年	10/7・14・18・21・28	5日間(水・土曜)	フィンランド月間 ～教育と文化を探る	206人
平成19年	10/18・25・11/8・15・22	5日間(毎木曜)	もっとパソコンを活用してみよう	75人
平成20年	10/9・16・30・11/13・20	5日間(毎木曜)	”自然の力”をまちの力に	116人
平成21年	10/6・13・20・27・11/12・19	6日間(毎木曜)	文学作品を通して、現代日本の諸問題を考える	67人
平成22年	10/1・8・15・26	4日間(毎金曜)	多元的社会のあり方 ～国内外の事例を通して学ぶ～	31人
平成23年	11/12・19・12/3・10	4日間(毎土曜)	都留の自然と暮らし ～自然と共生したまちづくりのために～	31人
平成24年	10/2・16・30・11/13・27	5日間(毎火曜)	イギリスの文化	49人
平成25年	10/5・10/19	2日間(毎土曜) 4回	健康に役立つ音楽の不思議な力	148人
平成26年	10/18・25	2日間(毎土曜) 4回	映画から見る韓国事情	93人
平成27年	11/8・14	2日間(土・日) 4回	映画で学ぶ欧州小国の歩み	80人
平成28年	9/17・10/15・11/19・12/3	4日間(毎土曜)	いきいきと幸せに生きるために： 心理学のすすめ	147人
平成29年	10/18・11/15・12/13・1/17	4日間(毎水曜)	日本映画の歴史と美学	87人

平成29年度末にて「県民コミュニティーカレッジ」講座終了

大学沿革

創立60周年から70周年のあいだに 2015-2025年^(敬称略)

年	月 日	本学の出来事
平成27年 (2015年)	2月 2日	● イギリス、オックスフォード・ブルックス大学との大学教職員並びに学生の交換交流に関する協定を締結
	4月 1日	● 大学基準協会の認証評価の結果、大学評価を「適合」と認定される
	4月 1日	● 天使のおもちゃ図書はばたき・都留文科大学地域交流センターにおける「障がい児福祉事業」についての連携・協力協定締結、ぶどうの会・都留文科大学地域交流研究センターにおける「障がい児福祉事業」についての連携・協力協定締結
	4月 9日	● 学生を対象に100円朝食開始
	5月 30日	● 都留文科大学Presents YBSラジオスペシャルドラマ「生と死の狭間に～戦場ジャーナリスト山本美香～」(18:00～19:00)が放送される。(※2015年日本民間放送連盟賞の関東甲信越静岡地区審査会において、エンターテイメント部門の1位に選出。第11回日本放送文化大賞の関東甲信越静岡地区合評会において、ラジオ部門の地区代表に選出)
	6月 10日	● 都留文科大学創立60周年記念 学生サークル Trinity主催 第14回つる白熱教室「増田寛也講演会～都留の未来を考える～」を開催
	6月 27日	● 都留文科大学創立60周年記念 辻村深月原作「ツナグ」映画上映会と本人によるトークイベントを開催(地域交流研究センター主催、「文大名画座」共催)
	6月 28日	● 都留文科大学創立60周年記念 由紀さおり・安田祥子ファミリーコンサート(賛助出演・都留文科大学合唱団)都の杜うぐいすホールにて開催
	7月 1日	● オーストラリア、タスマニア大学と交換留学及び協定校留学に関する協定を締結
	8月 21日	● 「国際交流会館」起工式
	10月 10日	● 都留文科大学創立60周年記念式典・記念講演会開催。講演：山中伸一氏(前文部科学省事務次官)「これからの社会と教育」
	10月 10日	● 60周年記念式典において愛唱歌「都留はuniverse」が初披露される
	10月 22日	● 都留市と都留文科大学、健康科学大学、山梨県立産業技術短期大学校による「大学コンソーシアムつる」が設立される
	11月 21日	● 合唱団が第68回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに文部科学大臣賞(最高位)を受賞
平成28年 (2016年)	1月 31日	● 大谷哲夫理事長退任
	2月 1日	● 元法務副大臣、元山梨県知事横内正明が理事長に就任
	2月 29日	● 松本四郎名誉教授と高橋宏幸名誉教授による、都留文科大学大学院創立20周年記念座談会を開催
	3月 9日	● アメリカ、カリフォルニア大学と学術交流協定を締結
	3月 24日	● 「国際交流会館」完成
	4月 28日	● 地域交流研究センターとCOC推進機構が4号館1階に移転し、リニューアルオープン
	8月 22日	● 市立札幌開成中等教育学校と国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結
	8月 31日	● 学校法人仙台育英学園と国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結
	9月 16日	● リンデンホールスクール中高等学校と国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結

年	月 日	本学の出来事
平成28年 (2016年)	10月 26日	● IB機構よりIB University に認定される
	11月 19日	● 合唱団が第69回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに日本放送協会賞を受賞
平成29年 (2017年)	4月 1日	● 国際教育学科が開設される。定員40名
	4月 1日	● 入学センター、語学教育センターが設置される
	4月 1日	● 特別支援学校教員免許課程が開設される
	5月 25日	● 山梨学院高等学校と国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結
	8月 9日	● 都留国際文学祭2017を開催
	9月 26日	● 「5号館」完成
	11月 25日	● 合唱団が第70回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに文部科学大臣賞を受賞
平成30年 (2018年)	2月 21日	● アメリカ、セント・ノーバート大学と学術交流協定を締結
	3月 14日	● スペイン、サラマンカ大学と交換留学に関する協定、国際協定を締結
	4月 1日	● 初等教育学科を学校教育学科、社会学科を地域社会学科に改編し、両学科からなる教養学部を設置。中学校理科・数学の教員免許取得が可能となる
	7月 1日	● 月江寺学園と連携事業に関する協定書を締結 株式会社ウブントゥ森のようちえんと連携事業に関する協定書を締結
	7月 23日	● LCA国際学園と連携事業に関する協定書を締結
	8月 13日	● 国際教育学科の北欧交換留学プログラムが開始される
	9月 5日	● 上越教育大学と連携・協力に関する協定を締結
	11月 24日	● 合唱団が第71回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに日本放送協会賞を受賞し、10年連続金賞の表彰を受ける
	平成31年 令和元年 (2019年)	3月 22日
7月 19日		● 山梨大学、山梨県立大学、山梨学院大学、山梨英和大学とともに山梨経済同友会と産学連携協力に関する協定書を締結
8月 8・9日		● 第1回教職実践研修会を開催
9月 19日		● マレーシア、サインズ・マレーシア大学と学術交流協定を締結
12月 6日		● 富士急行線谷村町駅に駅舎を活用した「ぶらっとはうす」を開設
12月 19日		● フランス、トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学と交換留学協定を締結
令和2年 (2020年)	3月 19日	● 日本における新型コロナウイルス感染拡大の影響により卒業式中止
	4月 1日	● 福田誠治元学長が理事長に就任
	4月 1日	● 藤田英典が学長に就任
	4月 1日	● 新型コロナウイルス感染症等対策本部設置
	4月 3日	● 入学式中止
	4月 8日	● 緊急事態宣言を受けて、学生の大学施設への立ち入りを禁止 4月22日から5月6日まで遠隔授業のみ実施を決定

年	月 日	本学の出来事
令和2年 (2020年)	5月20日	● 6月以降も前期については各科目で遠隔授業を続行することなどの方針を示し、遠隔授業受講のための教室利用を一部開始
	5月20日	● 英文学科卒業生大城早紀様からマスク寄贈(500枚)
	6月16日	● 学内サイトのコロナに関する情報を集約するため、公式ホームページにコロナ特設ページを開設
	7月1日	● 学校法人コリア国際学園中等部・高等部と国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結 学校法人奈良育英学園育英西中学校・高等学校との国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結
	11月17日	● 学校法人理知の杜松本国際高等学校と国際バカロレア教育推進のための連携協定書を締結
令和3年 (2021年)	4月1日	● 山下誠が理事長に就任
	9月7日	● 「THMC(Tsuru Humanities Center)」工事安全祈願祭を行う
	10月30日	● 吹奏楽部が第69回全日本吹奏楽コンクールに初出場し銀賞を受賞
	11月20日	● 合唱団が第74回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに文部科学大臣賞を受賞
令和4年 (2022年)	3月24日	● 令和3年度県政功績者表彰式にて本学が県政功績者として山梨県知事から表彰を受ける
	4月1日	● 交換留学生受け入れ再開
	5月18日	● 富士急行株式会社及び都留市と都留文科大学の三者による持続可能な地域づくりの推進に関する連携協定を締結
令和5年 (2023年)	1月10日	● カナダ、リジャイナ大学と交換留学協定を締結
	2月2日	● ベルギー、PXL応用科学芸術大学と交換留学協定および学術交流協定を締結
	3月28日	● 新校舎「THMC(Tsuru Humanities Center)」落成記念式典
	3月31日	● 藤田英典学長退任
	4月1日	● 加藤敦子副学長、学長に就任
	4月1日	● 「THMC」供用開始
	6月6日	● ローソン都留文科大学店オープン
	6月24日	● 鶴鷹祭を4年ぶりに開催
	11月25日	● 合唱団が第76回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに日本放送協会賞を受賞
令和6年 (2024年)	1月29日	● スウェーデン、ダーラナ大学と交換留学協定を締結
	2月7日	● 中国、北京理工大学と交換留学協定を締結
	2月10日	● 比較文化学科創立30周年記念シンポジウム「共生と記憶の比較文化論—ともにつくる歴史と現在」開催
	2月22日	● イタリア、ナポリ東洋大学と交換留学協定を締結
	3月30日	● ベルギー、アントワープ大学と交換留学協定を締結
	4月1日	● 文学部を国文学科と英文学科の2学科、教養学部を学校教育学科、地域社会学科、比較文化学科、国際教育学科の4学科の構成に改編

年	月 日	本学の出来事
令和6年 (2024年)	4月 1日	● Tsuru副専攻プログラムとして10のプログラムを開設
	4月 1日	● 西桂町教育委員会と学生アシスタント・ティーチャー (SAT)活動に関する協定書を締結
	4月 17日	● 中国、西北大学外国語学院と交流に関する協定を締結
	4月 23日	● 株式会社クスリのサンロード、都留市、南都留森林組合及び一般社団法人Forest Tribesと森林整備の実施に関する協定を締結
	4月 26日	● 「つるフィールド・ミュージアム」の建設に着工
	7月 1日	● 韓国、啓明大学校と交流に関する協定書を締結
	7月 4日	● 韓国、世宗大学校と交流に関する協定書を締結
	7月 18日	● 韓国、誠信女子大学校と交流に関する協定書を締結
	10月 31日	● 株式会社クスリのサンロードとの包括連携協定を締結
	11月 23日	● 合唱団が第77回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて金賞ならびに文部科学大臣賞(最高位)を受賞
	12月 10日	● 地域交流研究センター地域インクルーシブ教育分野(クロスボーダープロジェクト・キャリアデザインワーク)が令和6年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰の功労者表彰を受賞
	令和7年 (2025年)	1月 28日
3月 19日		● 大学創立70周年記念モニュメント除幕式
4月 20日		● ホームカミングデー開催
4月 29日		● 「つるフィールド・ミュージアム」落成式
5月 7日		● 在学中の大学院生の研究を支援する「都留文科大学大学院学生研究費交付金」制度を創設
7月 12日		● 都留文科大学創立70周年記念イベントとしてロバート キャンベル氏、佐藤文香氏による俳句ワークショップ「時空を超える俳句～よむことの本質を探る～」を開催
8月 1日		● 都留市と連携しふるさと納税を利用したクラウドファンディング「“未来の先生”を育てたい！都留文科大学の歴史ある学び舎をリニューアル」を開始
8月 12日		● 学生支援課学生担当窓口が本部棟2階から4号館1階に移転
8月 19日		● なんでも相談窓口を開設
9月 18日		● 1号館改修工事着工
9月 30日		● 株式会社ANA総合研究所と包括連携に関する基本協定を締結
10月 8日		● 富士急行線都留文科大学前駅にて駅メロディお披露目式を開催
10月 11日		● 創立70周年記念式典・講演会を開催。日本文学研究者ロバートキャンベル氏講演「国内外の災害見聞記録から問う人文学の現在地」
11月 8日		● ミュージアム都留にて企画展「地域の中の大学 ―都留文科大学の歴史とこれから―」を開催(会期 2025年11月8日～2026年2月1日)
11月 19日		● 「つるフィールド・ミュージアム」が令和7年度山梨県建築文化賞建築文化奨励賞を受賞
11月 22日		● 合唱団が第78回全日本合唱コンクール全国大会大学ユース合唱の部にて2年連続・通算7回目となる金賞ならびに文部科学大臣賞(最高位)を受賞

鶴鷹祭成績一覽

都留文科大学・高崎経済大学 総合体育対抗戦成績

通算成績 都留文科大学 25勝 高崎経済大学 22勝 引き分け 2

[勝=○ 敗=× 引き分け=▲]

第1回	都留大	×	○	高経大	
第2回	都留大	○	×	高経大	
第3回	都留大	×	○	高経大	
第4回	都留大	×	○	高経大	
第5回	都留大	×	○	高経大	
第6回	都留大	×	○	高経大	
第7回	都留大	×	○	高経大	5対10 ▲
第8回	都留大	×	○	高経大	
第9回	都留大	▲	▲	高経大	10対10
第10回	都留大	○	×	高経大	13対7
第11回	都留大	×	○	高経大	10対11
第12回	都留大	○	×	高経大	17対4 1▲
第13回	都留大	○	×	高経大	12対8 2▲
第14回	都留大	○	×	高経大	14対7
第15回	都留大	○	×	高経大	10対6
第16回	都留大	○	×	高経大	12対7
第17回	都留大	○	×	高経大	13対7
第18回	都留大	○	×	高経大	9対5 3▲
第19回	都留大	▲	▲	高経大	9対9 1▲
第20回	都留大	○	×	高経大	10対8
第21回	都留大	○	×	高経大	11対9
第22回	都留大	○	×	高経大	12対6 1▲
第23回	都留大	○	×	高経大	10対9 1▲
第24回	都留大	○	×	高経大	12対8
第25回	都留大	×	○	高経大	10対11
第26回	都留大	○	×	高経大	12対5
第27回	都留大	×	○	高経大	8対12
第28回	都留大	○	×	高経大	11対10
第29回	都留大	×	○	高経大	7対12
第30回	都留大	×	○	高経大	9対11
第31回	都留大	×	○	高経大	8対12
第32回	都留大	○	×	高経大	12対9
第33回	都留大	×	○	高経大	6対13
第34回	都留大	○	×	高経大	12対10
第35回	都留大	×	○	高経大	10対12
第36回	都留大	○	×	高経大	18対6
第37回	都留大	○	×	高経大	12対10
第38回	都留大	×	○	高経大	10対13
第39回	都留大	○	×	高経大	13対10
第40回	都留大	○	×	高経大	12対11
第41回	都留大	○	×	高経大	13対9
第42回	都留大	○	×	高経大	11対9
第43回	都留大	×	○	高経大	8対14
第44回	都留大	×	○	高経大	8対12
第45回	都留大	×	○	高経大	9対13
第46回	都留大	×	○	高経大	8対11
第47回	都留大	×	○	高経大	9対10
第48回	都留大	×	○	高経大	7対13
第49回	都留大	○	×	高経大	10対9

都留文科大学 創立70周年記念事業期成会

会長	山下 誠	理事長
副会長	加藤 敦子	学長(副理事長)
	笹本 忠彦(R6)	同窓会長
	渡邊 正司(R7)	〃
顧問	桐井 幸雄	同窓会副会長
	杉中 康平	〃
	渡邊 正司(R6)	〃
	奥脇 美穂(R7)	〃
	小山田 拓也	〃
	奥脇 美穂(R6)	同窓会事務局長
	梶原 裕一郎(R7)	〃
参与	藤本 裕子	附属小学校長
監事	田邊 護	監事
	宮本 和之	〃
学生代表	高野 葵(R6)	学生自治会拡大執行委員長
	天生目 楓真(R7)	〃
事務局長	程原 由和	総務課長
会計	鈴木 いづみ	総務課長補佐兼同窓会事務局
	長坂 美和	学生支援課長補佐
書記	鈴木 さやか	総務課庶務人事担当
	柴田 寛子	同窓会事務局

各部長・副部長については、それぞれの部会にて記載する。

総務部会

部会長	田中 正樹(R6)	事務局長(理事)
	小宮 文彦(R7)	〃
副部会長	相川 薫(R6)	学生支援課長
	依田 博江(R7)	〃
部員	日向 良和	学長補佐
	寺門 日出男	特任教授
	鈴木 いづみ	総務課長補佐兼同窓会事務局
	鈴木 さやか	総務課庶務人事担当
	北浦 麻奈美(R6)	〃
	渡邊 大貴(R7)	〃
	井上 邦男	経営企画課情報センター担当
	坂 泉樹	教務課教務担当
	飯沼 章	教務課教職担当
	山本 結(R7)	学生支援課学生担当
	柴田 寛子	同窓会事務局

事業部会

部会長	春日 由香	副学長(理事)
副部会長	小俣 昌寛	経営企画課長
部員	樋口 雄人	学長補佐
	吉岡 卓	広報委員長
	鈴木 健大	地域交流研究センター長
	山越 英嗣	比較文化学科
	畠山 勝太	国際教育学科
	平 和香子	学校教育学科
	三澤 知貴(R6)	経営企画課補佐兼入試室長
	有賀 ひとみ(R7)	〃
	安富 博史	経営企画課企画・広報担当
	天野 麻由(R6)	〃
	栗賀 暁(R7)	〃
	奥脇 開斗	〃
	青木 敦生	教務課教務担当
	木下 翔太	経営企画課入試担当
	舟久保 薫	学生支援課キャリア支援センター担当

この他、学生15名にも協力いただいた。

記念誌編集部会

部会長	佐藤 明浩	副学長(理事)
副部会長	上野 剛	教務課長
部員	寺門 日出男	特任教授
	北垣 憲仁	地域交流研究センター
	菊地 優美	学校教育学科
	原田 真喜子(R7)	地域交流研究センター
	程原 由和	総務課長
	清水 友美子(R6)	教務課長補佐
	志村 高男(R7)	〃
	松尾 陽子	総務課図書館担当
	藤原 達生	〃
	小林 倭央	〃
	柴田 寛子	同窓会事務局

財務部会

部会長	程原 由和	総務課長
副部会長	長坂 美和	学生支援課長補佐
	三澤 知貴(R6)	経営企画課補佐兼入試室長
	有賀 ひとみ(R7)	〃
	高橋 眞智子	総務課会計契約担当
	関戸 浩子	〃
	宮澤 洋輔	総務課財務法制担当
	古屋 道輝	学生支援課学生担当
	大房 美奈(R7)	〃
	山本 結(R7)	〃
	高野 裕介	学生支援課キャリア支援センター担当(R7)
	舟久保 薫(R7)	〃

※所属については令和7年度時点

編集後記

都留文科大学創立70周年記念誌編集部会長 佐藤 明浩

都留市立短期大学の創立から70周年にあたる2025年度、記念式典・記念講演会をはじめとするさまざまな記念事業が催されました。その一環として、70周年記念誌を作成し、ここにお届けいたします。記念式典催行にあわせて刊行するのも一案でしたが、この度は、記念事業の記録も収録すべく、年度末の発行となりました。

先日、かつて私の担当するゼミに所属していた同窓生と久しぶりに会いました。今から28年前、私が都留文科大学の教員として着任した年度の3年生、すなわち初めて本学で受け持ったゼミ生のひとりです。彼女は国文学科を卒業し、医療関係の職に就きました。その分野で仕事を続けるなかで、診療情報管理士の資格を取得し、さらに大学院博士後期課程でも学んで博士(診療情報管理学)の学位を取得しました。また原著論文が学術大会で表彰されることもありました。一見すると大学で専攻した国文学とは無縁の分野で活躍しているのですが、全く無関係でもないようです。話を聞きながら、大学時代に得た自らを成長させる術が卒業後も生かされたと解釈しました。もっとも、いろいろなことが私の記憶から消えていることがわかりました。その同窓生は、在学中、卒業後の進路として大学院への進学も考えていると言ったところ、私は即座にやめておけと言ったというのです。もはや全く記憶に無いのですが、おそらく、当時、研究者を目指すのは世を捨てるような、堅実な道ではないという考えがあったせいでしょう。まったくもって無責任な話ですが、現在、自分の仕事に誇りをもって活躍しているのは、うれしいことです。

上記の場合、加齢により私の記憶力が衰えに起因しているでしょうが、一方、さまざま話をするなか、ああそういえばと思い出すことも多くありました。ともあれ、記憶を記録にとどめておけば、いつでも共有できますので、その意義の大きさを思われます。同窓生の方々にはそれぞれにユニークで大切な思い出があり、大学入学前、在学中、卒業後とそれぞれのストーリーがあることに思いをはせています。本記念誌「V. 70年を振り返る 思い出を語る 同窓生より」に同窓生の皆様の思い出と現在のご様子をお寄せいただきましたのはたいへんありがたいことです。

昨年4月のホームカミングディには、約120名の同窓生が集われました。その懇親会の折、かつての大学周辺、谷村駅周辺の地図を掲示し、思い出の店や下宿の箇所にはエピソードやメッセージを書いた付箋を貼っていただきました。多くの方々が積極的に寄せてくださり、たくさんの思い出が集まりました。その一部も、本記念誌に収録することができました。この度は、大学の70年を振り返ることはもちろん、同窓生の皆様にとって思い出深い、都留のまちの風景、学生生活の今昔を視覚的な資料を交えて観ることができることも企図しま

した。同窓生の皆様、地域の方々には、どこかに往事を思い出す様子を見出していただけたなら幸いです。現役の学生さんには、今とは随分異なる昔の様子、一方、今でもずっと変わらないところなど、大学と都留をさらによく知る糸口になればと願っています。

昨年10月の70周年記念式典・講演会には、ロバート・キャンベル氏をお招きして、ご講演いただきました。多くの同窓生、また地域の方々にも出席していただけて、うれしく思います。一方、現役の学生さんの参加が意外に少なく、もっと事前に周知をはかっておくのだったと反省しています。キャンベル氏の講演はたいへん豊かな示唆に富むものでした。本学の根幹でもある人文知を探究する意義、また、人文知をもって問題解決の道を探る意義を心に沁み入るような語り口でお示しくださったと受けとめています。本記念誌には内容の詳細まで紹介する紙幅がありませんでした。式典・講演会の動画は、どなたにもご覧いただけますので、とくに出席できなかった方々には視聴をお勧めいたします。(文末QR参照)

本記念誌作成にあたり、ご協力いただきましたすべての方々に感謝し、お礼申し上げます。それぞれの記事を執筆してくださった皆様、本当にありがとうございます。また、この度は、短期大学時代の同窓生、大学初期の同窓生の方々に、貴重なお話をうかがうことができました。地域の方々にも往事を思い出させていただける興味深いお話をうかがうことができました。貴重なお時間をいただきありがとうございます。インタビューの取材に協力してくださった学生さんにも感謝しております。そして、多くの方々から往事の写真等、貴重な資料をご提供いただきました。承諾いただきましたものはデジタル化するなどして大学と都留の大切な記録として長く保存し、利用させていただきます。内輪の話になりますが、編集に尽力した記念誌編集部会の部会員一人ひとりにも感謝しております。記念誌編集のために定年退職後にもかかわらず任を負っていただきました寺門日出男特任教授にはさまざまなアイデアや知見を提供いただきました。記念誌には載せられない(?)さまざまな話をうかがえたことも楽しく思い出されます。

多くの方々のご協力により、本記念誌は創立70周年を記念し「色とりどりのミライへ。」が随所に見えてくる内容になっているかと思えます。

この度は、デジタル版を作成したことでもあり、ひとりでも多く方々にご覧いただけますことを願っております。



都留文科大学創立70周年記念
式典・講演会動画
<https://70th.tsuru.ac.jp/news/1214/>

都留文科大学創立70周年記念誌

色とりどりのミライへ。

発行 2026年3月25日

編集者 都留文科大学創立70周年記念誌編集部会

佐藤 明浩・上野 剛・寺門 日出男・北垣 憲仁

菊地 優美・原田 真喜子・程原 由和・志村 高男

松尾 陽子・藤原 達生・小林 倭央・柴田 寛子

発行者 都留文科大学

〒402-8555 山梨県都留市田原三丁目8-1

TEL (0554) 43-4341(代表)

印刷所 株式会社 佐野印刷

〒402-0052 山梨県都留市中央二丁目7-3

TEL (0554) 43-1611